

東京高等蚕糸學校五十年史



291.5

18



0052023000

0052023-000

291.5-18

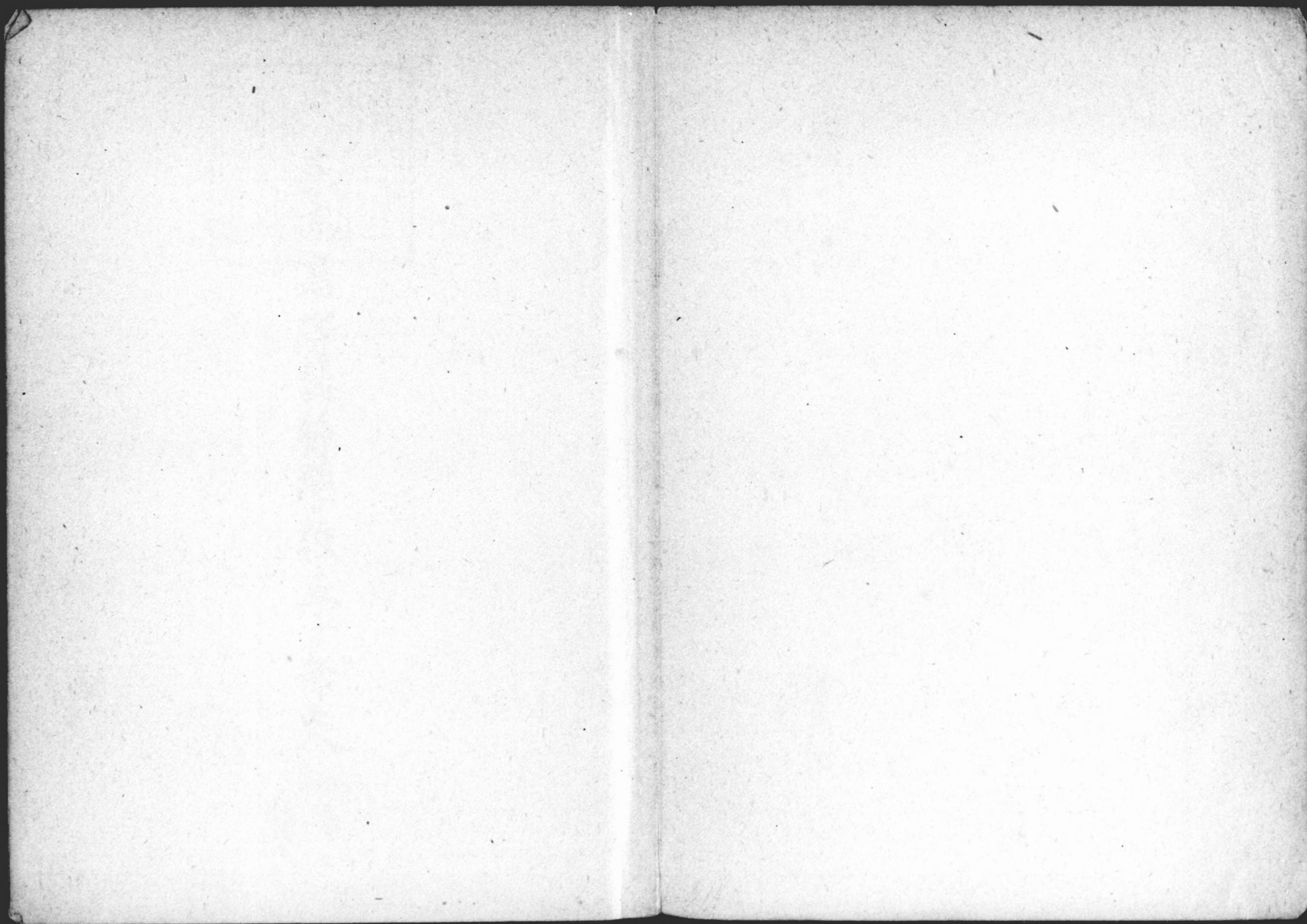
東京高等蚕糸學校五十年史

東京高等蚕糸學校・編

東京高等蚕糸學校

昭和17

AHN





高第街學校五十年史



發刊の辭

明治十九年以來五十有餘年の久しきに互り都の郊北、西ヶ原の地に聳えたる母校は、時代の進展に即應して内容外觀の整備、擴充を企圖し、新たに地を都西、小金井にトせられ、今や其の新裝成る。

吾等同人此の盛運を祝賀し且つ記念せん爲母校五十有餘年の經緯を敘し、之を鉛槧に付して關係諸賢に頒たんとす。

是れ溫古知新我が蠶絲業將來の發展に資すると共に恩師諸先生の鴻恩に對し感謝の微意を表せんとするに外ならず。

茲に本史編纂を擔當せられたる委員各位に深甚なる謝意を表す。

昭和十六年十月

東京高等蠶絲學校創立五十
周年並新築落成祝賀協賛會

會長 今井 五介

序

昭和十六年十月二十四日、東京高等蠶絲學校は創立五十五周年を迎へた。

この五十有餘年の歲月は悠久の國史から觀れば、極めて一短期間に過ぎないが、我國が未曾有の發展をなし肇國の精神を宇内に布くの基礎を固め得た期間であつた。この間、明治、大正、昭和の三聖代に互り本校が學規を擴張し教範を振作して、我國蠶絲業教育の一方に參翼し、聊か國家の進運に寄與し、以て本校史上光輝ある齣を劃し得たものと信ずるが、もとく聖恩の洪大無邊な恩寵に因るものに外ならない。思ひこゝに至る時、唯恐懼感激措く所を知らざる次第である。

回顧するに本校は、その萌芽を明治十七年四月東京市麴町區内山下町の農商務省所管蠶病試験場に持ち、大本を明治十九年十月二十四日東京府下北豊島郡西ヶ原に、該蠶病試験場の移轉に發するのである。而して西ヶ原の蠶病試験場は明治二十年四月蠶

業試験場と改稱し、二十四年三月農務局假試験場蠶事部と改め、二十六年四月再び舊に復して蠶業試験場と稱したが、更に二十九年三月蠶業講習所官制發布せられ蠶業講習所となり、三十二年四月京都府下に同程度の蠶業講習所設置せらるゝに及んで、六月より東京蠶業講習所と稱し大正二年六月文部省所管に移り、翌年四月名を東京高等蠶絲學校と改め實業専門學校としての現本校の發程を見、其後昭和四年二月地を東京府下小金井にトし、九年度より移轉改築に着工し漸く十四年度に於て略工事完了したので、十五年四月小金井新校舍に移轉した、而してこの間、學科の推移發展を觀るに大正三年四月校名改稱當初、養蠶科、製絲科及製絲教婦養成科の三科であつたが、八年五月養蠶科を第一部第二部の兩部に分ち、別に養蠶實科を設け、十二年十月本科を養蠶學科、栽桑學科、製絲學科と改め、昭和八年一月製絲教婦養成科を製絲教婦科とし、十六年四月新に纖維學科を設置し今日、養蠶學科、栽桑學科、製絲學科、纖維學科、養蠶實科及び製絲教婦科の六科を數へるに至つたのである。

斯くして本校は創立以來五十有餘年の星霜を閱するが、恒に蠶絲業の發展に伴ひ、その内容を整備し不斷の進展をつゞけ堅實有爲の人材を多數斯界に供給し、西ヶ原の名を通じて我國蠶絲業の興隆によく貢獻し得たが、その然る所以のものは本校先覺者達の熱誠と偉大な功業によるのであつて、單にその創立の古きが故ではない、古くして尙年々潑刺な生氣を銜み歳と共に發展したればこそ、西ヶ原の名が脈々として生きて來たのである。

余乏きを本校々長に承け、茲に想到する時我々後進に託せられたる責務の如何に重大なるかを痛感し、唯兢々として前緒を誤るなきやを惧るゝのであるが、併し靜かに本校規則第一條に明示せる本校の目的を精察し、その運用に於ては、過去の長き傳統たる西ヶ原精神に基き、學生生徒の訓育に當りては、科學に基礎を置く實踐的な蠶絲業人の養成に亦斯業の研究に當りては、單に學問の爲の研究に墮せずして、我國蠶絲業への應用にその重點を置き、以て至誠一貫滅私奉公蠶絲業報國の理想に燃え、本

校本来の使命完遂に、全幅の勉勵を盡さんと誓ふものである。

殊に今や我國は有史以來の非常時局に直面し、從來輸出産業として首位を占め來たつた我が蠶絲業は、國內纖維資源の唯一重要な生産供給源として轉換、登場し、その重要性を喚起せしめつゝあるの時に於て、一層覺悟を新たにし、學校一致協力、本校五十年史に愈々不朽の榮光を加へんことを期するのである。

今回本校創立五十周年並新築落成祝賀協賛會の記念事業の一として、東京高等蠶絲學校五十年史の刊行が計畫され、その編纂の委囑あり稿成るに際し以上聊か蕪辭を陳ねて所懐の一端を敘する次第である。

昭和十六年十月

東京高等蠶絲學校長 伊 東 廣 雄

凡 例

一、本書は東京高等蠶絲學校五十周年並新築落成祝賀協賛會の記念事業の一として刊行されたものである。即ち右協賛會は東京高等蠶絲學校五十年史の刊行を計畫し、其資料の蒐集編纂を學校當局に委囑し、これに據つて教授小倉三郎、編纂委員長に、教授三戸森確郎、同高木一三、生徒主事鈴木美雄、教授増井芳男、同福本福三、同石川勝一郎、同尾崎準一、同渡邊靜夫、講師坪井啓作、書記中野信正等編纂委員に舉げられ、爾來委員は屢々會合評議して、其編纂の方略と敘述の内容とを審定し、其資料の蒐集及執筆等編纂の實際に就ては、一貫した態度方針を期するために、石川・渡邊兩委員その衝に當つた。斯くして出來の粗稿につき、校長・編纂委員之を銳意審議補訂して、本書の編纂が成つたのである。

一、本書の背文字及扉は伊東校長の染筆である。

一、所據の資料は煩を避けて一々出典を記さなかつたが、本校所藏の各種記録・各種報告・學校一覽西ヶ原蠶友會報・西ヶ原同窓會報・蠶絲學報等直接關係あるものは勿論、其他蠶絲業關係の諸雜誌

官報及び官記等から客観的資料を蒐集した。

一、本書編纂の形式は本校の沿革に従つて、第一編蠶業試験場及蠶業講習所時代(本校創立當初より大正三年三月まで)第二編東京高等蠶絲學校時代(大正三年四月より現在まで)第三編現況とし、本書の冒頭編外に皇室關係事項を謹記し、尙最後に本校關係團體を編外に加へた。

而して第一編及第二編各時代の發展過程を示すに、無味乾燥に陥ることは熟知しながら、敢て編年體に出來事を羅列敘述した。勿論史實の敘述が變化と言ふ概念から發展と言ふ概念に活きるためには、單に史料を羅列するだけでなく現在の眼を以て、その史料を整理批判すべきであつたであらうが、何分にも種々の出來事が成程時間的數量に於ては過去の事實であつても、生々しい經驗事實であつて觀れば、寧ろわれわれの主觀を交へずに實録・年誌的に記述する方が、より事實を正しく傳へると思つたからである。

一、本校の呼稱は蠶業試験場及蠶業講習所時代には夫々本場・本所と呼び學校改組以後は本校と呼んだ。本書中 皇室關係事項以外は凡て、敬稱及敬語を省略した。

一、本書全體を通じて、資料の蒐集・選擇取捨の不完全、編纂の下手際其他に缺陷も尠くない。紙數

の都合上、史料の割愛した部分もあつて一層不充分なものになつた。又時に意外の誤謬あるやも計り難い。是等に對しては委員の微力の致す所、深く御詫びすると共に將來の大成を期し度と思ふ。

昭和十六年十月

編輯委員

東京高等蠶絲學校五十年史 目次

皇恩の無窮

行啓及台臨……………	一
宮中御養蠶所奉仕及拜觀……………	一五

第一編 蠶業試験場及蠶業講習所時代

第一章 本校の設立に至る迄の経過……………	二
第二章 蠶業試験場時代……………	三
第一節 總 說……………	三
第二節 蠶業の傳習及其課程……………	三
第三節 試験研究其他……………	四
第三章 蠶業講習所時代……………	五

目次

第一節 總 說……………三

第二節 法令・諸規則・其他の變遷……………六

第三節 業 績……………一〇五

第四章 敷地・建物・桑園の變遷……………一六

第五章 職員の異動……………一四

第二編 東京高等蠶絲學校時代

第一章 總 說……………一五

第二章 校名改稱當初の狀況……………一六

第三章 其の後の發展……………一九

第一節 大正時代の諸規則の改廢・制定・其他……………一九

第二節 昭和時代の諸規則の改廢・制定・其他……………二八

第四章 敷地・建物・桑園の變遷……………三五

第五章 圖書館・標本室・寄宿舍・其他……………三〇

第一節 圖書館・標本室……………三〇

第二節 寄 宿 舍……………三七

第三節 學術報告の刊行……………三九

第六章 時局と本校の教育……………三五

第七章 職員・生徒・卒業者……………六一

第一節 職 員……………六一

第二節 生 徒……………六三

第三節 卒 業 者……………七〇

第三編 現 況

一、關係法令……………六二

二、諸 規 則……………六八

一、東京高等蠶絲學校規則……………六八

二、東京高等蠶絲學校養蠶實科規程……………七〇

三、東京高等蠶絲學校製絲教婦科規程……………七〇

三、土地・建物……………七三

四、職員・生徒・卒業者……………三六

附 録

一、西ヶ原蠶友會……………三七

二、西ヶ原女子蠶友會……………三六

三、東京高等蠶絲學校報國團……………三九

四、東京高等蠶絲學校報國隊……………四〇

五、東京高等蠶絲學校特設防護團……………四一

六、西ヶ原同窓會……………四二

目次

四、職員・生徒・卒業者……………四

三六

附 録

一、西ヶ原蠶友會……………三七

二、西ヶ原女子蠶友會……………三六

三、東京高等蠶絲學校報國團……………三九

四、東京高等蠶絲學校報國隊……………四〇

五、東京高等蠶絲學校特設防護團……………四一

六、西ヶ原同窓會……………四二

本校今、拾餘年前
 一覽に、本日再茲
 臨、且多茲、陳列品
 先、其規模漸次充
 城、進、其研究進歩
 著、御國、産業、裨益
 此、所、勤、也、思、誠、
 吾、一、次、第、一、角、分、而
 一、層、所、進、發、達、盡、力
 也、ト、望、ム



葉言御下陸后皇(圖上)
 (日七十二月十年五正大) 景光の門出御校本下陸后皇(圖下)



東京高等蠶絲學校校歌

東京音楽学校作詞作曲

正常歩行進、速度ニテ

mf

ソラハアツク ハレチ イノチワカン ニホヘカゼ
くもけしろく ながれ ゆめほふかし そだてかい
かぜハアツク サヘチ シラベタダン ツムゲイト

ニカゼニ ニカガ ヤケツウ エン ア
ニカヒニ ニカガ よふわかま ゆ あ
フイトニ ラニ サン シノデン ドウ ア

ア リ レ ラ ゴウケンツサニ ターバ
あ わ れ ら しつじつともにも まもる
ア リ レ ラ ケンサンチエハ トホー

ムサニ シノ トホキヨサウ オサ
ひるニ もよも きよきまこ とほぐ
ヒニ アラタ フルキタラ サ オモ

ムカミガ ミワカガ ヤケツウ エンチヘ
くめみづ からかがよふわかま ゆきば
ヘニホウ コクサンシノデン ドウセキ

イハワレラノ マヘニカヌメリ
ハハワレラノ ムネにみちたり
ハハワレラノ カタニカカレリ

歌 校 及 旗 校



長局務農者理管代三
名正田前



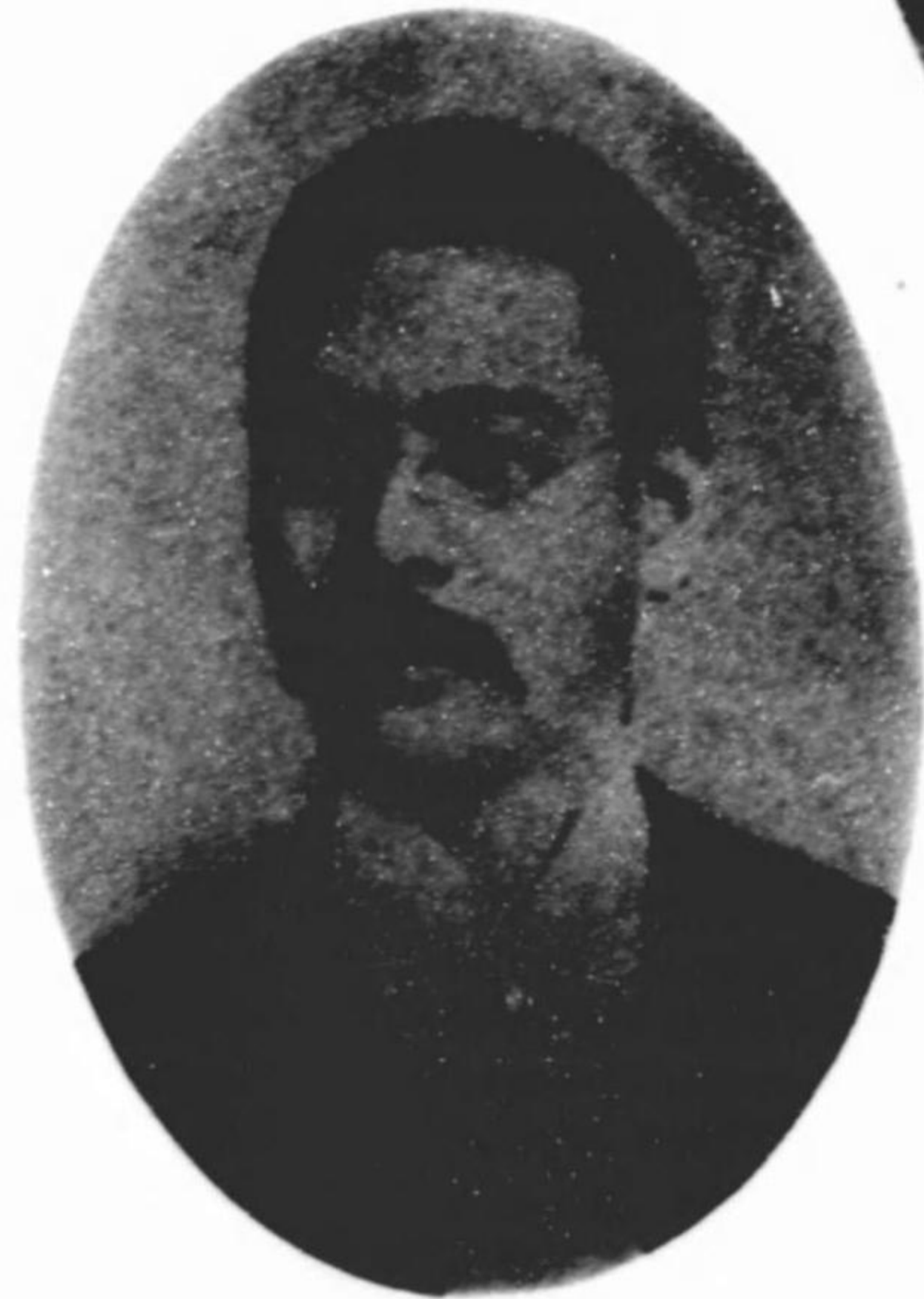
長局務農者理管代五
三捨村西



長局務農者理管代初
義敬山岩



長局務農者理管代四
郎一修藤齋



長局務農者理管代六
郎四田藤



長局務農者理管代二
吉信鳥宮



長所習講業蠶京東代初
淳 野澤 士博學農



長所習講業蠶
三喜木練



長所習講業蠶京東代二
郎次岩多本



長校學絲蠶等高京東代初
郎次岩多本 士博學農



士博學農長校現
雄廣東伊

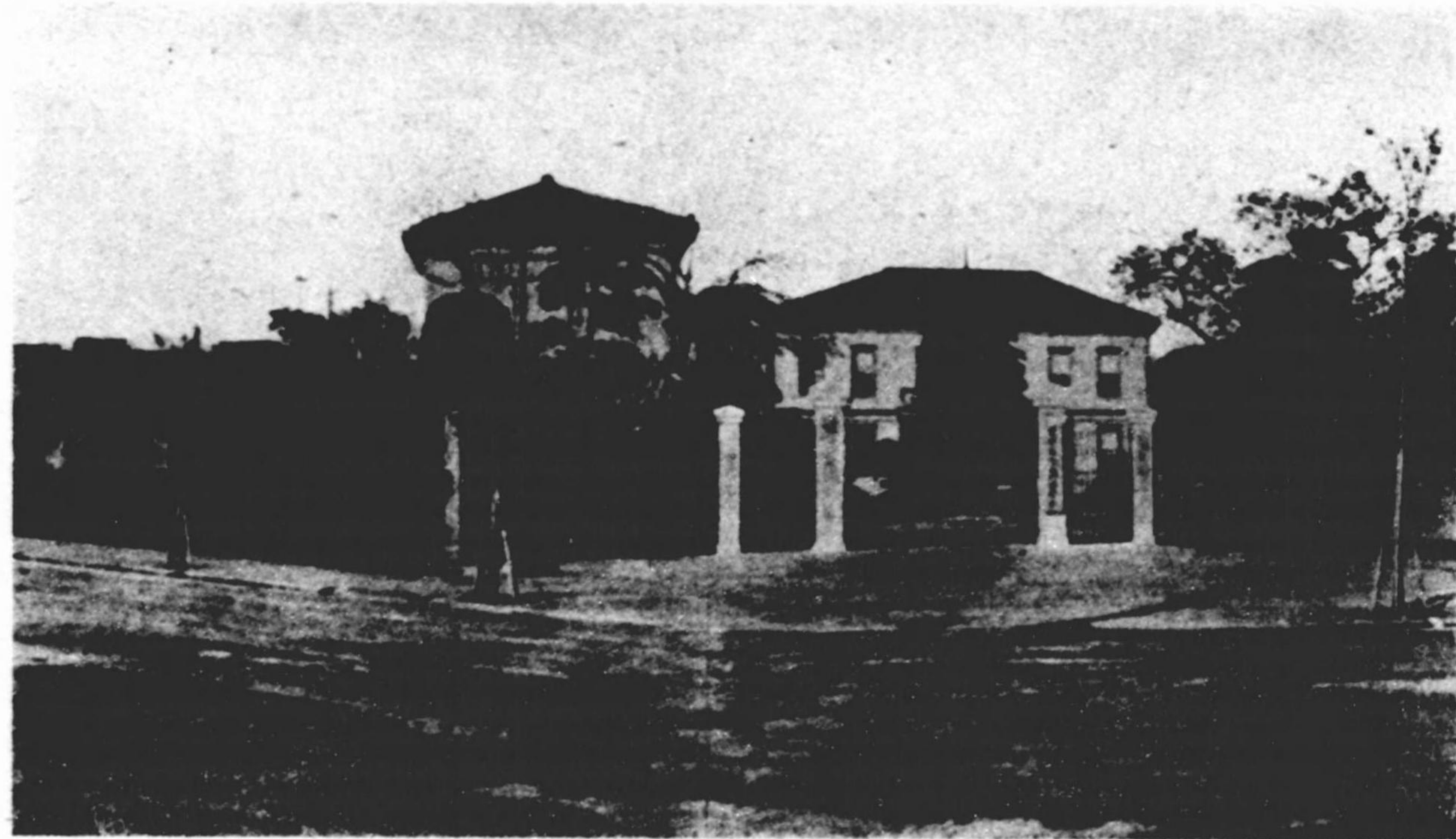


創立當時の本校



東京業講習所時代の正門

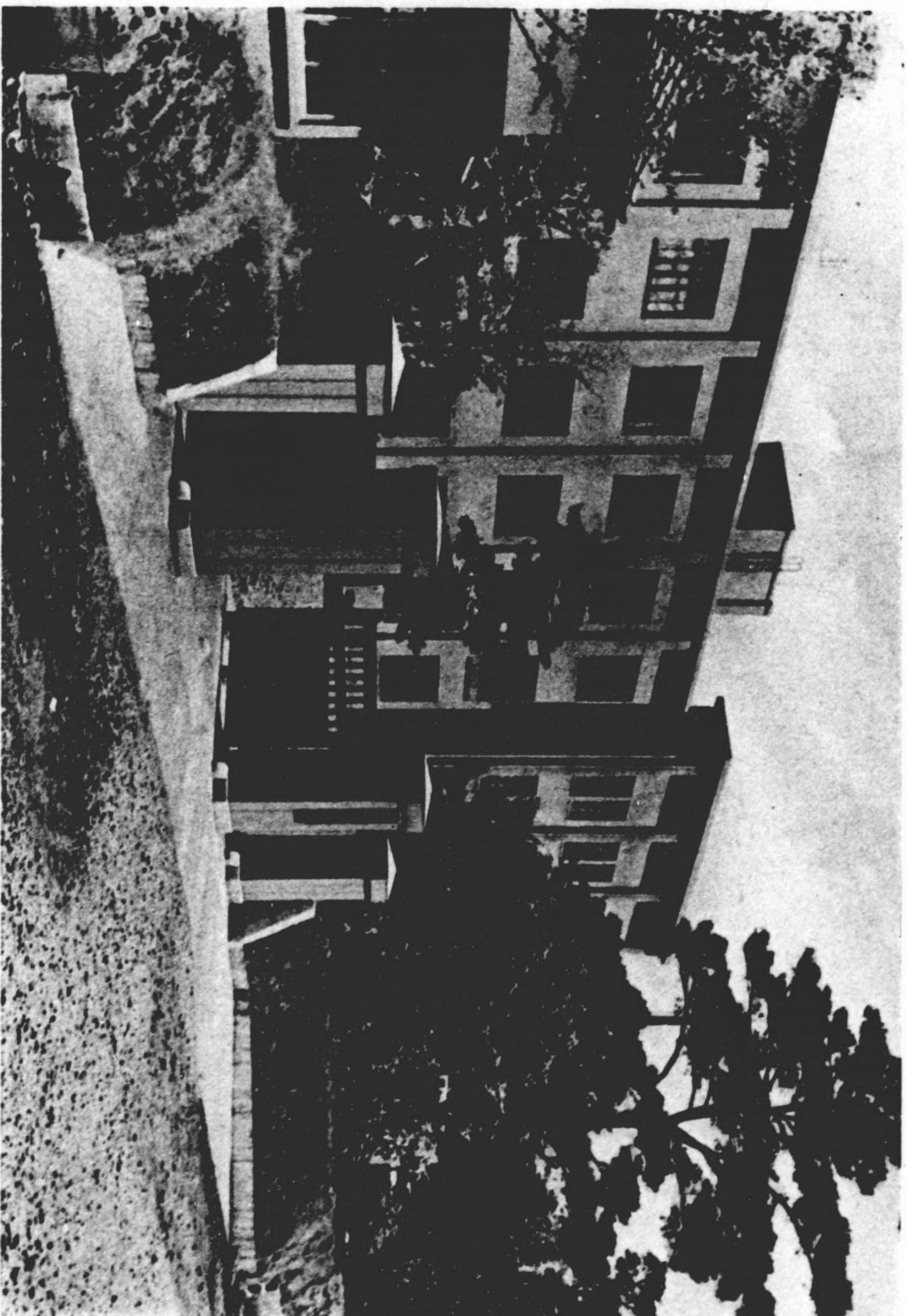
門正の(年五正大)代時校學絲蠶等高京東



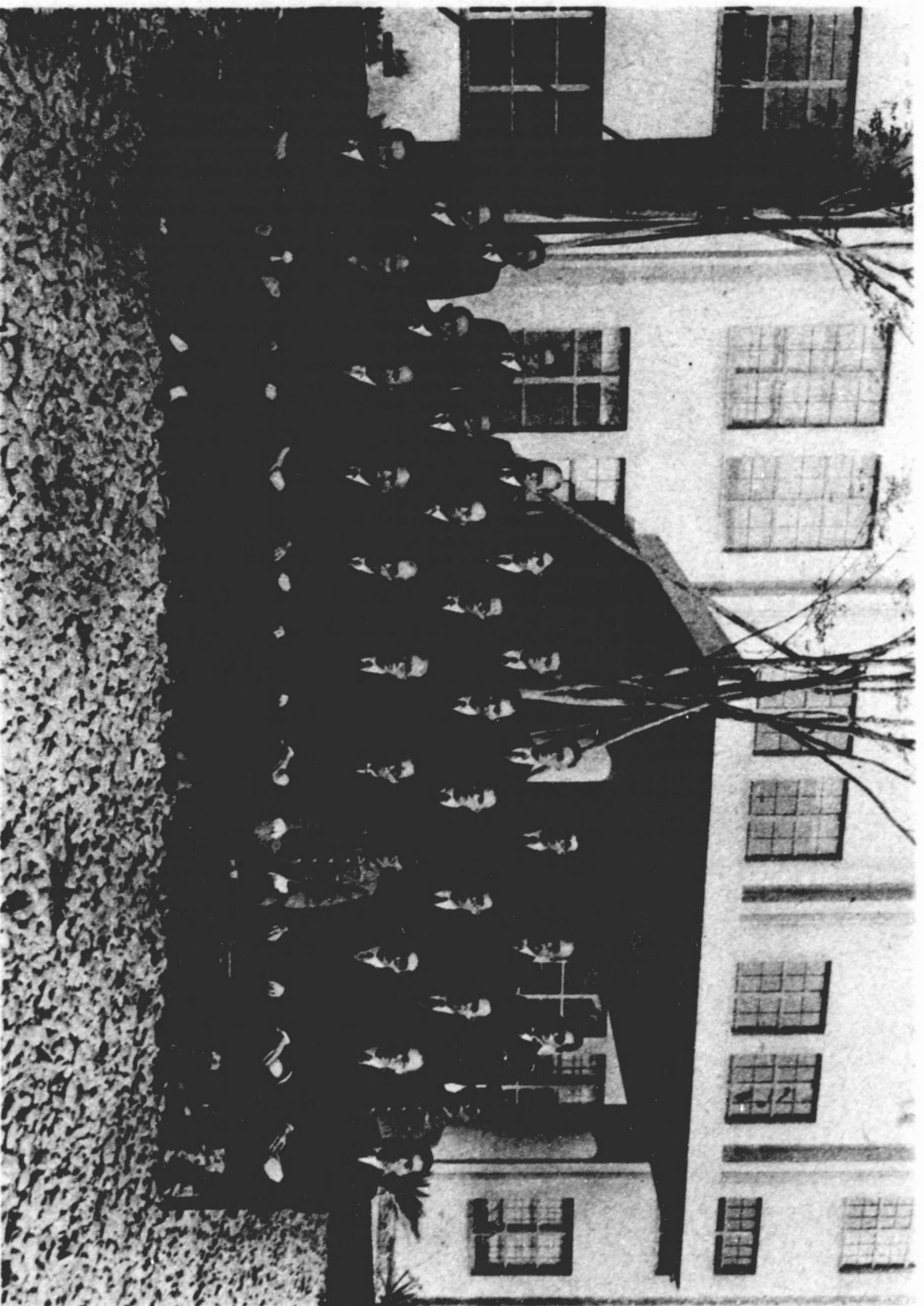
景全の(年四和昭)代時校學絲蠶等高京東



(影撮) 月六年六十和昭)館本るた觀りよ門正校本在現



現 在 職 員 (昭和十六年八月攝影)



皇恩の無窮

行啓及台臨

本校創設は今日に至る迄の間に於て長くも 皇后陛下 皇太子殿下 皇太子妃殿下を始め奉り各 内親王殿下 皇孫殿下の行啓又は台臨を辱うしたこと一再でなかつた。この事は獨り本校五十年史に光榮ある一齣を劃し永く記念せらるゝのみならず、蠶絲業御奨勵の深き御恩召に外ならないと拜察せられるのであつて御ありがたき御恩召の程誠に長き極みで、惟々感泣の他はないのである。

常宮 周宮兩内親王殿下の台臨

明治三十六年五月十七日長くも 常宮 周宮兩内親王殿下には本校（當時東京蠶業講習所）に台臨遊ばされ親しく蠶製絲の實況を御視察あらせられた、當時の西ヶ原蠶友會報誌上の謹記の一端を藉りて、光榮あるその日の御模様を拜することとする。

兩殿下には零時三十分高輪御殿御出門一時三十分を過ぎぬる頃車聲囂々として、いと勇ましく奉迎者の敬禮を

受けさせられつゝ、いと御機嫌麗はしく成らせらぬ、御隨行は御養育主任佐々木伯爵、同令夫人、御用掛加賀美子爵、同令夫人並に女官二人外に宮内省高等官等にてありき、殿下には御車寄より本多所長代理の御先導によりて新築事務所樓上便殿にて暫時御休憩遊ばされ高等官一同に拜調を賜はる、後ち本多所長代理の御先導にて陳列室並に養蠶製絲の實況を御巡覽あらせらる、本多所長代理は一々詳細に御説明申上げられたり。御巡覽の後午後三時御小憩遊ばされ、其際左の御下賜品ありたり。

- 一 金若干 本所へ
- 一 御菓子 本所高等官へ

- 一 御菓子料 本所判任官以下へ

それより殿下には本所桑園へ御成あり、見本桑樹を見そなはせらる是より先き農事試験場より御序を以て御立寄を請願せしに是又御許納あり直に同所陳列室を御覽遊ばされ、御歸所後再び事務室樓上にて蠶體解剖の有様、蠶病々原菌蕃殖の状態、人造絹絲、害蟲標本等を御覽あり直に御還啓仰出さる、時恰も午後五時御氣色いと麗しく御歸殿あらせらる。

富美宮 泰宮兩内親王殿下の台臨

明治三十七年六月廿六日長くも 富美宮 泰宮兩内親王殿下には本校（當時東京蠶業講習所）に台臨遊ばされ親しく養蠶製絲の實況を御視察あらせられた。當時の西ヶ原蠶友會報にはその日の光榮ある御模様が次の様に謹記せられ

てゐる。

兩殿下には午後一時三十分とおぼしき頃御機嫌いと麗はしく御着あらせられ酒匂農務局長本多所長の御先導にて、事務所樓上に設けたる便殿に入らせられ 暫時御休憩の後高等官一同に拜調を賜はる 後本多所長の御先導にて樓上に於ける標本室に陳列せる各種の標本を御覽あらせられ、それより養蠶室に成らせられ次に製絲部に御成りあり、絲繰る業には殊に御心を注がせられ御附老女を経て 種々御下問あり本多所長は一々事細かに御答申上げ奉りぬ。夫より兩殿下には本所構内の桑園に御成ありて 桑樹栽培の模様を見そなはせらる、是より先き製茶試験場並農事試験場より御序を以て御立寄を請願し奉りしに、御許納ありて兩所を御廻覽ありて再び便殿に入らせられ、御小憩の後左の通り御下賜ありたり。

- 一、金若干 當蠶業講習所へ
- 一、酒肴料 本所職員へ

御休憩後農事試験場高等官へ拜調を賜はり、直に御還啓仰出されたり時恰も五時職員及講習生は門内に整列して見送り奉りしに、兩殿下には長くも御車上より御會釋あり御氣色いと麗はしく御歸殿あらせられぬ。

皇太子妃殿下の行啓

明治三十八年五月三十一日長くも 皇太子妃殿下（皇太后陛下）には本校（當時東京蠶業講習所）に行啓遊ばされた。當日午後一時三十五分御着、本多所長の先導でいとも御熱心に所内を御視察遊ばされ、午後五時御機嫌麗はしく

還啓あらせられた。當日の光榮ある實況に關し當時の大日本蠶絲會報は次の様に謹記して居る。

同日午後零時三十分青山御所御出門殿下には吉見富田兩女官の御陪乘にて、柱東宮主事以下の供奉員を隨へさせられ同一時三十五分東京蠶業講習所へ御着遊ばさる、本多所長は清浦農商務大臣酒匂農務局長森田商工局長と共に御支關前に、古在農事試験場長佐藤商品陳列館長加賀山蠶絲課長其他講習所職員並生徒一同は門内に整列奉迎せり、御着の上大臣及所長の御先導により同所事務室樓上に於て御小憩 高等官一同に拜謁を賜はり直に清浦大臣酒匂農務局長及本多所長の御案内にて 標本陳列室 蠶病試験室 本科一年生養蠶實習室貯桑室 養蠶試験室 本科二年生の藁小屋蠶室等を御巡覽遊ばされ 暫時御少憩あり此間に於て農事試験場の生産品及試験成績品等御覽あり後再び殺蛹乾燥場 第一製絲場 揚水機タンク貯水池 機關室 第二製絲工場 仕上場 生絲検査室等を御巡覽遊ばされ終つて御歸途構内桑園を御通過 秋田仕立桑樹の狀況を御覽の上農事試験場に御立寄りあらせられ 其圃場試験を御巡覽再び事務室樓上に於て御小憩の午後五時御機嫌麗はしく還啓仰出されたり御巡覽の際は本多所長より一々御説明申上げたるにも拘らず 時々御下問あり、最も詳密に御視察あらせられたるは同所長の懼恐措かざる所なりし。

四

伏見宮貞愛親王殿下

明治四十一年五月三十日長くも 伏見宮貞愛親王殿下には本校（當時東京蠶業講習所）に台臨遊ばされ、親しく養

蠶製絲の實況を御視察あらせられ、更に明治四十二年七月十二日本校（當時東京蠶業講習所）卒業證書授與式に、（殿下には）大日本蠶絲會總裁として台臨あらせられ 優渥なる令旨を賜はり、翌年舉行の卒業證書授與式（明治四十三年七月九日）に重ねて台臨あらせられ優渥な令旨を賜はり、本校は無上の光榮に浴した。

令旨 東京蠶業講習所卒業證書授與式ヲ舉クルニ方リ親シク此式典ニ臨ム貞愛ノ深ク欣フ所ナリ 本所夙ニ蠶業教育ヲ施シ斯業ノ進運ニ資スルコト尠カラス 然リト雖モ尙改善ノ餘地多クシテ人材ヲ要スルコト頗ル切ナルモノアリ之ヲ以テ本所ハ益薰育陶冶ニ從ヒ卒業生ハ専ラ指導啓發ノ任ニ當リ銳意奮勵斯業ノ爲ニ努力センコトヲ望ム

明治四十三年七月九日

大日本蠶絲會總裁大勳位功二級 貞 愛 親 王

皇后陛下の行啓

明治四十一年六月三日長くも 皇后陛下（昭憲皇太后陛下）本校（當時東京蠶業講習所）に行啓仰せ出された。當日午後二時本校に御到着、本多所長の御先導にて所内を御巡覽、午後五時過に御機嫌麗はしく還啓遊ばされた。當日の御模様は當時大日本蠶絲會報に謹記されて居るからそれを茲に轉記することとする。

皇后陛下は其日午後一時宮城御出門、高倉典侍御陪乘香川皇后太夫山内皇后主事園權典侍吉田權掌侍生源寺權命婦田澤侍醫以下の供奉員を隨へさせられ同二時御安着あらせられたり。東京蠶業講習所にては本多所長以下職員生徒一同 絶大の光榮ある玉輦を迎へ奉るに 萬一の遺漏無からんを期し諸般の準備に怠なく、先づ正門及玄關に大

五

國旗を交叉し、要所要所に黒段々の幔幕を廻らし門内に清砂を敷き、各廊下に白布を敷き詰め事務室階上に、陛下の御謙徳に副へ奉る可く極めて質素なる便殿を設けられたるが、裝飾頗る清楚を極めたり、斯くて定刻に至るや正門より玄關に至る右側に女生徒左側に男生徒整列し、玄關昇降口の左右には農商務省各局長各高等官、農事試験場長及高等官並蠶業講習所職員整列し、玄關内には松岡農相金子子爵松平大日本蠶絲會頭本多所長及御先着の渡邊主事以下各々席を正しうして御着鞆を待ち上げたり、寔や初夏の天地氣淑しく風和かにして、滿目の萬象語らずして絶大の喜樂を鳩めたり、既にして遙かに錦旗の翻々たるを望めば馬蹄蹕々塵輕く飛んで、玉車轆々として門内に進み御車寄に至りて止れり、即ち本多所長恐懼して御先導申上げ奉れば、御機嫌最も麗はしく階上の便殿に入御あらせられ、茲に松岡農相、金子子爵、松平男爵、久米農商務次官、大久保、磯部、中松の各局長、古在農事試験場長、本多、石渡、紫藤の三所長以下各高等官に拜謁を賜はりたり、右終りて本多所長は松岡農相の手を経て概覽及御巡覽順序書を奉呈せり。

斯くて陛下には御少憩の後本多所長の御先導に依り直ちに各供奉員を随ひさせられ、先づ養蠶部を、養蠶室給桑實習貯桑室摘桑實習除沙實習剝桑實習養蠶試験の實況藁小屋蠶室上簇實習簇製作實習の順序にて仔細御覽あらせられ、次に製絲部に成らせられ先づ繭一粒繰試験につき御熱心に御聞取り遊され、夫れより殺蛹乾繭等の實習を御覽の上各種器械製絲法に就き本邦製絲と伊佛等の外國製絲法との比較の説明を御傾聴あらせられ、更に眞綿絨絲玉絲等の製造實習を御覽あらせられ、夫れより長多も汽罐の音喧囂を極め蒸汽立てる汽罐室を御通過の上第二工場

に入御、女生徒六十名の實習に就き特に精細なる御注意を拂はせられ本多所長より申上ぐる詳細の御説明に對し陛下よりも亦辱なき御下問を賜ひ更に階上なる仕上場に入らせ賜ひ生絲の検査より荷造に至るまで、逐一御覽の上更に農事試験場標本室に入らせられ、本多所長に代りて古在場長の御説明を聞き召されたり、御少憩の爲便殿に成らせらるゝ御道すがら玉歩を桑樹見本園に移させ給ひ、新緑滴らんとする桑園に御目を注がせられたるが、一度便殿に御休憩後再び陳列室に入らせられ實物又は模型を以て示したる桑樹の種類及桑樹繭生絲の害蟲、蠶兒及繭の種類、蠶體内部の構造病蠶蟹蛆の經過、天蠶柞蠶其他養蠶及製絲講習生の製作及生産品各種生絲の標本、製絲用水試験成績世界各國生絲生産比較地圖、織物一反の前身、外國產生絲標本、野蠶絲テグス、人造絹絲及シルケット標本、蠶種一枚より獲たる生産物各種、織物及び其の原料等を順次御熱心に御覽あらせられ、最も御満足の御氣色にて本多所長に、順序能く説明して能く判りたりとの難有御詫を賜ひたりと云ふ。

陛下には此の如き長時間の御觀覽に毫も御疲労の御様子も拜し奉らず終始御熱心に御覽遊ばされ、御先導の先に進み参らせんとするに拘らず陛下には一々精細なる御注意を拂はせられたるは、隨行せる人々の最も恐惶し奉りたる所なりしと洩れ承るのみにても大御心の難有さを感じせずんばあらざるなり。殊に御觀覽後本多所長を御便殿に召させられ『詳しく説明を得てよく解したりさぞ大儀ならん』との難有き御言葉をさへ賜りたるやに承りては愈々恐懼措く所を知らざりしと。

又特に松岡農相を召させられ

此の蠶業講習所は今日始めて一覽せしに養蠶製絲のことにつきあらゆる方法を研究講習し其卒業生を各府縣に送りて傳習せしむること總て能く整ひ居る様に見受け喜ばしきことなり申すまでもなきことながら生絲は御國産中其最も重なるものなれば一同勉勵益斯業の發達を計らむことを望む

右の趣農商務大臣より皆々へ申傳へありたし
との優渥なる令旨を賜はりたるを以て、農相には恐惶恐懼爾後益々奮勵謹旨に背かさらん事を奉答せられたりと云ふ。而して陛下には各高等官一同竝に講習生に對し御菓子料若干を御下賜あらせられ、本多所長よりは松岡農相の手を経て同所製造の生絲二括 角眞綿一包 天蠶柞蠶及各國産蠶絲各一函を奉呈せられたるが、一々御嘉納あらせられたり。

斯くて陛下には同五時過ぐる頃還啓仰出され、玉顔麗しく御發聲遊ばされたり。

迪宮殿下 淳宮殿下の台臨

明治四十三年五月九日皇孫迪宮殿下(今上陛下)皇孫淳宮殿下(秩父宮殿下)には學習院生徒の御資格を以て本校(當時東京蠶業講習所)に台臨あらせられ、養蠶製絲の實況を御見學遊ばされた、今大日本蠶絲會報紙上に掲げられた記事の一端を藉りて、當日の御模様を拜することとする。

此日兩皇孫殿下には閑院宮春仁王、久邇宮邦久王殿下を始め、學習院初等科二三學年生八十二名を御隨伴せさせ、

九時半頃蠶業講習所に御着遊されたるを以て、本多所長、下岡局長、芳賀蠶絲課長、同所々員一同は同所支關前に奉迎し本多所長の御案内にて 兩皇孫殿下に兩若宮殿下は貴賓室に御休憩遊ばされたり。

斯くて御少憩の後一行五組に分れ 兩皇孫殿下に兩若宮殿下には本多所長、下岡局長御案内申上げ他四組は、中村肥後の二技師及松下、岩淵の二技師夫々案内せられたり。本多所長の御案内をうけさせられたる四殿下には先づ階上の陳列室に入らせられ、第一に早中晩桑樹の生育程度の比較及拓桑を御覽せられ、第二に山繭の幼蟲桑葉蠶金毛蟲枝尺蠖の飼養箱中におのがじし、或は靜止し、或は舞ひ或は喰むを御覽せられ賜ひしが、殊に枝尺蠖の靜止せるにはいと御意を留めさせ賜ひて、蓋を開き御手を觸れて暫く御覽遊ばされたるには、御研究の綿密なるに皆驚嘆せざるはなかりき。次で桑樹害蟲及絹絲蟲等の標本に就て一々御説明を聞き取らせ賜ひ蠶及一齡より四齡迄の蠶兒を御覽あらせられては、直ちに種類は何かと御質問あらせられ、蠶兒解剖模型及繭、簇(結繭しあはるもの)より消毒器病蠶、内外各國産繭及絲質絲長等の比較に就ては一々熱心に、本多所長よりの御説明を聞き取らせ給ひて、審さに御觀覽あらせ賜ひたり、次で一疋の蠶は二千餘尺の繭絲を吐くを以て六疋の蠶兒が吐出す繭絲を縛ぎ合すれば富士山の高さに達すと云ふ方三丈餘もあらんかと思はるゝ水彩畫の比較圖に就き御説明申上げし折は、非常の興味を以て御聽問あらせられ、次に人造絹絲及其織物、他方には生絲を以て製造せる物品は大小となく陳列して御看覽に供し、最後に縮緬一反の織出さるゝに至る迄の原料の前身を順次表はせる實物標本にも熱心に御注目あらせられ、終つて養蠶部一年の剉桑實習及蠶室地下、貯桑室二年蠶室及試驗室並に三年蠶小屋蠶室を御覽あらせられて、製絲部に移ら

せ賜ひ同轉式乾燥器の廻るを嚮し賜ひては何故廻るかとの御質疑あり、夫より選繭及乾燥貯繭實習 各種製絲器械及天蠶柞蠶、製絲及染色等御覽の後貯水池畔を経て汽罐室に入らせられ給ひしが、汽機及ポンプの運轉には殊の外に御注意あらせられ、熱風襲ひ來る室をも厭はせ賜はず、永く御注視あらせられ、次で眞綿紬絲玉絲坐繰足踏製絲(以上)より器械製絲(女生)等製絲部生徒實習の模様を御覽の後階上生絲整理室に入らせられ、茲に生絲の肉眼及機械検査より括造りの上輸出せらるゝ迄の順序を仔細に御聞き取りあらせられたる後休憩室に入らせられ、御携帶の御行厨を認めさせ賜ひ、御休憩中兩殿下よりは御學友一同に御菓子折一個宛を賜はり、學友を勞らはせ賜へり、暫らく御休憩の後午後一時御學友を伴ひ農事試驗場に成せられたるを以て、所員一同は玄關前に奉送し奉り本多所長は同場迄御案内申上げたり。

夫より古在試驗場長の御案内にて農藝化學室の肥料並に穀物の標本等御覽せられたる後東側の農場に於ける禾穀類の培養試験を御覽せられしが、鏽毒地と同質なる土質に植ゑし穀類の生育悪しきに御目を留めさせられ種々の御質問を發せられ、詳しく場長の説明にうなづかせ賜ひ害蟲標本、同驅除の實驗等御覽の後裏手の農場に出でさせられ、茲にて電氣試験、製茶の順序等御聴取りの後廣野にて御學友一同と一時間許り嬉々として御遊歩遊ばされ、午後二時五十分 兩皇孫殿下は御料の馬事に召し賜ひて還啓あらせられ、兩若宮殿下は他の一同と共に徒歩王子停車場に向ひ歸途に就かれた。

皇太子殿下の行啓

明治四十三年六月二日長くも 皇太子殿下(大正天皇)には本校(當時東京蠶業講習所)に行啓仰せ出され、親しく養蠶製絲其他の生徒作業の實況を御視察あらせられた。當時の大日本蠶絲會報には、此日の行啓の御模様を次の様に記されて居る。

六月二日午後零時三十分 東宮殿下には陸軍中將の御服裝にて一條東宮侍從長御陪乘木村侍從武官長以下を從へさせられ青山御所御出門あらせられたり、飛雨肅條たる中同一時二十五分御安着、小松原農相、下岡農務局長、松村秘書官、芳賀蠶絲課長、古在農事試驗場長、本多所長以下職員一同及男女生徒玄關前に整列して奉迎す、殿下には階上假便殿に成らせられ、農相以下各高等官に謁を賜ひ講習所より献上し奉れる同所寫眞帖一冊、繭及生絲各國標本、講習生製造品を御嘉納あらせられ暫時御休憩の後本多所長の御先導にて標本陳列室に入らせ給ふ、先づ第一に蠶蛾類の標本より順次蠶の飼料、種類、害蟲、蠶の経過及種類、繭繭標本、講習生生産繭、繭絲類標本、繭質標本、水質標本、講習生製造品、繭の絡交、生絲生産額統計表、生絲標本、織物と其原料、蠶種一枚と其生産物、富士山、生絲の束裝等も御覽遊ばされ、特に印度産チュッサ繭と柞繭との區別、普通絡交と各種網代絡交との優劣、外國蠶種と本邦蠶種との差違等に就き御下問あり、各國蠶絲の統計表に就ては一層の御興味を以て御覽遊ばされ、昨四十二年に於ける本邦蠶絲の輸出額が世界に於て最も多額を占めたりとの御説明を最も御満足に思召され

清國より産額が増加したるか、我が生絲の輸出先は大部分米國なるべし

との御言葉ありたるやに洩れ承る、斯くて殿下には本科一年生養蠶實習室に於て給桑の作業、貯桑室に於て桑扱の作業、地下室貯桑の實況、本科三年生養蠶實習室に於て葺屋蠶室に於ける蠶兒飼育の實況並に除沙の作業、貯桑場に於て簡易なる貯桑場の實況を順次に御覽遊ばされたるが各生徒の實習室に於ては御時間に長短なく、何れも平等に御覽あらせられたり、洵に之れ一視同仁に渡らせ給ふ御心に外ならずと推し奉るだに畏し、夫より玉歩を見本桑園に移させ給ひ、更に第二標本陳列室に於て萎縮病紋羽病赤澁病芽枯病蠶卵の孵化、蠶兒の頭部附食桑消化、蠶兒の氣門附近呼吸作用、絹絲腺、雌蛾の卵管、煙草の中毒、蠶體解剖模型、蠶兒の雌雄模型、蠶體胴部の切斷面各種病蠶模型、微粒子病白殭病、膿病卒倒病蠶蛆病、各種消毒器等に就き或は顯微鏡を覗かせられ、或は御下問あらせらるゝ等注意深く渡らせ給ふには一同恐懼し奉れり、次で製絲場に入らせ給ひ乾繭場に於ては林式乾繭器の装置、繭取扱場に於ては本科二年男生繭選別器にて綿取及大小篩分の實況並繭選別の作業殺繭乾燥室にては火熱式乾燥器及汽熱式乾燥器に於ける構造装置並本科二年男生殺繭乾燥實習の作業、乾繭器に於ては中原式乾繭器の構造装置、第一製絲工場に於ては各種器械の使用運轉實地作業實況、貯水池に於ては井戸より揚水の状況、水漉器及貯水池に於ける水質改良並にタンクより給水の状況、汽罐室に於ては汽罐の焚火汽機の運轉の状況、第三製絲工場にては足踏製絲器を始めとし各種の製絲器械に於ける本科一年男生實習の状況、第二製絲工場にては繰絲場、揚返場、仕上場、生絲検査室に於ける本科男女生及別科女生の實習状況を緻密に御視察あらせられ、隣地なる農事試験に成らせ給へ

り。之より古在場長の御先導にて茶樹栽培、製茶試験の實況及氣象觀測室を御覽ありて、同場背後に設けたる御休憩所に入らせ給ひ、近く王子の各工場より遠く荒川邊の野景を望ませられ農相を近く召させ給ひて王子に於ける製紙製絨肥料等の各會社に就て種々御下問あり暫時御休憩の後春園の間を御通過ありて、土壤分析室養蠶室土地改良試験、肥料試験煙草試験牛乳検査細菌試驗場農産物の實驗農藝化學の研究室等を御觀覽遊ばされたり。最初より最後迄御觀覽の時間殆んど三時間餘に亘りて、少しも御倦怠の御氣色も見させ給はず御熱心に御視察の上試驗場樓上の假便殿に於て御少憩あらせられ一同に對して満足なり、との御會釋を賜ひ、農相以下一同の奉送を受けさせられ農事試験場正門より還啓あそばされたり時に午後四時四十分。

皇后陛下の行啓

大正五年十月二十七日長くも 皇后陛下（現 皇太后陛下）本校に行啓仰せ出された。大正五年十月二十四日は本校創立三十年に相當するので、本校では此日記念式を舉行し、尙同月二十九日より四日間記念大展覽會を開催し、本校生徒並に卒業生の製作品又は卒業生の關與せる蠶絲事業會社の製作品及卒業教育に關する成績を蒐集陳列して、我國蠶絲業の發展に資せんことを期待した。然るにこの舉は長くも 陛下の御耳に達し、本校は二十七日 陛下の行啓を仰ぐの光榮に浴したのであつた。今その次第を當時の大日本蠶絲會誌上の謹記を藉りて拜することとする。

國母陛下には國産の主腦たる蠶絲業を彌が上にも奨勵させ給はんとの厚き御思召を以て、去る十月二十七日午前

九時三十分宮城御出門、西ヶ原なる東京高等蠶絲學校へ行啓を仰せ出されたり、千種典侍御陪乗申上げ大森皇后太夫、蜂須賀、三室戸皇后主事、烏丸權掌侍、生源寺命婦其他の隨員供奉し參らせ十時二十分御着あらせ給ふ、是より先き同校にては奉迎の準備オサ／＼怠りなく校内一點の塵埃を止めざる迄に清掃せられたるが校門近くに設けられたる大緑門には黄菊にて奉迎の二大文字を表し繭と桑とより成りたる校紋いとも鮮かに衆目を惹き交又されたる大國旗と引繞らされたる幔幕とは校内の莊嚴如何計りと往來の人をして自ら敬虔の念を生ぜしめたるも床し、斯くて陛下には便殿にて御少憩中本多校長より捧げ奉れる教育成績書を台覽あり、次で岡田文部大臣代理田所文部次官、仲小路農相、山川帝大總長、古在農科大學長、中川女子高等師範學校長、松浦専門學務局長、清浦蠶絲會々頭の諸氏に拜謁を賜はり、夫より本多校長の御先導にて創立三十年記念展覽會場に入らせ給ひ仔細に劉覽あらせられたり。斯くて展覽會に陳列せられたる珍品數千點の多きに達したるが、文祿時代より現今に至るまでの養蠶日記（山梨縣保坂氏出品）を初め寛政時代より明治迄の間八丈島より毎年徳川幕府に献上したる種々の織物、日光中宮祠に在る由緒正しき曼陀羅、京都太秦の廣隆寺寶物漢織吳織の太古の情趣に満ちたる木像等は、陛下最も入念に熱心に御覽あらせられ、中にも興味深く嚮せられたるは今年宮城紅葉山の御蠶室にて、御手づがら育ぐませ給へる蠶の繭より蠶絲學校へ御下命あらせられし製絲にして深く御目を留め給ひしやに承はる、正午より少しく遅れて便殿に入御午餐を召させられ午後更に御巡覽を仰せ出されたり、同校生徒が陛下の御爲に御餘興にもと謹製したる日本の最良蠶種と歐羅巴の最良蠶種とを交配して義士の討入人形の衣服等に擬らへたるものと在來の悪しき蠶種を吉良に見立

て、義士の槍に突かれをるものとを御熱覽遊ばされて、その優劣を察し給ひ種々御下問の御言葉を給はり、夫より製絲室に玉歩を移され女生徒四十名が黒き校服を着て製絲にいそしみつゝある實況を御覽あらせられ殊の外御機嫌麗しく順次御巡覽の上便殿に入御少憩の後還啓を仰せ出されたり時に午後三時なりき。此日本多校長以下職員生徒一同に對し、陛下には特に思召を以て左の御品を賜はりたり。

御袴地一着 本多校長へ

御菓子料 貳百圓 校長以下職員生徒一同へ

尙 陛下には非常なる御満足を以て同校に左の御言葉を賜はりたり。

本校は今より十餘年前一覽せる事あり本日再び茲に臨み且多數の陳列品を見るに其規模漸次完成の域に進み其研究進歩の蹟著しく御國の産業に裨益する處尠からざるを思ひ誠に喜ばしき次第なり自今尙一層斯道の發達に盡力せん事を望む

曩きに本校に賜はりたる 照憲皇太后陛下（當時 皇后陛下）の令旨と共に此の難有き御言葉を拜し、本校の光榮は勿論我が蠶絲業に従事する人々も亦無上の光榮である。

宮中御養蠶所奉仕及拜觀

本校が 皇室の御殊遇を受け無上の光榮に浴したことは嘗に行啓及台臨を度々辱ふしたことのみに盡きない。茲に

宮中御養蠶所に奉仕するの光榮に浴した事や御養蠶所拜觀の御儀を許させ給ひその光榮に浴したことを書添へなければならぬ、このこと洵に大御心を蠶絲業に注がせ給へる天恩無窮の辱けなき唯々感激に滿つるのであり、永く後昆に傳へると共に舉學一心皇恩の萬分の一にも酬ひ奉つるの覺悟を新にする次第である。

明治四十年の暮に於て、皇太子妃殿下（現 皇太后陛下）には宮中御養蠶の御思召あつて青山御所から農商務大臣に對して、御養蠶を取り行はせらるゝ事に就ての御下命があつた、農商務省では本多所長（當時東京蠶業講習所）に對して御所に罷り出で、御養蠶の事に就て御世話申し上げる様にとの事であつたから本多所長は直に伺候した、その時青山御所では、元、英照皇太后陛下が御養蠶を遊ばされた場所の一部を御養蠶室に當てさせらるゝ事に就ての御下問があつたので、本多所長はその場所を拜觀し多少御普請の上飼育あらせらるゝ様にと云ふ事を御建言申し上げた、その翌明治四十一年の春蠶から御養蠶遊ばさるゝことになつたが、御開始に先つて御養蠶所の主任に本校出身の有泉善三がその難有き恩命に浴した。

此年の御養蠶所の御成繭は四石九斗餘（重量四十六貫餘）で、これを本校（當時東京蠶業講習所）に製絲の御下命があり、本校にありては製絲教婦養成科（當時製絲講習科女生本科）第二學年生一同、齋戒沐浴の上生絲量四貫四百餘匁繰絲して御納め申し上げ、尙その他に、陛下の御手許にて御飼育の御成繭から二十六匁餘の生絲を御生産申上げたのであつた。

爾來、陛下には明治四十五年の春蠶迄は、皇太子妃殿下として大正二年の春蠶には、皇后陛下として青山御所内の

御養蠶所で御養蠶を行はせられたが、同年十月には宮城内紅葉山に新に御養蠶所新設の事となつて、本多所長はその取調及設計の御下命を拜して、陛下の御思召に基いて二様の蠶室設計書を提出し、その藁葺を瓦葺に御訂正になつた程度の御模様替にて、御新築になり、大正三年の春から新設紅葉山御養蠶所にて御養蠶遊ばされることとなつた。そして明治四十一年から大正五年迄は年々御養蠶所にて生産遊ばされた御繭は全部本校に御下げ遊ばされ、女生徒第二學年生一同潔齋して製絲の上御納め申上げたのである。

大正六年からは御養蠶所御成繭の一部を御養蠶所の簡易蠶室に於て、座繰や足踏器械にて御製絲遊ばされ、又他に屑物整理をも遊ばさるゝことになつて、本校教婦一名主任となり製絲教婦養成科第二學年生成績優等者數名がその作業に奉仕するの光榮に浴した。而して御成繭中御養蠶所で製絲遊ばさるゝもの以外の繭は従來通り本校に御下げ遊ばされ、製絲教婦養成科第二學年生一同が御繰絲申上げるの光榮に浴した。

皇太后陛下の御養蠶所に於ける御製絲は大正十五年迄で、昭和二年即ち、大正天皇崩御の翌年の一度だけは宮中の御都合により御取り止め遊ばされた、従つて昭和二年の御成繭は全部本校にて御繰絲致したものである。昭和三年よりは、皇后陛下に於かせられて御養蠶所に於ける御製絲の事を御續け遊ばされ（唯昭和十三年は宮中の御都合により御取止め遊ばされた）、本校教婦一名女生徒三名は毎年その御製絲に奉仕する光榮に浴してゐるのであつて洵に難有き極みである。皇后陛下の御思召によつて掃立式及奉告祭を行はせられることとなつたが、本多校長は御召を拜し御式に參列するの光榮に浴した。尙大正十一年に本多校長が宮中に參内の砌、皇后陛下には御養蠶を始めさせられてよ

り、當年は十五周年に相當するので、御養蠶十五周年を御記念遊ばさるゝために蠶絲業関係者の詠める養蠶の歌を集めて献上する様大森皇后太夫を通じて仰せ出され、色紙短冊を御下渡遊ばされたので、本多校長は難有御思召に感泣して退出し、後日謹んで養蠶に関する實感を歌つた二十六名の歌を取りまとめ、皇后官職を経て之を奉呈し、皇后官職に於ては、各皇族方を始め奉り其他の方々の養蠶に関する歌を集められ、陛下の御歌を始め奉り之を六曲一雙半の御屏風に納められ、宮中に御保存あらせらるゝことゝなつた由洩れ承はる。

x x x x x

大正天皇崩御あらせられ昭和三年よりは現 皇后陛下が 皇太后陛下の御後をつがせられ、宮中紅葉山御養蠶所に御養蠶製絲の御事を續けさせられることとなり、其の間に行はせられた御養蠶初めの御儀に本多校長は列席の光榮に浴したこと一再でなかつた。その御成繭の大部分は本校にて製絲の御下命を拜し、其の一部は紅葉山御養蠶所にて本校教婦一名主任となり女生徒三名製絲し奉り、その作業中に長くも 皇后陛下には同所に行啓遊ばされ製絲作業の實況を台覽あらせられる由洩れ承るのである。かゝる次第にて本多校長は、明治四十年から昭和十年迄宮中御養蠶所の御事に召され、本校出身者有泉善三は明治四十一年より御養蠶所主任を拜命し今日に至る迄奉仕し、左記本校出身者は御養蠶所奉仕の光榮に浴し、本校教婦及女生徒は御養蠶所若くは本校に於て、御成繭製絲に奉仕するの光榮に浴し來つたのである。如何に國産御奨励の爲めとはいへ洵に感激に堪へない次第である。更に又大正四年六月二十一日には本校學生に對し特別の御思召を以て、九重雲深き紅葉山御養蠶所を拜觀の儀御許容あらせられ、養蠶科三年生

三十四名製絲科三年生三十二名教婦養成科二年生二十三名は、職員八名と共に校長引率の下に拜觀の光榮に浴した。爾來春蠶の頃毎年卒業すべき在學生に對して御養蠶所拜觀の御儀を許させ給ひ今日に至る迄其の光榮に浴し、これら數々のこと獨り校長、職員、學生の光榮のみでなくそれは實に本校の光榮とする所であり、亦我國蠶絲業の光榮であつて、蠶絲業に對する深き大御心を拜し、皇恩の無窮唯々感涙に咽ぶの他これを表現する言葉を知らないのである。

御養蠶所奉仕者中本校出身者氏名(括弧内は本籍地)

後閑祐次(群馬) 井口英一(埼玉) 須藤鹿十郎(岩手) 田村唯一(東京) 田島邦太郎(群馬) 福田須(栃木) 新島宇平(群馬)
西尾卯一(岐阜)

御養蠶所御製絲奉仕者氏名

御養蠶所御製絲奉仕者中製絲主任は本校教婦で他は本校製絲教婦養成科

(昭和八年より製絲教婦科と改む)第二學年の生徒である(◎印は主任教婦他は生徒)

大正六年	◎山井 キヨ	岡崎 エキ	宮崎 こと	板根キシノ	小菅 タケ
大正七年	◎山井 キヨ	本條 鼎	吉岡ウメノ	村田 リヨ	御代川みつ
大正八年	◎田端 テル	宮本とどり	接待 トシ	御子榮千鶴	奥村 とみ
大正九年	◎岡崎 エキ	村川コナミ	高橋 スエ	安達 千年	間島 芳江
大正十年	◎宮本ちどり	高橋 スエ	矢矧トラヨ	足立コズエ	高野 タミ
大正十一年	◎接待 トシ	中西カヅ子	佐々木貞子	渡邊 ツネ	須田 輝子
大正十二年	◎高橋 スエ	中村 チマ	酒井ミドリ	田村ツチエ	新井 セキ

大正十三年	◎岡崎 エキ	藤井 君子	木野 トヨ	望月 節子	萩原 鶴香
大正十四年	◎佐々木貞子	小泉 チヨ	大井ちよう	佐藤ムツエ	沼 ヨ子コ
大正十五年	◎長瀬マキエ	廣瀬フミコ	宮本 信子	犬飼ハルノ	高橋 文子
昭和三年	◎酒井ミドリ	黒木 ミエ	高橋 菊乃	皆川 タイ	
昭和四年	◎飯田 花子	富山きよう	内藤 トシ	野上ミサヲ	
昭和五年	◎高橋 スエ	大賀スミヨ	北原不貫子	千葉 充子	
昭和六年	◎廣瀬フミコ	鈴木 ひさ	國分チサ子	太田みさ子	
昭和七年	◎皆川 タイ	大矢 サヨ	山下 アヤ	平田 杉	
昭和八年	◎清水みつる	鈴木マチ子	小池はるよ	河上 静枝	
昭和九年	◎中島 千里	竹内 政子	石合 文子	青笹シズヨ	
昭和十年	◎皆川 タイ	和田 綾子	菊池 愛子	河野 政子	
昭和十一年	◎鈴木マチコ	安田トモエ	山下 保	大瀬 すゑ	
昭和十二年	◎青笹シズヨ	加藤サダコ	浦元 治子	杉原 史江	
昭和十四年	◎野上みさを	河合よしの	岩野 孝子	榎田まさよ	
昭和十五年	◎大瀬 すゑ	木下 桃江	小杉みゆき	根本 松江	
昭和十六年	◎和田 綾子	高橋 トシ	長堀 やす	村井みね子	

第一編 蠶業試験場及蠶業講習所時代

第一章 本校の設立に至る迄の経過

明治初年に於ける政府の蠶業奨励

明治元年三月十四日 明治天皇紫宸殿に出御し公卿諸侯を率ゐ天神地祇を祭り五ヶ條を定めて神明に誓はせられ、これを國是として群臣に宣し萬民保全の道を拓き給ふた。

長多くもこの五箇條の御誓文は實に明治新政の綱領であり、爾後政府の施設は一としてこの政綱に據らないものはなく、その政治的經濟的社會的文化的な幾多の改善施設は何れも、御誓文の趣旨を政府が具現した丈であり、教育の根本方針もその制度も亦この國是によりて定められたのであつた。

かくして新生産様式の輸入移植、富國強兵、殖産興業をその基本的任務として發足した新政府は當時重要貿易品であつた蠶絲や生絲の生産に關して、如何なる施設をなし保護奨励政策を採つたか、本校創立の由來を識るために、その概括的な敘述を展開することとする。

當時伊佛等の歐洲蠶業地帯は蠶病益々猖獗を極め、養蠶は地を拂はんとする悲惨な状態にあつて、これが爲に無毒

蠶種の要求は熾烈となり、これに便乗して蠶種の海外輸出は開港後年と共に好況を呈し、地方蠶村は思ひ設けぬ利益を収めることが出来たので、俄かに轉じて蠶種製造を業とするもの簇出し一攫千金を夢想する輩多く、一時の奇利を狙つて甚だしい粗製濫造が行はれ出した。そこで明治元年四月大總督府は蠶卵紙生絲改所を江戸吳服橋内牧野駿河守邸内に設け、外國輸出の蠶種や生絲の検査を行ひ、横濱賣捌のものは必ず該改所の改印を受くる様、令達して粗製濫造を防止した。翌二年五月新潟にも蠶絲改所を設け、同年六月民政裁判所の達しにより生絲や蠶卵紙の密賣を禁止し、同年九月民部省は各開港場に、蠶卵紙生絲改所を設け輸出蠶種や生絲を検査し、蠶種の裏面には製造者の住所氏名を押印せしめ、或はその營業を監理するため鑑札を交付したりして、蠶種や生絲の質作偽製不正の仕立荷を嚴に取締つた。併し粗製濫造の弊はこれに依つて改められなかつたので、翌三年正月民部省は蠶種濫製取締のため製造概數を定めて、鑑札申請者を録上することとし、八月太政官布告により嚴に當業者の不心得を戒め、同時に民部、大藏省令として蠶種製造規則を發布し翌四年より之を實施して、その製造に關し免許の制度を施し、製造蠶種に對し内地向も輸出向も夫々證印を受けしめて、政府は蠶種製造の弊害の除去に一層精進したのであつたが、他面に於て民部省は上品蠶種褒賞規則を發布して、優良蠶種の製造を助長獎勵したのであつた。

明治四年九月には田畑勝手作が許され、本畑に桑樹の自由栽培が出来て養蠶はその便宜を享くることとなつた。曩に發布の蠶種製造規則は、その後數回改正が加へられたが、勢の趨く處濫造蠶種は益々増長して居たので、明治五年二月大藏省は養蠶地方に大總代を公選せしめ、これによりて政府と世話役との意思の疎通を圖り蠶種製造取締り

を一層強化し、又同年十一月太政官は蠶種原紙規則を出し原紙の專賣制を布き、蠶種の濫製を防ぎ尙その掃殺の再行を防ぐため五割引で買上をなすに至つた。この規則は明治七年蠶種原紙賣捌規則と改正されたが、專賣的制度に變りはなく、その賣捌所や賣捌時期や價格を限定したのであつた。

明治六年には蠶種製造規則を改めて蠶種取締規則とし、その粗製濫造を防止した、が併し政府の斯うした一聯の濫造防止策も、それ程に効果を見ず明治七年の蠶種燒却もその生産増加の勢を食ひ止め得なかつた。そこで明治八年二月太政官布告を以て蠶種取締規則を廢して、蠶種製造組合條例及蠶種製造組合議局規則を發布し、蠶種製造者二十人以上結合して組合を組織し、自主的に從來の悪弊を匡正せしめ、又蠶種製造類の協定も意圖された。

併しそれにも拘らず蠶種の粗製濫造の弊は矯正される様子もなく、他方歐洲養蠶地帯の蠶病の蔓延も、その病源體發見により革進的な蠶種製造法案出されて次第に終熄し、従つて蠶種の輸出は逐年減退し、不振を續くるに至つた。が併し依然として蠶種の輸出を計るもの多く横濱に蠶種の滞荷を生じ、遂に多量の蠶種を摺潰すの餘儀なきに至つた。かくて政府は蠶種對策の貧困に苦しみ明治十一年内務省は、蠶種に關する條例及規則一切を廢し蠶種の製造及販賣に對しては、政府の保護政策は一時放任の姿になり、蠶種の輸出亦殆どその跡を絶つに至つた。

處が明治十四年農商務省が設置せられ産業行政の事務が、内務省より移管されることとなり、蠶業に對し再び保護政策が採らるゝに至つた。然らば生絲の生産輸出の獎勵に如何なる對策がなされたか、それを觀るに生絲の製造に就ても、その貿易の熾となるにつれて、品質は粗惡不整一に流れ甚だしきは詐欺的行爲を敢てし本邦生絲の聲價を失墜

せしめる虞があつたので、明治五年五月大藏省は蠶種生絲説を刊行し地方に諭告して、その優等品を製し聲價を失はざる様に注意を促がし、又十一月地方當業者の主なるもの及び横濱生絲賣込問屋を招集して、生絲の粗製造の矯正方法を協議した、が他方従来の粗笨な座繰による生産方法は、生絲の品質や仕上を不完全粗悪ならしめ到底海外に激増せる生絲需要を充たし得なかつたので、政府は座繰より機械製絲への轉化に意を用ひ、その品質の向上を企圖し、これが爲に名師を海外に徴し一大製絲場を起し、佳品を製出して天下の生絲改良を圖ることになり、かくして有名な富岡の模範製絲工場は、明治三年外人を招聘しその技術指導の下に、明治四年十月操業する運びとなつた。斯くてここに傳習を受けた者、諸國に歸り製絲技術を廣め又工女等も歸國して製絲教婦となり、その地方の製絲技術の普及に努めたりして、官營富岡製絲場の我が器械製絲の開拓に寄與したことは、實に甚大であつた。更に明治六年一月工部省直轄の赤坂葵町の勸工寮器械製絲場が操業を開始し、又これらに魁けて民間に前橋製絲所や小野組築地製絲場等の洋式製絲場が建設されたりして、製絲事業熱は翕然として起り各地民間に於て、これに倣ふもの續出し、生絲の輸出は漸次隆盛に赴いた。然るに生絲の粗製造詐偽は依然として止むことなかつたので、明治六年一月大藏省は生絲製造取締規則を公布して、それを取締り段々嚴罰を加へるに至つた。そして政府は従来の生絲改所より更に一步を進めた生絲改會社の新設を意圖し、民間當業者の同盟結社を勸告して、専ら詐偽の舊弊を矯正し眞實の享利を興す様に、生絲改會社規則を明治六年二月公布し、或は生絲の賣買につき微細の事項まで一々法令布達を以て取締つた。併し明治十年以後生絲に關する諸取締規則は、これを廢止し民間の自爲に放任するに至つた、がそれも僅かな期間であつた。

明治十六年五月農商務省は、議事堂に各地方の蠶絲製造販賣に經驗ある者を招集して、製絲諮詢會を開き蠶絲の粗製造を矯正し、勉めて同一の品位を多量に製出して海外の販路を擴張するの意見を徴した。茲に政府の蠶種や生絲の製造販賣に關する保護干渉の意圖の再現が窺知され得るのである。更に翌十七年四月農商務省は、農務局の謂はば一分課として東京府下麴町區内山下町に蠶病試驗場を設けて、専ら微粒子病に關する各種の試験を行ひ傍ら當業者志者に指導を爲し、爾來政府は明治大正昭和に互り蠶絲業に對し幾多の施設をなし、その保護獎勵に努めその發展を所期し、以て今日我國蠶絲業をして世界的のものとし、國內重要産業としてその地歩を築き隆昌發展せしめるに至つたのである。この意味に於て蠶病試驗場の設置は、政府の蠶絲業保護政策の再發足點であり、それは言ひ換へれば我國蠶絲業發展の礎石をなすのである。斯くの如き重要な意義を有する蠶病試驗場、そこに本校は胚胎するのである。

明治の初年頃政府の蠶絲業に對する直接的な保護獎勵施設は、蠶絲に對する政府の試験研究施設を考慮外に措くならば、概略前記の如くであるが、間接的に蠶絲業を保護し發達せしめた政府の施設には、尙幾多のものが挙げられる、即ち明治十一年政府は國立第三十三銀行の請願を容れ、同行が生絲直輸出に對し海外荷爲替取組に要する資金を貸與したとか、或は明治十三年二月横濱正金銀行の設立に、同行資本金三百萬圓の内その三分の一を出資して、生絲貿易を擁護したとか、或は明治十四年八月政府は、無利息にて金百萬圓を横濱生絲賣込商に貸與し、聯合生絲

荷預所を設置せしめ生絲貿易の改善に貢献したとか言ふが如きはそれである。就中明治六年のウイン萬國博覽會に、國家として参加した事は我が蠶絲業發展に大きな役割を果たしたのである。その後明治九年のフィラデルフィヤ萬國博覽會への参加を始め、明治十八年迄に二十回参加し、政府は邦品の海外宣傳と生産技術の輸入に努め、このことは獨り蠶絲業のみでなく我國の産業發展に寄與する所甚大であつた。尙明治十年の第一回内國勸業博覽會に始まる官設博覽會や共進會が、明治初期に於て蠶絲業のみならず一般産業の哺育の上に大なる意義を有したことが、勸業政策上重要な役割をなしたことは明である。

蠶病試験場の設立

明治十七年四月農商務省は、東京府下麹町區内山下町に農務局の一枝體として蠶病試験場を設けたことは、前に記述したのであるが、併し政府の養蠶や製絲に對する試験研究や教育施設は、これを以て嚆矢とするのではない、或る意味に於て官營富岡製絲所及び工部省所管の赤坂葵町製絲場は、何れも蠶絲の研究教育の任務を果たした最初の試みであるが、その専ら養蠶製絲の試験及傳習の施設として登場した最初のものは、明治七年三月設置の内務省勸業寮試験場である。當時内務省は、蠶絲は國家重要物産でこれを改良し増産するの急務なるを認め、これがためにその試験研究の必要なことを洞察したのであつた。そこで政府は伊太利のバドワや埃國のゲルツ等に行はるゝ研究所に倣つて、蠶業試験掛を勸業寮所管内藤新宿試験場内に設置し、明治六年一月埃國博覽會に出張し同十二月歸朝した佐々木長淳をして、これを擔任せしめ蠶絲業に關する試験及傳習の事務を開始したのであつた。翌八年八月勸業寮は東京内山下

町博物館内に、製絲及捻絲と機械の器械を据付け、同じく明治六年埃國博覽會に出張し伊太利で製絲や捻絲の技術を習得して歸朝した圓中文助を擔任教師として、就任せしめ修業者を養成した。これは後に内藤新宿に製絲及捻絲場が新築されて、そこに移轉した。

そしてこの勸業寮試験場は、明治十年勸業局試験場と改稱し、同十二年五月には廢止となつたが、この間五ヶ年に亘りて幾多の試験研究が施行され、そこに養成された修業生は百五六十名の多數に達して、我國蠶絲業の改善に多大の貢獻をしたので、蠶事學校設置の計畫が佐々木長淳により建議された程であつた、然るに明治十二年の試験場廢止と共に、その實現を見るに至らなかつたのである。かくて明治十二年五月勸業局試験場廢止後、政府は蠶種や生絲の生産販賣に對すると同様に、蠶絲の試験研究及傳習に關しても無爲無策を以てのぞみ、その自然の成行に任せた。

然るに明治の初年歐洲養蠶地帯にて猩獸を極め、殆んど蠶絲業の廢滅を招かんと迄した微粒子病が、我國に於ても漸く發生しその慘害を被らんとする兆候が見られたので、農商務省はその撲滅豫防の方法を講究する必要を感じて、明治十七年四月初記の蠶病試験場を設け専ら微粒子病に關する各種の試験に着手するに至り、政府の蠶絲業保護政策はこゝに再發足したのであり、このことは前に記述した通りである。

斯くして我國蠶絲業保護政策の再發足點をなし、又嚴格な意味に於て本校の濫觴をなす蠶病試験場は、その設立の目的を達成する爲に、當時専ら微粒子病の遺傳傳染の状況や、その豫防法を試験講究したが傍ら蠶種の保護飼育法や製種改良法の研究をなし遂に框製法を新築するに至つた。これらの試験成績は、農商工公報號外蠶病試験成績第一報

として公刊し當業者に頒布し、翌十八年は前年の試験を繼續し、新に微粒子病毒被害の状況及豫防驅除の項目を加へて研究し、これらの試験成績は、農商工公報號外蠶病試験成績第二報に輯録し當業者に頒布した。更に明治十九年には前年來の試験を繼續し、尙白殭及軟化病の傳染及豫防法に關する試験を加へ、又佛國產黃金種及朝鮮國產白繭種の試育をなし、これらの試験成績は、農商工公報號外蠶病試験成績第三報に輯録し、當業者に頒布し斯業の開發に多大な貢獻をなしたのであつた。

斯くして蠶病試験場の既往三ヶ年間の試験成績に依り、我邦の蠶種にも微粒子病の存することの事實が明にせられたので、其害を未然に防がんとする趣旨から明治十九年八月十七日農商務省令第九號蠶種検査規則の發布を見るに至つた。

この蠶種検査規則の實施に付ては府縣令に依るものもあり、又組合の規定に一任するものもあつたが、孰れも蠶種製造者に鑑札を付與し検査合格の證印ある蠶種でなければ、その賣買讓渡を禁じたのであつた、そして管轄廳又は組合は便宜の地に、蠶種検査所を設け検査員を任用して之に當らしめた、蠶種は之を原種と製絲用種とに區別して顯微鏡で卵粒検査をし、その病毒の割合は原種は百分の五製絲用種は百分の十五以上なれば廢棄することとした。唯この規則の缺點は、既製蠶種の検査だけに止まり蠶兒繭蛾等の良否に關しては、何等の取締を設けなかつた點にあるが、兎も角政府が明治十七年に始めて麴町區内山下町に、蠶病試験場を起し續て翌十九年、その試験研究に基き蠶種検査規則を發布し、蠶病豫防の爲蠶種の検査取締を一層強化することとなつたことは、素より政府の英斷にして、之が

動機として蠶病豫防法は素より、積極的に蠶業技術の開發がなされたのである。この重大な意義を有する蠶病試験場が、本校の源流である。

因に前記蠶病試験成績に輯録されてる試験研究に就き、主要なる項目を記述すれば次の如くである。但試験擔任者の記載はない。

○農商工公報號外蠶病試験成績第一報 明治十八年四月刊行

黒瘧病の試験 製種法改良の試験 黒瘧病豫防法

○農商工公報號外蠶病試験成績第二報 明治十九年四月刊行

微粒子病傳染の試験 蠶蛹検査及蠶種製造法 蠶蛾及蠶種の検査

○農商工公報號外蠶病試験成績第三報 明治二十年四月刊行

蠶種の検査 微粒子病傳染試験 白殭傳染試験 微粒子病豫防試験 外國蠶種試育 絲縷細太試験

蠶病試験場の西ヶ原への移轉

農商務省農務局蠶病試験場の試験研究に基き、明治十九年八月蠶種検査規則の發布を見るに至つた事は前記の如くであるが、この規則は翌二十年の検査期——製絲用種は二十一年検査期——より實施さるゝこととなつたので、差し當りその實務に従事する検査員を養成することが、急務となり且又從來の如くその試験研究の分野を單に蠶病にのみ限定しないで、廣く蠶業上に關する諸般の學理及實地の試験研究を行ふ必要を、政府は洞察するに至り、茲に於て蠶

病試験場は、明治十九年十月二十四日東京府下北豊島郡西ヶ原村舊山林學校跡に移りて、蠶種検査規則に據る蠶種検査法の傳習を開始することとなり、傍ら蠶業に關する一般學術の傳習を行ひ、養蠶上一般の學理及實地の試験研究を行ふこととなつたのである。這般の消息を傳へる一資料として、當時の蠶茶課長半井榮の次の如き記述がある。

抑も蠶病の試験研究は明治七年内藤新宿農事試験場内に於て佐々木長淳氏率先之に従事せられしを以て嚆矢とす然るに明治十二年の頃改革と共に氏も試験場を去られしかば此事久しく中絶せしこと數年明治十六年十月に至り偶然の事よりして、再び蠶病試験の必要を生じぬそは余が友人小山正武君大藏省書記官在職中に専ら海外報告通信の事に執筆せられしが一日支那上海發行の新聞申報及循環日報を閱讀し佛人ブリユナ氏が支那蠶病根柢蠶業刷新更張の政策を草して李鴻章に提出せし記事を見せられ余に警告を與へられしに由る事君が記述に詳しくあり余乏しきを蠶業掛員に承けたるを以て時の農務局長岩山敬義に稟議する所あり而して局長の明敏果斷なる一言の下に意見を容れ練木喜三氏を呼び托するに蠶病試験研究の事を以てせらる練木氏曰く蠶で命を拜す維れ事重大獨力のよく當る所にあらず願くば實験篤志の人を獲て共に之に従事せんと是に於てか松永伍作氏來り參するに至る爾來試験の成績は農事報告及び農商工公報等に掲載せられ十九年に至り今の西ヶ原に移轉し更に規模を擴張し蠶業試験場となりしなり當時余亦蠶茶課長として練木氏等と共に擴張して山林局より受取りぬ小山氏の記述或は余に及び過獎敢て當らず余は唯上官の命令の下に聊か職務を奉ぜしのみ小山君が警告に至りては實に偉大得て測る可からざるものあり當に君の寄せられし文書今座右にありて余が譯出せし支那新聞即ちブリユナ氏の建議も別に稿を有せず余之を遺憾とせしこと久し然るに大正五年九月初偶然一葉の回鑿案を故紙箱より發見せり之を一讀するに未文を聞けども事實は得て徵すべし是本校の起源に關しては必要材料ならん哉（大正五年東京高等蠶絲學校創立三十年紀念祝賀展覽會出品者半井榮解説書）

かゝる次第にて蠶病に關する試験研究機關として、發足した蠶病試験場は西ヶ原の地に於て新に蠶業教育機關とし

ての國家的任務を負荷し、國家の殖産興業政策の意圖に向つて着々陣容を整備するに至つた、而してその地を西ヶ原に卜した日、即ち十月二十四日を毎年本校創立記念日とする所以もこゝにあるのである。

明治十九年に地方有志者にして蠶病豫防法の傳習を請ふ者多數あつたので、蠶病試験場は力めてその請を容れ、これらの者に對して蠶種検査法及これに關する學術を傳習し、試験の上合格者三二名に習得證を付與し、これを世に送り出したのであり、この最初の習得者こそ、本校の最初の修業者であり卒業者であつて、其氏名は次の如くである。

- | | | | | | |
|----------------|----------|---------------|--------------|---------------|---------|
| 長野縣信濃國諏訪郡平野村 | 今井 五介 | 埼玉縣御用掛 | 桑原 秀作 | | |
| 神奈川縣武藏國西多摩郡黒澤村 | 村田 策之助 | 埼玉縣武藏國横澤郡上敷免村 | 高田 慶藏 | | |
| 兵庫縣但馬國朝來郡喜多垣村 | 山崎 条藏 | 同 | 秩父郡大宮村 | 片山 嘉兵衛 | |
| 同 | 丹波國氷上郡谷村 | 有田 誠一郎 | 同 | 横澤郡小和瀬村 | 飯島 辨次郎 |
| 同 | 柳原村 | 長島 盛三 | 同 | 栃木縣勸業課屬 | 飯島 照正 |
| 埼玉縣武藏國比企郡増尾村 | 酒井 國平 | 山梨縣屬 | 滋賀縣近江國坂田郡柏原村 | 村上 是哉 | |
| 同 | 入間郡川越町 | 星野 照二 | 同 | 東淺井郡大濱村 | 日比野 藤三郎 |
| 同 | 横澤郡中瀬村 | 河田 欽三郎 | 同 | 長野縣信濃國東築摩郡洗馬村 | 松木 幹 |
| 同 | 上敷免村 | 栗田 定次郎 | 同 | 宮城縣陸前國登米郡西郡村 | 鹽原 重次 |
| 同 | 田中村 | 野澤 代次郎 | 同 | 佐藤 甚右衛門 | |

埼玉縣 秩父郡黒谷村	北谷戸正助	富山縣越中國下新川郡富山町	岩田健一郎
同 兒玉郡北堀村	原 鷲太郎	同 礪波郡下次郎嶋村	中田寅吉
郡馬縣上野國那波郡沼丘村	高橋山三	富山縣等外三等出仕	青木吉實
同 北甘樂郡七日市村	毛呂正容	岩手縣	佐久間誠哉
福岡縣豊前國仲津郡國作村	八隅清治	宮崎縣日向國東白杵郡延岡	佐藤鷄太郎
鹿兒島縣	津田當人	宮崎縣履	徳山政之助

本校の設立

農商務省農務局蠶病試驗場が明治十九年十月二十四日、西ヶ原に移りてより昭和十六年十月二十四日に至る迄正に五十五年の歲月を經過し、其間その形容を漸次擴充し改組し、又名稱の變更を行つた。即ち蠶病試驗場は西ヶ原に移轉した翌年明治二十年四月に、農務局蠶業試驗場と改稱して同二十四年三月迄繼續し、更に同年四月農務局假試驗場蠶事部と名を改め翌々年四月には再び農務局蠶業試驗場と改稱した。然るに明治廿九年四月蠶業講習所となり官制布かれて、茲に從來農務局の一枝體謂はゞ一分課としての蠶業試驗場は發展的解消して、獨立の官廳となり更に明治三十二年四月東京蠶業講習所となつた、そして大正二年六月文部省所管になり翌年四月東京高等蠶絲學校と改稱し、昭和十五年四月東京府北多摩郡小金井町に移轉し今日に至つたのである。

この五十有餘年間は我國運の興隆に伴ひ萬般の制度施設が急激に躍進した時期であり、蠶絲業界もその間波瀾重疊

に富み坦々たるものではなかつたが、大勢は常に向上發展の一路を辿つたのであつた、従つて斯業教育方面も同じく飛躍的に進展し來たつた。蓋し産業と實業教育、従つて蠶絲業と斯業教育とは密接不可離の關係に立つたものであり、一國産業の隆替と實業教育の盛衰は、因を成し果となつて相互に反映するものであり、又すべき筈のものであるからである。この意味に於て本校五十年の史實は、亦我邦蠶絲業の發展過程の一面を物語ると稱するも、敢て過言でない様に思はれる。

第二章 蠶業試驗場時代

第一節 總 說

農商務省農務局蠶病試驗場は、明治十九年十月二十四日麹町區内山下町より東京府北豐島郡西ヶ原舊山林學校跡に移り、試験研究の範圍を擴張し、舊に蠶病のみならず蠶業上に關する一般の學理及實地の試験研究を行ふこととなり、名を蠶業試驗場と改むるに至つた、それは明治二十年四月である。そして前年蠶種検査規則の發布に伴ひ、その検査員を養成する必要を生じたので、蠶業試驗場は傳習科程を設けて各府縣より生徒を募集し、蠶種微粒子病検査法並に蠶業に關する學理實地の傳習をなすこととなつた。斯くして蠶業傳習は、明治二十年には四月十五日開始七月十日終了、翌二十一年には四月一日開始七月十日終了し、夫々試験の上習得證を授與しこれらの試験習得者に明治十九年の

習得者三二名を加ふればその數合計五八二名の多數に達したのであつた。然しながらこれらを以てしても蠶種検査員に對する社會的需要は充たし得なかつたので、明治二十一年八月十五日より三十一日迄の間に於て蠶種微粒子病検査法の檢定試験を行ひ、志願者五百餘名の中から優等者四九名を選んで合格證書を下附したのであつた。その志願者はかつて本場の修業者にして蠶種検査法を修めた者に、之を限定したのであつたが、尙かくの如き多數の志願者があり、これを以て觀てもこの種の施設が、如何に適切なものであつたかと窺知し得られる。

明治二十二年に於ける蠶業傳習は、前年と同様に之を爲し（但期日一ヶ月繰上三月一日開始六月二十五日終了）一九六名に試験の上習得證を授與した、斯くして蠶業試験場開設以來、蠶種微粒子病検査法の習得者は、その數八二七名に達し、最早蠶種検査規則の實施に必要な検査員は、その不足を感ぜざるに至つたので、明治二十三年には試験研究に關する事業は、總て前年來の企畫を踏襲し敢てこれを變更しなかつたが、蠶業傳習の目的だけは變更するに至つた。即ち従來は専ら適當な蠶種検査員を養成することに重點を置き、傍ら蠶業一般に關する學術を傳習し來つたのであるが、明治二十三年からは、蠶業全般に關する傳習を主とし附するに蠶種微粒子病検査法の傳習を以てして、地方養蠶傳習所教師若くは同巡回教師養成をその目的とするに至つた。これに伴ひ傳習の科目は之を増加し且その程度を高めた。蓋し明治十七年蠶病試験場創設以來、これに倣つて養蠶試験場や傳習所を設けて、蠶業の研究或は生徒の養成をなす施設次第に増加し、當時既に二府二十七縣に涉りて、實に三百二十五ヶ所の多數を見るに至つたのである。然るにこれらの試験研究の任に就き或は傳習教授を掌るべき者にして、相當の學術と經驗を有するもの乏しく、概して充分の効果を期し難き状態であつたからである。

茲に於て明治二十三年よりは、傳習生募集人員を五十名前後に減じて各府縣より募集し、三月中旬頃入場せしめ八月下旬頃習業試験を行つて——蠶業傳習の開始終了時期は年によりて多少變動があつた——習業證を授與したのであつた。

處が明治二十四年三月農商務省は、從來所管の農事畜産製茶及蠶絲の試験場を併せて、農務局假試験場と改稱しこれに伴ひ蠶業試験場は、農務局假試験場蠶事部と改稱することとなつた。然るに明治二十六年三月農事試験場官制發布されて、從來の農務局假試験場なる名稱は廢止することとなり、農務局假試験場蠶事部は舊に復して蠶業試験場と稱することとなつた。然るに明治二十九年三月蠶業講習所官制の發布を見るに至り、從來の試験場は廢止となり、その所管し來たつた諸般の業務は之を擧げて蠶業講習所に移したのであつた。

斯くして蠶業試験場時代は、明治二十年四月から同二十九年三月に至る迄の約九年間を劃するが、この間に日清戰爭あり我國が先進諸國に伍して近代的に成長し來たつた途上に於て、その最初の一大試練も大勝利に終結し我國の經濟は、急速に發展し諸産業殊に纖維工業はその發達史上劃期的の進展を遂げたのであつた。明治二十三年から同三十二年迄の蠶絲業の狀況を示すと

年 度	桑畑反別	繭産額	生絲輸出量	輸出品總價額に對する蠶絲類及絹織物類
第一編 蠶業試験場及蠶業講習所時代				
			春夏秋別割合	
			春	
			夏	
			秋	
			三五	

明治二十三年	二四三 ^{千石}	一一七 ^石	七三%	二一%	六%	二二〇 ^{千石} 三	三六	三六・四%
明治二十五年	二三一	一四八	七六	一七	七	五四三一五		五二・九
明治二十七年	二五三	一七九	七〇	二一	九	五四八五		四九・四
明治二十九年	二八八	一八三	七五	一四	一一	三九一九		三七・五
明治三十一年	三〇四	二〇二	七四	一五	一一	四八三八		三七・二

斯くの如き斯業の飛躍發展は、一方民間の努力に俟つ處大であつたことは言ふ迄も無きことながら、その根基を培ひ遺憾なくその力を伸さしむるに至つた主要な事由として、蠶業試験場が我國蠶絲業に關する唯一の國家的試験研究機關及教育機關として、その負荷せる重大なる任務を完遂し來たつたと言ふことが擧げられると思ふ。

そこで如何なる傳習科程を通して斯業教育がなされたか、又斯業に關し如何なる試験研究が長年月に互り繼續されたか、これを次に記述することとする。

第二節 蠶業の傳習及其課程

蠶業試験場は、明治二十年四月に蠶種微粒子病検査法の傳習を受けんとする者二七九名を入場せしめたが、その入場の初めに於て實業上の試験を行ひ、總員を分ちて甲乙丙丁戊己の六組にし又一組を十五伍に分ち、實業に熟達せるものを伍長に選び、その伍長の互選によりて各組に組長一名を置いて傳習の便利を圖つた。その傳習は四月十五日開

始し七月十日終結しその科目は次の如くであつた。

- | | |
|-------------|------------------|
| 動物學大意講義 | 理化學大意講義 |
| 植物學大意附桑病論 | 理學大意附氣象論 |
| 化學大意 | 桑樹栽培法講義附病理及蟲害豫防法 |
| 蠶體解剖生理及病理講義 | 繰絲法講義 |
| 養蠶術講義 | 養蠶術實習 |
| 繭質鑑定法實習 | 製種法實習 |
| 蠶種検査法實習 | |

以上の傳習を終了し試験に及第して、習得證を得たもの二七五名で、尙この他に本場の雇員にして平素實業に従事し、傍ら學理と検査法とを修め試験に及第して習得證を得たもの一四名あり、先に習得證を得た三二名を加へると合計三二一名に達したのであつた。

明治二十一年には傳習生の資格を定めて、年齢二十歳以上四十歳以下で實業に従事せしこと三年以上のものとした。それは蠶種検査員は技術に熟達することの必要なこととは言ふ迄もないが、その年齢の老若及實業に經驗を有するか否かは、社會的信用を得る上に多大の關係を有したのみならずその年齢及履歴の區々は、傳習上にも非常な不便があつたからである。この年は四月一日より検査法の傳習を開始し、七月十日にはそれを終結した、その傳習科目は次の如

くで、その習得證を授與した者二六一名の多數であつた。

動植物學大意講義

理化學大意講義

桑樹栽培法講義附病蟲害豫防及驅除法

蠶體解剖生理及病理講義

氣象學大意講義

土壤論大意講義

農業經濟論大意講義

養蠶術講義及實習

繭質鑑定法實習

製絲法實習

顯微鏡術及蠶種検査法實習

尙この年八月十五日より三十一日迄の間に於て、蠶種微粒子病検査法の檢定試験を行ひ、四九名の優等者に合格證書を下附したことは前記の通りである。

明治廿二年に於ける傳習科程は、前年と同様でその習得者一九六名であつた。毎年傳習生習得證授與の日には朝野の名士が臨席され、錦上華を添ゆるのであつたが、試みにこの年六月二十九日舉行された習得證授與式の式典を當時の日本蠶業雜誌の記すところに付て觀れば、次の如くである。

當日午後一時傳習生一同式場に參集、同時三十分松方大臣岩村農商務次官 東京農林學校長高橋是清農務局長前田正名同次官 片山達平、農商務技師岡毅同練木喜三の諸氏臨場され、前田局長先づ習得證を授與練木技師習得者に希望を陳べ、松方大臣蠶業上に關する意見を演説し、傳習生總代答辭を述べて三時三十分式を終了す。

松方大臣の演説 方今蠶業上に屬する問題二あり即一は現在の桑園を保守して改良を謀ること一は改良を謀ると同時に擴張をも謀ること是なり、余は前二說中何れに同意を表するやと言ふに第二說を採らんと欲するなり、然れども余が茲に改良と稱するものは單に精良なる生絲を製造するのみにあらずして廉價に製造するなり、その製造精美にしてその價格低廉なるときは、各國何れの市場に向ひて競争を試むるも決して敗北を取ることなかるべし、長くも我 天皇陛下が外國より軍艦を購求すべしと宜ひたるとき余は日本の軍艦は總て生絲を以て購求するものなれば軍艦を購求せんと欲せば多く生絲を産出せんことを謀らざるべからずと上言したり云々

明治二十三年には前記の如く専ら地方養蠶教師又は巡回教師となるものを養成することとなり、從來より募集人員を減じ一府縣二名若しくは一名の割合で大體五十名前後、府縣廳を経て募集し、その傳習の程度を高め學期を延長して三月十五日傳習開始、八月二十七日終了同月三十日修業證を授與し、亦明治廿四年にはその學期を前年より一層繰上げ二月一日傳習開始七月二十七日終結同月三十日修業證を授與した。

明治廿五年に於ける蠶業傳習も、前年と同様であつたが唯一つ異つた點は傳習生募集の際特に農務局より實業上の問題を下附し、これに筆答せしめてその優等者を選んだことである。勿論其實業上の試験問題は年によりて異つたが、一例として明治廿六年入場者に課せられた養蠶實業問題を記せば次の如くであつた。

明治廿六年入場者養蠶實業問題(明治廿五年十一月執行)

- 一、今新たに桑園を設けんとするものあり早中晩桑の割合は各幾干にして一反歩に付幾株宛何時頃如何に栽植せば可なるや
- 二、蠶種貯藏前の注意及貯藏の目的如何
- 三、普通製蠶種一枚の卵量及之より生ずる蠶量は幾何ありや

- 四、蠶量五匹の蠶に對する各齡の給桑量及其回数如何？
- 五、蠶兒の發育は温度の高低に因り遲速ありと云ふ、果して然らば蠶室内の平均温度六十五六度なれば幾日間七十二三度なれば、幾日間にして上簇するものなりや
- 六、熟蠶體の重量に對する蛹量及絲量の割合如何
- 七、殺蛹期の適度は何によりて之を知るを得べきか而して豐熟の蠶兒の上簇後の温度平均七十四五度なる時は上簇の日より凡幾日目に收購し幾日目に殺蛹して良かるべきや

そして明治廿五年入場者に對する傳習科目は次の如くである。

動物學大意附除蟲論 桑樹栽培論附土壤論及肥料論

蠶兒解剖生理及病理論附養蠶沿革 養 蠶 術

製絲法大意 顯微鏡使用法附蠶種検査法

蠶體解剖實習 養 蠶 實 習

明治二十六年年度蠶業傳習は、前年度と同様に之を行ひ四十名に修業證を授與したのであつた。即ち傳習生募集の際地方廳へ前記の養蠶實業試験の問題を發し、その解答優等なるもの五二名を選び、二月一日より傳習の講義を始め桑葉の開錠蠶兒の發生を俟つて、實地に飼育法を傳習し更に夏蠶の實習をも課し、その間に微粒子病毒検査法や其他蠶業上必要な實習は、學科の講義及飼育法傳習の間に授け七月三十一日終結し、この日修業證を授與したのであつた。その傳習科目は前年と全く同一である、その傳習科目と擔任者に就て、當時の大日本蠶絲會報の記事を掲ぐれば次の如くである。

蠶業傳習科目と擔任者（明治二十六年年度）

- 一 蠶業沿革蠶體生理蠶體病理 農商務技師 練 木 喜 三
- 一 製 絲 法 農商務技手 高 橋 信 貞
- 一 物理學、氣象論 農商務技手 大 林 雄 也
- 一 蠶體解剖 農科大學教授 理學博士 佐々木 忠二郎
- 一 顯微鏡使用法、蠶體解剖實習蠶種検査 農商務技手 芝 山 宗 太 郎
- 一 養蠶術、養蠶實習 農商務技手 松 永 伍 作
- 一 化學、桑樹栽培論、土壤論、肥料論 農商務技手 本 多 岩 次 郎
- 一 動物學植物學 農商務技手 内 山 定 一

明治二十七年、二十八年兩年度に於ける蠶業傳習に關する課程、及其學期の開始終結何れも明治二十六年年度に於けるそれと大差は無かつた。この當時の蠶業試験場が如何なる組織を有して居たかに關し、日本蠶業雜誌（明治二十六年十月第六五號）の掲げる處に據れば次の如くである。

農務局蠶業試験場規程

第一章 組 織

第一編 蠶業試験場及蠶業講習所時代

- 第一條 農事部ハ農業ニ關スル試験及教育ヲ掌リ本業ノ改良進歩ヲ計ルヲ以テ目的トス
 - 第二條 農事部ニ左ノ職員ヲ置キ農務局第二課員ヲ以テ之ニ充ツ、監督 試験員 教員 事務員
 - 第三條 監督ハ部員ノ試験及授業ヲ統督シ部内ノ庶務ヲ處辨スルモノトス
 - 第四條 試験員ハ農業ニ關スル試験ニ從事スルモノトス
 - 第五條 教員ハ農業ニ關スル教育ニ從事スルモノトス
 - 第六條 事務員ハ庶務ニ從事スルモノトス
 - 第七條 農事部ハ臨時助手ヲ雇入レ試験員教員ノ命ヲ受ケ試験及教育ヲ補助セシム
 - 第八條 試験教育其他緊要ノ事項ハ評議會ヲ開キテ之ヲ協議スルモノトス 評議會ハ監督 試験員 教員 事務員其他農務局第二課員ヲ以テ組織ス
 - 第九條 試験ノ成績及農事部記事ハ毎年十一月監督ニ於テ之ヲ編成シ第二課長ヲ經由シ農務局長ノ裁可ヲ得農事報告トシテ之ヲ印刷頒布スルモノトス 但特ニ有益ナル試験ノ成績ハ臨時報告トナスコトアルヘシ
 - 第十條 地方農業者ニシテ有益ナル事項ヲ報告シタルトキハ評議會ノ決議ヲ經テ農事報告中ニ登載スルコトアルヘシ 前項ノ場合ニハ報告者ニ農事報告五部ヲ贈與ス
 - 第十一條 本部製造ノ農種ハ地方農ヲ經由シ九月三十日迄ニ農務局へ願出テタル農業篤志者ニ配布スルコトアルヘシ
 - 第十二條 農種ノ配布ヲ受ケタル者ハ成苗ニ合テ添へ其年八月三十一日迄ニ飼育ノ結果ヲ本部へ報告スヘシ
 - 第十三條 農業ニ關スル諸般ノ質問ハ主査ヲシテ之ヲ調査スルモノトス
 - 第十四條 部内ノ概覽ヲ購フモノアルトキハ之ヲ許可ス概覽人心得ハ別ニ之ヲ定ム
- 第二章 農業試験

第十五條 農業ノ試験ハ左ノ科目ニ據リ施行スルモノトス

- (一) 桑樹 栽培 撰擇 病害
- (二) 養蠶 蠶種 飼育 蠶病
- (三) 製絲 殺蛹 貯藏 練絲
- (四) 器具

第十六條 試験ノ項目ハ毎年一月評議會ニ於テ之ヲ定メ農務局長ノ裁可ヲ得テ施行スルモノトス

第十七條 試験ノ事項毎ニ主任ヲ定メテ之ヲ擔當スルモノトス

第十八條 試験成績ハ其主任ニ於テ之ヲ詳記シ毎年十月三十一日迄ニ監督ニ報告スヘシ

第十九條 試験成績ノ報告ニハ其主任ノ官氏名ヲ記入スヘシ

第三章 農業教育

第二十條 本部農業教育ハ農業ニ關スル學理實業ヲ傳習シ農業巡回教師若クハ農業傳習所教師トナリ得ヘキ者ヲ養成スルヲ目的トス

第二十一條 傳習生ハ毎年人員ヲ定メ各府縣ヨリ之ヲ募集スルモノトス

第二十二條 傳習生志願者ハ毎年八月三十一日迄ニ其旨ヲ管轄地方農ニ願出ツヘシ

第二十三條 傳習生志願者ハ左ノ資格ヲ有スル者ニ限ル 品行方正ニシテ傳習期中家事ノ係累ナキコト 年齢二十五年以上ノコト

三ヶ年以上養蠶實業ニ從事シタルコト

第二十四條 傳習生志願者ノ試験科目左ノ如シ

- (一) 算術比例迄
- (二) 動植物理化學大意
- (三) 養蠶實業

但尋常中學校尋常師範學校農學校又ハ之ト同等以上ナル校所ノ卒業證書ヲ有スルモノハ(一)(二)(三)ノ試験ヲ要セズ

第一編 農業試験場及農業講習所時代

- 第二十五條 傳習ハ毎年十一月一日ニ始メ翌年七月三十一日ニ終ルモノトス
- 第二十六條 傳習期ハ分テ二學期トス
 - 第一學期 自十一月一日 至四月二十日
 - 第二學期 自四月二十一日 至七月三十一日
- 第二十七條 各學期ニ於テ授クル傳習課程左ノ如シ
但時宜ニヨリ之ヲ變更スルコトアルヘシ
- 第一學期講義 理學化學氣象學桑樹害蟲論附動物學 桑樹病理論附植物學 桑樹栽培論附土壤及肥料論 蠶論 養蠶術 製絲術實習 顯微鏡使用法附蠶種検査
- 第二學期實習 養蠶(春夏二回) 繭絲検査 蠶體蛹蛾ノ解剖
- 第二十八條 試驗ハ每學期ノ終ニ施行シ其得點百ヲ以テ滿點トス 但時宜ニヨリ臨時試驗ヲ行フコトアルヘシ
- 第二十九條 第一學期ノ終ニ於テ三課目以上四十點未滿ノモノハ第二學期ノ傳習ヲ受クルコトヲ得ス 但此場合ニ於テハ傍聽生トシテ修業スルコトヲ得
- 第三十條 傳習期ノ終ニ於テ總課目平均點數六十點以上ヲ得タル者ヲ及第トシ卒業證ヲ授與ス 但三課目以上四十點未滿又ハ養蠶實習六十點未滿ノモノハ落第トス
- 第三十一條 傳習期中休業日左ノ如シ
日曜及大祭日 自十二月二十九日 但養蠶實習中ハ日曜日タリトモ休業スルコトナシ
至一月五日
- 第三十二條 傳習生卒業ノ後尙深ク蠶業ノ研究ヲナサント欲スル者ハ評議會ノ議決ヲ經農務局長ノ裁可ヲ得テ研究生タルコトヲ得
- 第三十三條 研究生志願者ハ其研究スヘキ事項ヲ詳記シ農務局長ニ出願スヘシ
- 第三十四條 研究生ノ研究期ハ毎年十一月一日ヨリ翌年七月三十一日迄トス

- 第三十五條 研究生ハ時宜ニヨリ本部ノ業務ヲ手傳ハシムルコトアルヘシ 但コノ場合ニ於テハ相當ノ報酬ヲ與フルコトアルヘシ
- 第三十六條 研究生ハ研究期ノ終ニ於テ其研究事項ヲ詳記シコレヲ監督ニ差出スヘシ
- 第三十七條 研究生ニハ研究期ノ終ニ於テ研究證書ヲ授與ス
- 第三十八條 蠶業篤志者ニシテ講義ヲ傍聽シ實業ノ臨視ヲ望ム者ハ評議會ノ議決ヲ經農務局長ノ裁可ヲ得テ傍聽生タルコトヲ得
- 第三十九條 傍聽生志願者ハ地方廳ヲ經由シ農務局長ニ出願ス可シ
- 第四十條 傍聽生ハ自己ノ望メル學課ニ就キ傍聽シ實業ヲ臨視スルコトヲ得 但自ラ實業ニ從事スルコトヲ得ス

第三節 試驗研究其他

農商務省農務局蠶業試驗場は、明治二十年四月より同二十九年三月(この間に農務局假試驗場蠶事部時代介在す)に互り、蠶業に關する試驗研究機關として苟も蠶業に關し利害得失に係る所は、漸次これを試驗研究し一々其成績を擧げて當業者に報導して、斯業の改善發達の資に供したのであつた。即ち明治二十一年三月に同二十年度に行ひたる試驗成績を「農商工公報號外蠶病試驗成績第四報」として公刊したるを始めとし、毎年號を追つて公刊し、同二十二年には「蠶病試驗成績報告」とし前來の號を次ぎ、同二十三年度には之を「蠶事試驗成績」と改稱し、更に同二十五年より「蠶事報告」と改稱し何れも其の號を次ぎ公刊し、別に明治二十八年三月に「第一次蠶事試驗成績第十年報」を公刊し當業者の参考に便じたのであつた。該報は蠶病試驗場創立以來明治二十六年に至る十年間に行ひたる試験の要領を摘録し、各項目に依り類別編纂して一卷となしたものである。

今前記各種の試験成績報告に輯録せる主要なる試験項目や報告を記述すれば次の如くである。

- 農商工公報號外蠶病試験成績第四報 明治二十一年三月刊行（但試験擔任者記載なし） 蠶種保護並強弱及重量試験
- 桑質試験 蠶卵孵化早晚試験 小笠原島産桑葉試験 給桑過不足試験 蠶種得失試験 蠶病試験 微粒子病試験
- 白蠶蠶豫防試験 費用試験

- 農商工公報號外蠶病試験成績第五報 明治二十一年十一月刊行（但試験擔任者記載なし） 備桑室試験 葉圍蠶室試験 蠶種得失試験 給桑過不及試験 桑質試験 蠶卵孵化早晚試験 蠶體撰別試験 土耳其産バグダ種試験 支那種試験 微粒子病試験 軟化病試験 蠶種保護及浸水試験

○蠶病試験成績第六報 明治二十二年十一月刊行（但試験擔任者記載なし）

- 摘桑試験 葉圍蠶室試験 桑質試験 蠶卵孵化早中晩試験 五齡中の温度高低試験 蠶座乾温濕試験 蠶座廣狹試験 給桑回数試験 蠶兒動靜試験 餉食試験 外國蠶種試験 微粒子病試験 白蠶蠶試驗 蠶卵孵化延期試験 蠶卵色澤試験 蠶兒の體温試験 蠶兒絶食試験 養蠶標準表

○蠶事試験成績第七報 明治二十四年三月刊行（試験擔任者記載なし）

- 桑葉の厚薄水分及乾燥試験 桑質試験 給桑及蠶座廣狹試験 減食試験 餉食試験 蠶兒動靜試験 發生早晚試験 發生抑止試験 蠶種得失比較試験 支那蠶種試験 蠶卵の色澤及形狀試験 葉圍蠶室試験 白蠶蠶豫防試験

○蠶事試験成績第八報 明治二十四年十一月刊行（但試験擔任者記載なし）

- 桑葉厚薄試験 桑葉硬軟試験 給桑試験 節食試験 餉食試験 産卵早中晩試験 蠶卵の色澤及形狀試験 被害蠶種試験 虛弱性遺傳試験 高温育試験 蠶箔試験 製絲用水質試験

○蠶事報告第九報 明治二十六年三月刊行（◎印試験主任 ○印補佐）

- 收葉試験 ◎技手松永伍作 ○技師練木喜三
- 桑葉厚薄試験 ◎技手松永伍作 ○技師練木喜三 ○技手芝山宗太郎
- 泥桑試験 ◎技師練木喜三 ○技手松永伍作 ○技手芝山宗太郎
- 蠶種密藏試験 ◎技手本多岩次郎 ○技手松永伍作 ○技手芝山宗太郎
- 被害蠶種試験 ◎技手本多岩次郎 ○技手松永伍作 ○技手芝山宗太郎
- 産卵早中晩試験 ◎技手本多岩次郎 ○技手松永伍作 ○技手芝山宗太郎
- 孵化早晚試験 ◎技手松永伍作 ○技師練木喜三 ○技手芝山宗太郎
- 飼育標準改正試験 ◎技手松永伍作 ○技師練木喜三 ○技手芝山宗太郎
- 外國蠶試育 ◎技手芝山宗太郎 ○技手松永伍作
- 虛弱性遺傳試験 ◎技手松永伍作 ○技師練木喜三 ○技手芝山宗太郎
- 繭質改良試験 ◎技手松永伍作 ○技師練木喜三 ○技手芝山宗太郎
- 製絲用水質試験 ◎技手本多岩次郎 ○技手高橋信貞

桑樹萎縮病調査

囑託員 堀 正太郎 囑託員 田中延次郎

○蠶事報告第十號 明治二十七年三月刊行 (◎印試驗主任△印手傳)

- 貯桑試驗 ◎技手 松永 伍作
- 桑葉厚薄試驗 ◎技手 松永 伍作 △野崎岩次郎
- 泥桑試驗 ◎技師 練木 喜三 △片山 莊治
- 雨桑試驗 ◎技師 練木 喜三 △片山 莊治
- 蒸桑試驗 ◎技師 練木 喜三 △片山 莊治
- 蠶種密藏試驗第二 ◎技手 本多岩次郎 △北山正太郎
- 半食試驗 ◎技師 練木 喜三 △片山 莊治
- 餉食試驗 ◎技手 松永 伍作 △峯村 喜藏
- 晝夜食桑試驗 ◎技手 本多岩次郎 △北山正太郎
- 給桑卜結繭卜關係試驗 ◎技手 松永 伍作 △野崎岩次郎
- 明暗上簇試驗 ◎技手 本多岩次郎 △北山正太郎
- 上簇早晚試驗 ◎技手 本多岩次郎 △北山正太郎
- 簇内乾濕試驗 ◎技手 本多岩次郎 △北山正太郎

同功繭試驗

◎技手 芝山宗太郎 △庄田誠太郎

蠶ノ種類試驗

◎技手 芝山宗太郎 △庄田誠太郎

繭質改良試驗

◎技手 松永 伍作 △峯村 喜藏 △野崎岩次郎

飼育標準改正試驗

◎技手 芝山宗太郎 △大竹作之助

蠶ニ關スル發育試驗

◎技手 本多岩次郎 △北山正太郎 △庄田誠太郎 △園田國三郎

殺蛹及貯藏試驗第一

◎技手 高橋 信貞 △野崎岩次郎 △庄田誠太郎

カツホムシノ調査

◎農科大學教授 理學博士 佐々木忠二郎

製絲用水質試驗第三

◎技手 本多岩次郎 △庄田誠太郎

○蠶事報告第十一號 明治二十八年三月刊行

貯桑試驗

◎技手 松永 伍作

家桑野桑比較試驗

◎技手 本多岩次郎 △都丸 綱吉

蠶兒飼育上萎縮桑葉試驗

◎技手 本多岩次郎 △都丸 綱吉

蠶種浸水試驗

◎技手 本多岩次郎 △都丸 綱吉

蠶種密藏試驗第三

◎技手 本多岩次郎 △都丸 綱吉

餘附蠶種試驗

◎技手 本多岩次郎 △都丸 綱吉

第一編 蠶業試驗場及蠶業講習所時代

掃立早晚試驗 ◎技手 松永 伍作 △野崎岩次郎
 稗蠶飼育試驗 ◎技手 芝山 直清
 同功繭試驗 ◎技手 芝山 直清 △白井 象藏
 蠶ノ種類試驗 ◎技手 芝山 直清 △白井 象藏
 繭質改良試驗 ◎技手 松永 伍作 △松田宗兵衛
 殺蛹及貯藏試驗第二 ◎技手 高橋 信貞
 製絲用水質試驗第四 ◎技手 本多岩次郎 △松田宗兵衛
 ○蠶事報告第十二號 明治二十九年三月刊
 野桑給與試驗 ◎技手 本多岩次郎 △倉持 龜吉
 桑葉滋養試驗第一 ◎技手 本多岩次郎 △倉持 龜吉
 蠶種密藏試驗第四 ◎技手 本多岩次郎 △渡邊源太郎
 蠶蛾交尾時間試驗 ◎技手 本多岩次郎 △渡邊源太郎
 蠶卵加害試驗 ◎技手 田原休之丞 ◎技手 二宮 鶴松 △子安 雅雄
 眠中加害試驗 ◎技手 田原休之丞 ◎技手 二宮 鶴松 △子安 雅雄
 蒸桑試驗 ◎技手 田原休之丞 ◎技手 二宮 鶴松 △子安 雅雄

雨桑試驗 ◎技手 田原休之丞 ◎技手 二宮 鶴松 △子安 雅雄
 乾燥桑試驗 ◎技手 田原休之丞 ◎技手 二宮 鶴松 △子安 雅雄
 火山灰試驗 ◎技手 田原休之丞 ◎技手 二宮 鶴松 △子安 雅雄
 催青試驗 ◎技師 練木 喜三 △伊藤恒三郎
 下蟻絶食長短試驗附蟻ノ體量減少試驗 ◎技師 練木 喜三 △伊藤恒三郎
 掃立早晚試驗 ◎技師 松永 伍作 △田中 憲之
 稗蠶飼育試驗 ◎技師 芝山 直清 △高橋雅之助
 同功繭試驗 ◎技手 芝山 直清 △高橋雅之助
 蠶ノ種類試驗 ◎技手 芝山 直清 △矢島善四郎
 減蠶試驗 ◎技手 芝山 直清 △高橋雅之助
 繭質改良試驗 ◎技手 松永 伍作 △子安 雅雄
 殺蛹及貯藏試驗第三 ◎技手 高橋 信貞 △野崎岩次郎
 製絲用水質試驗第五 ◎技手 本多岩次郎 △高橋 元助
 虛弱性遺傳試驗 ◎技師 練木 喜三 △伊藤恒三郎
 微粒子病試驗 ◎技師 練木 喜三 △伊藤恒三郎

蠶業試験場が明治二十年四月より明治廿九年三月迄、斯業教育機關として且又斯業試験研究機關として、一つの存在をなしたことは、右に示す如くであるが、尙或る意味に於て蠶種の配給機能をも若干果たしつゝあつたことが記述されねばならぬ、それは毎年本場試験の框製蠶種——其種類は年によりて異つたが青熟や赤熟や小石丸が普通であつた——を各府縣の有志者の地方廳を経ての請願に應じ配付したことである。明治廿七年の如きは其請願者二〇二三人其枚數一萬有餘の多きに達した程であつたが、勿論配付蠶種に限りがあつたので、其要求に應ずることが出来ないで框製八百枚を頒布したに過ぎなかつた、翌二十八年には配布蠶種は一千八十枚に増加した。

第三章 蠶業講習所時代

第一節 總 說

蠶業試験場は前記の如く、我國蠶絲業の發達に照應して其組織や設備の改善刷新をなし、國家の斯業に對する助長獎勵政策の施設、機關として忠實にその任務を完遂し來たつた。偶々明治廿七年八月日清戰爭勃發し戰時舉國一致の精神は全般に漲りほとばしり、斯界に於てもその反映として全国各地に業者の會合があり、蠶絲業界は著しく緊張し覺醒した、然かも戰勝の餘威は世界に於ける邦品従つて生絲の需要を増進せしめ、企業熱の昂上は漸次器械製絲の増

加を促し、我國の蠶絲業は急速な進展を見るに至つた、茲に於て蠶業試験場は從來の規模組織を以つてしては能く其の目的を達成すること至難となり、その試験研究や傳習事業を一層擴充するの必要は社會一般の認める所となり、勿論この點に關して夙に本場當局者もよく察知し、其擴充の方法に就き計畫しつゝあつたが、これに關し第八帝國議會の衆議院もその所見を同じくして蠶業講習所設置の建議を爲すに至つた。即ち明治二十八年二月の衆議院に於て、議員新井毫外四名より蠶業講習所設置に關し、衆議院として政府に建議すべきことを提出した。

蠶業講習所設置の建議案

本邦の蠶絲は追年其の産額を増加し輸出品中重要な物産たるは論を俟たず然るに退て斯業の實況を視るに、養蠶の方法未だ昔からざるが如き蠶種の雜駁なるが如き實に其の弊に堪ふる能はざるものあり、今これを救済して斯業の振興を圖り、國益を増進せんと欲せば茲に大に蠶業教育を興さざるべからず依てその第一着手として二十八年度より東京西ヶ原蠶業試験場の規模を擴張し、これを關東蠶業講習所としこれと同一なるものを西京に設置しこれを關西蠶業講習所とし、その他各府縣に一箇所乃至數箇所の蠶業講習所を設立し養蠶家の師表たるべき適任者を養成し且蠶種製造の本源を定め又各種の試験をもなさざるべからず、近頃全國蠶絲大會に於ても亦各府縣に蠶業試験場設置の事を議決したり、全國當業者の輿論已に如此故に政府に於てもこの趣意に賛同し二十八年に於て速に豫算を提出せられんことを望む 右建議す

右建議案は兩院を通過し、翌二十九年三月十八日遂に蠶業講習所官制の公布を見、政府は明治二十九年年度豫算中に蠶業講習所設置經常費金壹萬四千八百七拾壹圓六十錢也臨時費(新營費)金七千九百二十五圓也合計貳萬貳千七百九

拾六圓六拾錢也を計上支出した。

經常費金一四八七一圓六〇内譯左の通りである。

第一項俸給及諸給	金四六四〇圓	第五項賠償及訴訟費	金二圓五〇
第二項廳費	金八九一圓二五	第六項旅費	金六〇〇圓
第三項修繕費	金三〇〇圓	第七項雜給及雜費	金五三〇圓三五
第四項死傷手當	金二圓五〇	第八項講習及試験費	金七九〇五圓

茲に於て舊來の蠶業試験場は廢止となり、その所管の設備及業務はすべて蠶業講習所に移されたのみならず、その規模は擴張され設備は整へられて、茲に蠶業講習所は從來の農商務省農務局の一肢體であつた蠶業試験場と異り獨立官廳として斯業教育機關として、且又斯業試験研究機關として前面に押出さるゝに至つた。

そして五月廿二日付練木喜三蠶業講習所長に任せられ、同松永伍作試験部長に本多岩次郎講習部長に就き、尙多くの新進の學者が教官として迎へられた、當時及其前後に講師として理學博士佐々木忠二郎、農學博士横井時敬、同本田幸介 農學士青山元 同田中節三郎 同美代清彦 同志岐守松 同北垣保 同田原休之丞 同大森雄也等の諸氏があり、専任技手として農學士石波繁胤 同辻暢太郎 同廣瀬次郎(當時河原) 同針塚長太郎同月田藤三郎等の諸氏あり、又植物學者市川延次郎 同野村彦太郎 機械學教師として東京高等工業學校出身齋藤孝等ありて、情熱に富める講義がなされ、又舊蠶業試験場の出身者毛呂正容 土屋泰 兒玉實詮等の諸氏は實習を擔當し、茲に蠶業講習所はその

形容を完備したと言ふだけでなく、その局に在つた人々が豊富な經驗を抱いて、その衝に當り偉大な實行力を示し、文字通り我國蠶絲業界の大本山として君臨することゝなつた。

此頃蠶業の隆盛に伴ひて各地に蠶業傳習所や講習所が競つて設立せられ然かもその方針及施設が區々で、斯業發達上等閑に附し得なかつたので、政府は道府縣の蠶業傳習所若しくは講習所の主任及巡回教師其他蠶業の講習に従事する者を、農商務省内に一週間(自明治卅一年九月十九日 至同 年同月廿五日) 招集して協議會を開催したが、その協議事項の一に地方蠶業傳習所の本省蠶業講習所に対する希望如何が擧げられ、これに對して次の決議がなされた。

- (一) 本省蠶業講習所はその規模を擴張して修業年限を長くし修業者の年齢を高め蠶絲業の高等教育所に充つ
- (二) 本省蠶業講習所にては現今實施の養蠶傳習及試験の外製絲科を設置す
- (三) 本省蠶業講習所に於ては専ら高尚なる科學的の試験を行ふ
- (四) 本省蠶業講習所等に於ては其良好なりと認めたる蠶種を地方蠶業傳習所に配布して其成績を調査參酌し以て善良なる蠶種の普及を計る
- (五) 本省蠶業講習所は其程度を高め以て地方蠶業傳習所等と系統的連絡を通す
- (六) 系統的連絡の成りし曉には本省蠶業講習所の別科を廢す
- (七) 本省蠶業講習所は地方蠶業傳習所卒業又は之と同等以上の資格ある農學校農事試験場等に於て二ヶ年以上養蠶の學を修め校長若しくは場長の推薦したる者は無試験にて本科入學を許す

(八) 本省蠶業講習所は地方蠶業傳習所又は農學校農事試驗場等に於て三ヶ月以上養蠶學を修め、校長若くは場長の推薦したる者は無試験にて別科入學を許す

右の希望決議事項の大部分は後日採擇されて、蠶業講習所の諸規則の改廢が行はれた、これに就ては後記する。

明治三十一年十月三十一日蠶界の耆宿として聲望高くあつた練木所長は非職となり、代つて農事試驗場長澤野淳が兼任蠶業講習所長を命ぜられ、亦翌年三月には蠶業講習所官制が改正されて、京都にも同一程度のものが新設せられることとなり、これを京都蠶業講習所と稱し所長に松永伍作が赴任された。本所は東京蠶業講習所と改められ、これに伴ひて職員の変更があつた。即ち蠶業講習所技師本多岩次郎、同大林雄也兩氏は東京在勤を命ぜられ、同廣瀬次郎は京都兼務を、同石渡繁胤、同辻暢太郎の兩氏は共に京都蠶業講習所在勤で東京兼務を命ぜられた。

明治三十四年二月蠶病消毒法講習規程を制定し、之れに據りて東京蠶業講習所は同年九月五日より同二十五日に至る三週間に亘り第一回の該講習會を開き、更に第二回(自明治三十五年九月五日)第三回(自明治三十六年九月五日)と連年開催し蠶病消毒法の指導獎勵の任に當る者を養成した、がこのことは當時非常に一般の好評であつた。蓋し當時漸く蠶病消毒の必要なこと當業者の認知するところとなり、折角これを行ふものもあつたが、消毒薬品の性質や消毒器械の使用方法や蠶室蠶具の消毒法を詳識しなかつた爲に、徒勞無効に歸するものも尠少でなかつたからである。

斯くして本所はその蠶業教育的任務の遂行は、これを怠らなかつたが、明治三十五年になり斯業の發達に鑑み、その組織を著しく改善し規模を擴張して、斯業の改良發達に邁進する所あつた。即ち同年三月蠶業講習所官制改正更に

四月、農商務省訓令第九號處務規程を改正、これに依つて從來の試験部及傳習部はこれを廢止し、養蠶製絲の二部制として試験及調査の事は總て養蠶製絲の二部に分ちて行ふこととなつた。但し右規程の附則に據りて製絲部は東京蠶業講習所にのみ置かれることとなり、京都蠶業講習所に於ては養蠶部に於て、製絲に關する事務を掌ることとせられた。そこで本所は右規程の改正に伴ひ製絲業に關する試験研究を行ふと共に、製絲業の指導誘掖或は經營の任に當る者を養成する目的を以て、講習規程を改正し、從來の講習科は之を養蠶講習科に改め、新に製絲の講習科を特設するに至つたが、この事は本所の大なる發展であつた。

當時我國の製絲業は漸次發達して器械製絲の増加を見るに至り、その技術の進歩を要請せらるゝ分野廣く、亦技術長現業係等の地位に在るものは多くは製絲上の學理に通せず、極言すれば技術に無關心のであり、製絲場主や支配人とても所謂番頭風の商人肌の者が多く、一般の工場現業員に至つては實に無識の輩が多かつた。茲に於て本所は時代の要求にそつて製絲技術者養成の施設を講ずるに至つたのである。

斯くして明治三十五年の講習制度の改革は、その講習を養蠶講習科本科、養蠶講習科別科、製絲講習科本科、製絲講習科女生本科、製絲講習科別科(女生)の五大別とし、特に製絲工場に於ける教婦養成を目的に、女生に講習を開放したことは特筆さるべきことである。蓋し當時製絲工場の教婦は只永年勤続して手工上の經驗に富むと言ふだけで、眞に製絲法の技術的知識に乏しく、女工を指導する技能訓練も充分でなかつたので、折角短月日に一人前の女工たり得られるものも相當長年月を要したのであつた。この場合教養に富み技術的理論的に優れた卒業生を、全国各地工場

に配置すると言ふことは、我國製絲業指導に於ける劃期的な事であつた。新設當時の製絲部の陣容は大略次の通りであつた。(本多岩次郎先生傳による)

製絲部新設と共に先生(本多岩次郎先生のこと)は横濱生絲検査所今西技師に諮り主任教師を物色して今西氏の推薦に係る會で今西氏等と共に赤坂内藤新宿試験場に學んだる製絲業の先覺者石居一郎氏が、當時近江八幡製絲株式會社の工場長を勤めて居たのを招聘し、又神戸生絲検査所主席技師で會で富岡製絲場に在つて蠶業試験場出身町田稔氏や、同じく初めて明治五年小野組築地製絲場に入り、爾來島根縣其他に於て製絲教導者となつて後横濱生絲検査所に在つた岩淵修三氏を石居氏の次席に招聘し、又其下には同所卒業生にして會で御法川製絲學校教師たりし三谷徹、同卒業生京都城丹蠶業講習所教師であつた松下憲三郎等の諸氏を配置した、又異彩を放てるものとしては明治六年埃國萬國博覽會に佐々木長淳翁と共に出張し伊佛に於て製絲法機械學等の新知識を以て歸朝し、後横濱生絲検査所技師となつて爾來自動製絲器其他多くの發明を爲せる我が製絲界の先覺者とも云ふべき圓中文助氏を講師として招聘し、茲に新設製絲部の陣容を整へられた。此間に於ける先生の畫策は周匝にして、能く機宜を得て同所に新なる希望を加へたること世の均しく認むる所であつた。

明治三十六年二月大阪に第五回内國蠶業博覽會が開催され、澤野所長審査官として出張中病を獲逝去、七月二十七日付にて技師本多岩次郎東京蠶業講習所所長を命ぜられ、次で辻暢太郎養蠶部長に、永井米藏製絲部長に、林彈作報告課長兼養蠶部試験課長に、高田正行庶務課長に就任異動があつた。

斯くして本多岩次郎所長就任後は同氏の識見と一意専心格勤とによりて、本所は更に其後の發展を辿つた、即ち明治三十八年五月本所は、斯業の進歩發達の狀勢に鑑みて講習規程を改正、養蠶部別科を廢し本科男生(養蠶製絲の二科共)の講習程度を高め、中學卒業程度を以てその入所資格とし、修業年限は之を三ヶ年に延長した、これによりて本所は徵兵令第十三條及第二十三條に依り認定せらるゝこととなつた。そして日露戰爭前後の我邦蠶絲業の躍進的發展時期を迎へた、即ち養蠶は農家經濟にとつて、最も有利な貨幣收入源として極めて重要な位置を占め、製絲業における生産規模の擴大は座繰の小經營或は家内工業を存続せしめつゝ生成發展し來たつたが、この間に於て本所は其負荷せる國家的任務の遂行に精進し毫厘の缺陷なきを期したのである。即ちフォルマリン檢定法講習規程を設け明治三十九年九月及同四十年九月の二回フォルマリン檢定法の短期講習會(期間約二週間)を開催し各府縣當該吏員其他の者を招集して、その技術者を養成したるが如き、又製絲短期講習規程を設け明治四十年以來大正二年迄毎年二月又は三月頃製絲短期講習(期間約三週間)を行ひて、地方製絲場に於ける監督指導者に對し學理の一般を諒得せしめ、斯業の改善を促したるが如き、何れもこの間に於て擧げらるべき教育的施設であり、又明治四十二年三月本所に夏秋蠶部の一部を新設した如きは特筆さるべきことである。當時夏秋蠶に就ては桑園との關係上利害論が喧かつたが、本所にて久しき間夏秋蠶の蠶種製造法やその貯藏法や飼育法は素より桑園仕立等に就て試験研究して愈々その必要を感じ之が普及のため長野縣松本に地を選定し茲に夏秋蠶講習所を設立することとなつたが、これより先き世論之を贊し、明治四十年一月十八日大日本蠶絲會々頭松平直直男より、夏秋蠶講習所設置に付時の松岡農商務大臣に建議し、同案は其年二月十六日帝國議會にて工藤代議士其他連名で一五七名の賛成者を得て、衆議院に提出され後通過して明治四

十二年三月愈々設置さるゝことゝなつたのである。而して同夏秋蠶部長に福島縣立蠶業學校長藤本春二、主任技師に東京蠶業講習所技手横山長太郎命ぜられ、その職務に盡瘁された、同所が我が夏秋蠶技術の進歩に多大の貢献をなしたことは、普く世に知らるゝ所である。

時勢の進運は更に本所の組織を改むるの必要を生じ、明治四十三年四月從來の養蠶部製絲部夏秋蠶部を改めて、講習部試験部夏秋蠶部となし、夫々業績を挙げつゝあつたが、明治四十四年五月原蠶種製造所の官制が發布され、翌年三月より東京府豊多摩郡杉並町大字高田寺所在の原蠶種製造所に於て、原蠶種の製造及蠶絲業に關する試験調査を行ふことゝなり、蠶業講習所は純然たる教育機關に改められることゝなつた。この起因は明治四十三年四月から開催された生産調査會に於ける決議事項や審議事項に基きてあり、即ち蠶種の統一改良を期するが爲國立蠶業試験場を中央に本場一ヶ所、地方に支場數ヶ所を設置して全國所要原々種の十分の一に該當する原蠶種を道府縣に配付し將來完全なる統一を行ふの段階と爲し、且この機關に依り蠶絲業に關する技術的試験研究を行はしむること其他が審議決議されたのであつた。これに依りて原蠶種製造所は繭質の整理統一を目的として設置さるゝに至り、本所は從來その行ひ來たつた夏秋蠶部や試験部の業務は一切を擧げて、之を原蠶種製造所に移屬し、専ら生徒教養の任に當り兼て新業に關する研究を行ふことゝなつた。即ち明治四十五年四月東西蠶業講習所官制が改正せられ、その結果本所は從來の組織を變更し、同時に講習に關する諸規程を改善し、學科目の改廢並學年學期等の變更を行つた。又蠶業講習所の從來行ひ來たつた蠶種の配布も新設原蠶種製造所に於て行ふことゝなり、明治四十五年五月農商務省令第十五號蠶種配

布規則の廢止によつて、それが明示された。

斯くの如く明治四十四年農商務省所管の國立原蠶種製造所が設置され、舊來の蠶業講習所の行ひ來たつた業務の大半を大規模に起すことゝなりて、農商務省所管としての蠶業講習所に何等か行政上の改革が齎されるのではないかと豫感を生じ、殊に當時文部省は學制改革刷新を標榜しての専門教育實業教育の發展を大抱負の下に、企圖しつゝあつたので一層その感を強めた。此間にありて種々な風説蜚語が傳はり、當時政府は行政整理に着手せんとする際とて或は東西兩蠶業講習所の廢止説があつたり、或は東京蠶業講習所の農科大學併合説が起つたりして、本所在所生は素より本所出身同窓生や當業者も相當神經過敏となつた。現に當時の帝國議會に國民黨代議士小西和外二名より大正三年一月二十九日衆議院へ、東西兩蠶業講習所を夫々東京、京都蠶絲專門學校と爲さんことを望むとの建議案が提出されたりし(併し委員會で否決)亦政友會代議士武藤金吉の如きは別に蠶絲大學新設の必要を説き蠶業講習所廢止論を唱へたりして、政治家當業者其他諸方面に於ける諸説は紛々として、本所の興廢に關して端倪すべからざるものがあつた。

併し政府は曩に明治四十二年に蠶絲專門學校創立委員を設け、翌四十三年は長野縣上田町に蠶絲專門學校を新設して、我國蠶絲業の急速なる發展の狀勢に鑑み斯業教育普及の必要を痛感して居たので、蠶業講習所の存廢問題に就ても、唯だ教育行政の統一を圖るために文部省の所管に、之を移し高等蠶絲學校とすべき決意に達して居た様である。かくして大正二年六月蠶業講習所官制が一部改正されて、蠶業講習所は農商務省より文部省所管に移り翌三年三月勅

令第四十四號を以て東京蠶業講習所は東京高等蠶絲學校と改稱するに至つた。四月本多所長は本校教授となり校長事務取扱を命ぜられ、同十六日付にて校長に新任せられ、爾後本校は文部省所管東京高等蠶絲學校として發足し飛躍發展をなすこととなつた、これに就ては第二篇に記述することとする。

第二節 法令・諸規則・其他の變遷

蠶業講習所時代(自明治二十九年三月至大正三年三月)に於て勅令による本所官制の變遷や主要なる諸規則の制定改廢や其他この間に生起せる主要なる事項を擧げると、次の如くである。

第一款 變遷の概況

明治二十九年

一、三月勅令第二八號に依り左記蠶業講習所官制が發布された。

蠶業講習所官制

第一條 蠶業講習所ハ農商務大臣ノ管理ニ屬シテ左ノ事務ヲ掌ル(一)蠶業ニ關スル傳習(二)蠶業ニ關スル試験(三)巡回講話

(四)蠶種配布(五)質問應答

第二條 蠶業講習所ニ左ノ職員ヲ置ク 所長一人技師專任四人技手專任六人書記專任四人

第三條 所長ハ技師ヲ以テ之ニ充ツ農商務大臣ノ指揮監督ヲ承ケ所中一切ノ事務ヲ掌理シ部下ノ職員ヲ監督ス

第四條 技師ハ上官ノ指揮ヲ承ケ所務ヲ分掌ス

第五條 技手ハ上官ノ命ヲ受ケ所務ニ従事ス

第六條 書記ハ列任トス上官ノ命ヲ承ケ庶務ニ従事ス

第七條 本令ハ明治二十九年三月三十一日ヨリ施行ス

一、三月農商務省告示第六號によりて、蠶業講習所は東京府北豐島郡瀧ノ川村大字西ヶ原に置く旨公布された。

一、四月一日蠶業講習所開始祝賀會舉行、發起人は舊蠶業試驗場出身者高橋元助、山本竹藏、田中良太郎外數名の諸氏で、來賓には岡農務局蠶茶課長、練木、澤野、青山の諸農商務技師、高橋生絲検査所技師、河原、辻の兩農商務技師試補、松永本多の兩農商務技手並に試験場員數十名、之に傳習生を合せて一六〇餘名あり、最初に高橋元助は開會の趣旨を陳べ、岡蠶茶課長は蠶業講習所に就て紀念沿革史を高かに朗讀、次で澤野農事試驗場長其他の祝辭ありて、終りに松田小吉發起人總代として謝辭を述べそれより岡課長の發聲にて兩陛下の萬歳を三唱、斯くて盛會裡に式終了す。

一、四月一日農商務省訓令第九號により左記の蠶業講習所處務規程を制定

蠶業講習所處務規程

- 第一條 蠶業講習所ハ左ノ項目ニ據リ蠶業ノ改良増殖ヲ圖ルヘシ
- 一 蠶業ニ關スル傳習 蠶絲業ニ關スル學理蠶絲業ニ關スル實地
- 一 蠶業ニ關スル試験〇桑樹ノ種類栽培及病害〇蠶種養蠶及蠶病〇殺蛹貯菌及練絲、器具及製絲器械
- 一 蠶絲業ニ關スル巡回講話
- 一 蠶種ノ配布

第一編 蠶業試驗場及蠶業講習所時代

- 一 蠶絲業ニ關スル質問應答
- 第二條 蠶業講習所長ハ官制ノ定ムル所ニ從ヒ主管事務ノ處理ニ付其實ニ任ズ
- 第三條 蠶業講習所長事故アルトキハ部下ノ官吏ニ代理ヲ命シ又主管事務ノ幾分ヲ委任シ自己ノ名義ヲ以テ之ヲ處辨セシムルコトヲ得
- 第四條 蠶業講習所長ハ判任官以下ノ歸省看護參事轉地療養願ヲ許可シ及除服出仕ヲ命スルコトヲ得
- 第五條 蠶業講習所長ハ月俸拾貳圓又ハ日給五拾錢ヲ超エサル備員ノ採用解免ハコレヲ專行スルコトヲ得
- 第六條 蠶業講習所長ハ事務處理ノタメ經何ノ上所中處務細則ヲ設クルコトヲ得
- 第七條 蠶業講習所長ハ經何ノ上傳習科程及其擔任者並ニ講習生ニ關スル規定ヲ定ムヘシ
- 第八條 蠶業講習所長ハ傳習生徒ノ募集人員ヲ定メ毎年農商務大臣ノ承認ヲ請フヘシ
- 第九條 蠶業講習所長ハ試驗ノ順序方法及其分任擔當ヲ定メ農商務大臣ニ報告スヘシ
- 第十條 試驗成績ハ各擔任者ニ於テ試驗終了ノ日ヨリ二ヶ月以内ニ蠶業講習所長ニ報告スヘシ
- 第十一條 蠶業講習所長ハ試驗成績ヲ審査編纂シ毎年一回農商務大臣ニ報告スヘシ 但臨時緊要ト認ムル試驗成績ハ時々報告スヘシ
- 第十二條 蠶業講習所長ハ毎年配付蠶種ノ枚數ヲ定メ配付ノ手續ヲナスヘシ
- 第十三條 蠶業講習所長ハ卒業シタル生徒ニ交付スヘキ證書ニ署名スヘシ
- 第十四條 質問應答書ハ擔任者ノ官氏名ヲ署名スヘシ
- 第十五條 蠶業講習所長ハ其主管事務ニ付各官廳ニ照會往復スルコトヲ得
- 第十六條 農商務大臣ニ經何又ハ報告ヲ要スル事項ハ總テ農務局長ヲ經由スヘシ
- 一、五月農商務省訓令第十三號により蠶業講習所ノ巡回講話及生徒募集ノ件左記ノ通り指示された。

- 一、蠶業講習所長ヨリ蠶業講話ノタメ技術官ノ派出ノコトヲ通知シタルトキハ地方長官ハ所長ト打合ノ上講話ノ場所及期日ヲ定メ管内ニ告知スヘシ
- 二、巡回講話等ノタメ旅費ヲ支辨シテ技術官ノ派出ヲ要スルトキハ蠶業講習所長ニ其旨ヲ移牒スヘシ
- 三、蠶業傳習生ノ募集ハ蠶業講習所長ノ通牒ニ依リ地方長官其手續ヲ爲スヘシ
- 一、五月農商務省令第五號に依り蠶種配付規則公布さる、これは蠶種配布に關し出願者ノ資格其他ノ手續を規定せるもので、その規則は次の如くである。

蠶種配布規則

- 第一條 本所ニ於テ製造スル蠶種ハ原種用トシ左ノ資格ヲ有スル者ニ限り無代價ニテ配布ス 二反歩以上ノ桑園ヲ所有シ毎年二百枚以上ノ販賣用蠶種ヲ製造スル者
- 第二條 蠶種配付ヲ請求スル者ハ管轄廳ノ證明ヲ得テ四月十五日迄ニ蠶業講習所ニ出願ス可シ
- 第三條 配付スベキ蠶種ハ請求者一名ニ付五十幘分以上五百幘分以下トス
- 第四條 蠶種ノ配當ハ出願ノ順序ニ依リ之ヲ定メ十月三十日迄ニ發送スヘシ配布ヲ受クル能ハサル者ニハ九月三十日迄ニ其旨ヲ通知スヘシ
- 第五條 蠶種ノ配付ヲ受ケタル者ハ別記書式ノ成績書ニ左ノ成績ヲ添付シ翌年八月三十一日迄ニ本所ニ送送スヘシ 二百幘分未満ノ蠶種ヲ受ケタルモノハ一升以上 二百幘分以上ノ蠶種ヲ受ケタルモノハ二升以上
- 第六條 前條ノ義務ヲ履行セサル者ハ爾後三年間蠶種ノ配布ヲ受クルヲ得ス

(配付蠶種成績表書式省略)

一、五月蠶業講習所傳習規則を制定、傳習に關し形容を整へた。即ち左の如くである。

傳習規則

第一章 總 則

- 第一條 本所ノ傳習ハ本科別科ノ二トス
- 第二條 本科ハ蠶業ニ關スル學理及實地ヲ傳習ス 別科ハ實地ヲ主トシ傍ラ學理ヲ傳習ス
- 第三條 本科生ノ定員ヲ百人トシ別科生ノ定員ヲ六十人トス
- 第四條 傳習期限ハ本科ヲ二ケ年トシ別科ヲ五ケ月トス
- 第五條 傳習生ノ學費ハ自辨トス 但シ傳習料ヲ徴收セズ
- 第六條 傳習生ハ總テ所内ニ寄宿スルモノトス 但シ本所ノ都合ニ依リ通學ヲ命ズルコトアルヘシ

第二章 學科課程

- 第七條 本科及別科ノ學科課程左ノ如シ
- 本科課程○講義 第一年第一期 動物學 植物學 理學 化學 數學 蠶體解剖論 第一年第二期 動物學 植物學 理學 化學 土壤論 蠶體解剖論 養蠶法 製絲法 第二年第一期 化學 機械學 經濟學 肥料學 桑樹栽培論 蠶體生理論 養蠶法 製絲法 第二年第二期 氣象學 機械學 經濟學 害菌論 桑樹栽培論 ○實地 第一年第一期 桑樹栽培 顯微鏡使用 第一年第二期 桑樹栽培 顯微鏡使用 蠶種検査 第一年第三期 桑樹栽培 養蠶 製種 蠶體解剖論 生絲検査 製絲 第二年第二期 桑樹栽培 製絲 第二年第三期 桑樹栽培 養蠶 製種 蠶體解剖論 ○講義 第一期 動物學大意 植物學大意 化學大意 桑樹栽培論 蠶體解剖論 蠶體生理論 蠶體病理論 養蠶法 製絲法大意 ○實地 第一期 顯微鏡使用 蠶種検査 第二期 蠶體解剖 養蠶 製種 蠶種検査 繭及生絲検査

第三章 傳習期及休業

- 第八條 本科ノ傳習期ヲ分ツコト左ノ如シ
 - 第一年第一期 自十一月一日起至十二月二十四日 第二期 自一月八日起至四月二十日 第三期 自四月二十一日至秋蠶實地終了
 - 第二年右ニ同シ
- 第九條 別科ノ傳習期ヲ分ツコト左ノ如シ
 - 第一期 自三月一日起至四月二十日 第二期 自四月二十一日至七月三十一日
 - 第十條 休業期日左ノ如シ
 - 冬期休業 自十二月二十五日 夏期休業 自秋蠶實習終了後 日曜日 祭日
 - 但シ養蠶實地中ハ休業スルコトナシ
 - 第十一條 本科生ノ募集試験ハ七月中別科生ノ募集試験ハ十一月中地方廳ニ於テ之ヲ執行ス
 - 第十二條 傳習生志願者ハ左ノ資格ヲ有スルモノタルヘシ
 - 本科志願者 (一)品行方正ニシテ傳習期中家事ノ保果ナキモノ (二)年齢二十二年以上ノ者 (三)三ヶ年以上養蠶ニ従事シタル者 (四)尋常中學第三年生相當以上ノ學力ヲ有スル者
 - 別科志願者 (一)品行方正ニシテ傳習期中家事ノ保果ナキ者 (二)年齢二十五年以上ノ者 (三)三ヶ年以上養蠶ニ従事シタル者 (四)高等小學卒業生相當以上ノ學力ヲ有スル者
 - 第十三條 募集ノ試験科目左ノ如シ ○本科 (一)算術全體 (二)動植物理化學大意 (三)養蠶法 ○別科 養蠶法
 - 第十四條 本科志願者ハ毎年六月三十日別科志願者ハ十月三十一日迄ニ左ノ書式ニ準シ願書並ニ履歷書各二通ヲ地方廳ニ差出スヘシ

入學願書(省略) 履歷書(省略)

第十五條 本科へ入學許可ヲ得タル者ハ左ノ書式ニ準シテ在學證書一通ヲ認メ保證人ヨリ本所ニ差出スベシ 在學證書(省略)

第十六條 保證人ハ丁年以上ノ男子ニシテ東京府内ニ於テ一家計ヲ擔ツル者又ハ本所ニ於テ適當ト認ムルモノタルヘシ

第十七條 本所ニ於テ保證人又ハ其代理者ヲ不充分ト認ムルトキハ之ヲ換ヘシムルコトアルヘシ

第十八條 保證人死去若クハ他府縣ニ轉住スルトキハ直チニ他人ヲ以テ之ニ換ヘ更ニ保證書ヲ差出スヘシ

第十九條 怠惰若クハ不品行ニシテ成業ノ見込ナキ者又ハ屢々缺席スル者等ハ退學セシム

第五章 進級及卒業

第二十條 本科ニ於テハ試験ヲ分テ各年共第一期第二期及第三期試験トシ別科ニ於テハ第一期及第二期試験トス

第二十一條 試験ハ各期ノ終リニ於テ之ヲ行フ 但シ主務官ノ見込ニヨリ臨時試験ヲ行フコトアルヘシ

第二十二條 試験點數ハ本科別科共各課目一百點ヲ以テ最高點トス

第二十三條 本科ニ在リテハ各年第三期ノ終リニ於テ 別科ニ在リテハ第二期ノ終リニ於テ左ノ規程ニ據リ及落ヲ定メ進級又ハ卒業セシム 試験ニ合格セサル者ハ何等ノ事故ニ拘ハラズ再試験ヲ受クルコトヲ得ス 本科ニ於テハ總平均點數六〇點以上及第、

總平均點數六〇點未滿落第二課目以上五十點未滿落第トス

別科ニ於テハ總平均點數六〇點以上及第 總平均點數六〇點未滿落第二課目以上四〇點未滿落第 兼實地試験點數六〇點未滿落第トス

落第トス

第二十四條 本科ニ在テハ第一年間ニ於ケル試験ニ及第セル者ヲ進級セシメ第二年間ニ於ケル試験ニ及第セル者ヲ卒業セシム 落第セル者ハ原級ニ止ム 但同級ニ於テ二回落第シタルモノハ退學ヲ命ス別科ニ在テハ修業期間ニ於ケル試験ニ及第セル者ヲ卒業セシム

セシム

第二十五條 試験ニ缺席シタル課目ニハ零點ヲ附ス 但病氣其他止ムヲ得サル事故ニ由リ届出ノ上缺席スル者ハ願ニヨリ特ニ試験ヲ行フコトアルヘシ

一、五月二十二日 蠶業講習所技師練木喜三本所長を命ぜらる。

一、六月二日 蠶業講習所技師本多岩次郎は農商工業視察の爲め歐米に派遣を命ぜられ六月二十六日横濱出帆、本多

技師は米國を一巡して歐洲各國を廻つて翌三十年一月十二日歸朝された。

明治三十年

一、四月十四日 技師松永伍作清國へ出張を命ぜられ、二十七日横濱を出向し清國蠶絲業を視察の上九月廿五日歸朝

せられた。

一、四月研究科規程を制定 本所卒業生及蠶業試験場卒業生で既修の學理若くは實地に就き更に深く研究せんとする

者のために其途を開いた。

一、五月勅令第三號により曩に發布の蠶種配付規則を改正 これによりて官立公立若しくは公費を受くる學校、講習

所、傳習所及試験場で蠶業研究のため蠶種の配付を要求する場合には、二十五蠶分以内を限つて蠶業講習所はその

需めに應ずることとなつた。

明治三十一年

一、五月 農商務省告示第十三號により蠶業講習所は、その蠶種製造に關して蠶種検査法の適用を受けざることとな

つた。

第一編 蠶業試験場及蠶業講習所時代

六九

つた。

一、十月勅令第二八七號を以て蠶業講習所官制中改正 技手書記夫々一名減員され技手五名書記四名となる。
一、十月十二日 蠶業講習所技師本多岩次郎、清國蠶業視察出張を命ぜられ東京を出發同氏は十九日上海に到着、浙江江蘇兩省の地を視察調査し、翌三十二年一月六日歸朝された。

一、十月三十一日 練木蠶業講習所長非職となり、農事試験場長澤野淳が兼任蠶業講習所長を命ぜられた。

明治三十二年

一、三月 勅令第八九號に依り蠶業講習所官制改正、これによりて蠶業講習所は二箇所となり、講習所職員に舎監が新に加へられ講習生の取締りに直接任じ、尙職員増加が規定され、技師七人(三人増加)技手十二人(七人増加)書記六人(三人増加)となる。

一、四月 農商務省訓令第一七號によりて前記蠶業講習所官制の改正に伴ひ、若干處務規定を改正。

一、六月 農商務省告示第六一號に依り蠶業講習所位置及名稱、左記の如く定められた。

東京蠶業講習所(名稱) 東京府下北豊島郡瀧ノ川村元西ヶ原(位置)

京都蠶業講習所(名稱) 京都府下葛野郡衣笠村(位置)

一、六月二十九日付にて蠶業講習所職員に左記の異動が行はれた。

東京蠶業講習所長を命ず

蠶業講習所技師 農學博士 澤野淳

七〇

京都蠶業講習所長を命ず
東京蠶業講習所長を命ず

同 同

京都蠶業講習所兼務を命ず
京都蠶業講習所在勤を命ず
東京蠶業講習所兼務を命ず
京都蠶業講習所在勤を命ず
東京蠶業講習所兼務を命ず

蠶業講習所技師	松永伍作
同	本多岩次郎
同	大林雄也
同	河原次郎
同	河原次郎
同	石渡繁胤
同	石渡繁胤
同	石渡繁胤
同	辻暢太郎
同	辻暢太郎
同	辻暢太郎

一、六月傳習規程を改正 本科生の定員百名を五〇名とし尙其學科課程に於て學科目につき若干の變更を行ひ又研究科規程も若干改正された。

一、六月 本所生徒の制服及制帽左の通り制定された (一)制帽は黒色又は紺色羅紗製の佛蘭西形軍帽とし夏服に於ては白布を覆ふ(但夏期は麥稈帽子を用ふるも妨げなし)(二)制服は立襟



春廣とし冬期は黒色若くは紺色夏期は霜降りとす、制服及制帽の徽章右の如くである。

一、七月 農商務省告示第六六號に依り東西二つの蠶業講習所は、その掌る業務の中巡回講話、蠶種配布、質問應答に關し區域を制限され、本所はその區域を、北海道東北地方及關東地方の諸府縣に新潟、長野、山梨、静岡の諸縣とされた。

明治三十四年

一、二月蠶病消毒法講習規程を制定 それに蠶病消毒法の指導獎勵の任に當る者を養成するを目的としたのであつた。

蠶病消毒法講習規程

- 第一條 蠶病消毒法講習ハ毎年一回東京京都兩蠶業講習所内ニ之ヲ開ク
- 第二條 講習生ハ地方ニアリテハ蠶業獎勵ノ局ニ當リ或ハ蠶業ニ關係シ經驗ヲ有スルモノニシテ地方長官ノ選定シタル者トス
- 第三條 講習生ノ定員ハ各所五〇名以内トシ府縣割當ハ東京京都蠶業講習所長之ヲ定ム
- 第四條 講習期限ハ概ネ二十日間トシ八九月中ニ於テ之ヲ開ク
- 第五條 消毒ニ要スル物品ハ之ヲ貸與スベシト雖モ其他ハ講習生ノ自辨トス
- 第六條 講習課程左ノ如シ 蠶病論大意 微生物學大意 消毒藥品論 消毒法 消毒實習
- 第七條 始業ノ時日及其他講習ニ關スル事項ハ東京京都蠶業講習所長之ヲ定ムルモノトス

明治三十五年

一、三月勅令第一〇六號により蠶業講習所官制改正 その改正要點は、從來蠶業講習所の掌る講習試験及調査は蠶業

に關してあつたのが、蠶絲業に擴張されたこと、講習生の取締を直接擔任する舎監に關して、從來の二人の定員を廢し、技師技手は勿論のこと書記をも舎監としてその取締りに任せしめたこと、職員定員の増加即ち技師四人技手五人書記一人夫々増加したこと等である。

一、四月 農商務省訓令第九號により處務規程改正 その改正の要點は養蠶部製絲部の二部制を布き、又報告庶務の二課を設けて夫々所屬事務を明示したことである。

一、六月從來の傳習規程に代つて講習規程を制定、新に製絲講習科を設けて男生の他に直接工女指導の任に當る者を養成するために女生をも募集することとした、亦講習課程の内容に於て大なる刷新を行つた。

講習規程(抄)

第一章 總 則

- 第一條 本所講習ハ養蠶講習科及製絲講習科ノ二トシ更ニ各科ヲ分テ本科別科ノ二トス
- 第二條 養蠶講習科ハ養蠶ニ製絲講習科ハ製絲ニ關スル學理及技術ヲ講習ス
- 第三條 講習生ノ定員ハ左ノ如シ (一)養蠶講習科本科男生五十名 養蠶講習科別科男生六十名以内 (二)製絲講習科本科男生四十名 製絲講習科本科女生二十名 製絲講習科別科女生四十名以内
- 第四條 講習期限ハ左ノ如シ (一)養蠶講習科本科二ヶ年 別科六ヶ月 (二)製絲講習科本科二ヶ年 別科十ヶ月
- 第五條 講習生ノ學費ハ自辨トス 但講習料ヲ徴收セス
- 第六條 講習生ハ本所規定ノ制帽制服ヲ着用スヘシ

第一編 蠶業試驗場及蠶業講習所時代

但養蠶講習科別科生ハ第一學期ニ限り制服ヲ着用セサルコトヲ得

第二章

第七條 學科課程ハ左ノ如シ

一 養蠶講習科本科課程 ○講義第一年第一期 數學 動物學 植物學 物理學 化學 蠶體解剖論 蠶業汎論 第二期 數學 動物學 植物學 物理學 化學 蠶體解剖論 養蠶法 第二年第一期 化學 經濟學 土壤論 桑樹栽培論 蠶體生理論 蠶體病理論 養蠶法 製絲法 第二期 氣象學 經濟學 肥料論 害蟲論 桑樹栽培論 蠶體生理論 蠶體病理論 ○實習第一年第一期 普通實習 顯微鏡使用 第二期 普通實習 蠶種檢查 繭檢查 第三期 普通實習 蠶體解剖 蠶種檢查 春蠶飼育 夏蠶飼育 秋蠶飼育 繭檢查 第二年第一期 普通實習 蠶體解剖 製絲 第二期 普通實習 蠶體解剖 蠶體病理實驗 製絲 生絲檢查 第三期 普通實習 蠶體病理實驗 春蠶飼育 夏蠶飼育 ○卒業論文

一 養蠶講習科別科課程 ○講義第一期 桑樹栽培論 蠶體解剖論 蠶體生理論 蠶體病理論 養蠶法 製絲法 ○實習第一期 顯微鏡使用及蠶種檢查 蠶體解剖 繭檢查 生絲檢查 第二期 蠶種檢查 蠶體解剖 春蠶飼育 夏蠶飼育

一 製絲講習科本科課程男生 ○講義第一年第一期 數學 物理學 化學 簿記學 養蠶法 殺蛹貯菌法 第二期 數學 物理學 化學 機械學 簿記學 養蠶法 製絲法 第二年第一期 機械學 經濟學 工業論 工場管理論 繭絲論 第二期 機械學 經濟學 工業論 商業論 工場管理論 製絲法 染織法 第三期 經濟學 商業論 工場衛生論 製絲法 染織法 ○卒業論文 ○實習第一年第一期 顯微鏡使用 汽罐汽機及器械取扱 繭檢查 製絲 東裝及荷造 第二期 汽罐汽機及器械取扱 繭檢查 製絲 東裝及荷造 第三期 汽罐汽機及器械取扱 繭檢查 製絲 東裝及荷造 第二期 水質鑑定 製絲 生絲檢查 東裝及荷造 繭物整理 第三期 殺蛹貯菌 水質鑑定 製絲 東裝及荷造 繭物整理

一 製絲講習科本科課程女生 ○講義第一年第一期 算術 物理學 製絲法 第二期 算術 物理化學 製絲法 第三期 算術 化學 製絲法 第二年第一期 工場管理論 養蠶法 殺蛹貯菌法 製絲法 第二期 簿記學 工場管理論 養蠶法 殺蛹貯菌法 製絲法及製絲機械 第三期 簿記學 工場衛生論 製絲法及製絲機械 ○實習第一年第一期 繭絲 製絲 東裝 繭物整理 第二期 繭絲 製絲 東裝 繭物整理 第三期 製絲 東裝 繭物整理

一 製絲講習科別科課程女生 ○講義第一期 算術 工場管理論 殺蛹貯菌法 製絲法 第二期 算術 工場管理論 殺蛹貯菌法 製絲法 第三期 算術 工場衛生論 製絲法 ○實習第一期 繭絲 製絲 東裝 繭物整理 第二期 繭絲 製絲 東裝 繭物整理 第三期 繭絲 製絲 東裝 繭物整理

第三章 講習期及休業

第八條 講習期ヲ分ツコト左ノ如シ

養蠶講習科本科
 第一年第一期 自十二月廿四日 第二期 自一月八日 第三期 自四月十六日
 第二年第一期 自十二月廿四日 第二期 自一月八日 第三期 自四月十六日
 養蠶講習科別科
 第一期 自二月一日 第二期 自四月十六日
 製絲講習科本科
 第一年第一期 自十月一日 第二期 自一月八日 第三期 自四月十六日
 第二年第一期 自九月廿四日 第二期 自一月八日 第三期 自四月十六日
 製絲講習科別科
 第一期 自十月一日 第二期 自一月八日 第三期 自四月十六日

第一編 蠶業試驗場及蠶業講習所時代

第九條 休業日ハ左ノ如シ 冬期休業自十二月廿五日 夏期休業自九月一日 夏期休業製絲講習科自八月三十一日 日曜日(養蠶講習科ハ養蠶實習中製絲講習科ハ殺蛹乾繭實習中休業セス) 大祭祝日 蠶業講習所官制公布記念日三月十八日

第四章 募集及入學

第十條 入學試験ハ毎年地方廳ニ於テ執行ス其ノ時期左ノ如シ

養蠶講習科 八月中(本科) 十二月中(別科)

製絲講習科 八月中(本科) 八月中(別科)

第十一條 入學志願者ハ品行方正ニシテ在學中家事ノ係累ナク志願者検査規定ニ合格セル者ニシテ左ノ資格ヲ有スル者タルヘシ

養蠶講習科本科 滿二十一年以上ノ者 三ヶ年以上養蠶ニ従事シタル者 中學卒業生相當ノ學力ヲ有スル者

養蠶講習科別科 滿二十五年以上ノ者 三ヶ年以上養蠶ニ従事シタル者 中學三年生相當以上ノ學力ヲ有スル者

製絲講習科本科 男子ハ滿二十一年以上女子ハ滿十八年以上ノ者 三ヶ年以上製絲ニ従事シタル者 男子ハ中學卒業生相當以上 女子ハ高等小學卒業生相當以上ノ學力ヲ有スル者

製絲講習科別科 滿二十一年以上ノ者 三ヶ年以上優等製絲工女タリシ者 尋常小學卒業生相當以上ノ學力ヲ有スル者

第十二條 志願者身體検査規定ハ左ノ如シ(茲記載ヲ省略)

第十三條 入學試験ノ科目ハ左ノ如シ

養蠶講習科本科 算術代數學(二次方程式迄)及平面幾何學 動物學 植物學 物理學 無機化學 作文(假名交リ記事論說文)

養蠶法

養蠶講習科別科 作文(假名交リ記事文) 養蠶法

製絲講習科本科 算術代數學(二次方程式迄)及平面幾何學 物理學 無機化學 作文(假名交リ記事論說文) 製絲法

製絲講習科本科女生 算術 理科 作文(假名交リ記事文若ハ往復文) 製絲法

製絲講習科別科 作文(往復文)

第十四條 各講習科本科並製絲講習科別科志願者ハ毎年七月十日迄ニ養蠶講習科別科志願者ハ毎年十一月十日迄ニ左ノ書式(茲ニ記載ヲ省略)ニ據リ願書履歷書並身體検査證各一通ヲ認メ地方廳ヲ經由シテ本所ニ差出スヘシ

第十五條 志願者入學許可ヲ得タルトキハ左ノ書式(茲ニ記載ヲ省略)ニ據リ在學證書一通ヲ認メ保證人ヨリ本所ニ差出スヘシ

第十六條 入學ノ許可ヲ得タル者ト雖モ本所ハ更ニ第十二條ノ身體検査ヲ行ヒ不合格ト認ムルトキハ入學許可ヲ取消スヘシ

第十七條 第十八條第十九條第二十條(保證人ニ關スル規定・茲ニ記載ヲ省略)

第五章 進級及卒業

第二十一條 試験ハ之ヲ分テ定期及臨時ノ二トス定期試験ハ各期ノ終ニ於テ之ヲ行ヒ臨時試験ハ主務官ノ見込ニヨリ臨時之ヲ行フ但定期試験ノ期日ハ時宜ニヨリ之ヲ變更スルコトアルヘシ

第二十二條 試験點數ハ各課目一百點ヲ以テ滿點トス 臨時試験ノ點數ハ定期試験ノ點數ニ通算スルモノトス

第二十三條 試験ニ缺席シタル課目ニハ零點ヲ附ス

第二十四條 各講習科本科及製絲講習科別科ニ在リテハ第三期ノ終ニ於テ養蠶講習科別科ニ在リテハ第二期ノ終ニ於テ各期試験ノ點數ヲ通算シ左ノ規定ニ依リ及落ヲ定ム

總平均點數六十點以上及第 二課目以上五十點未滿落第

總平均點數六十點未滿落第 一課目以上四十點未滿落第

第二十五條 試験ニ及第セサル者ハ何等ノ事故アルニ拘ラス再試験ヲ受クルコトヲ得ス

第二十六條 病氣其他已ムヲ得サル事故ニ由リ届出ノ上缺席シタル者ハ願ニヨリ特ニ試験ヲ行フコトアルヘシ

第一編 蠶業試験場及蠶業講習所時代

第二十七條 (茲ニ記載省略)

第六章 賞罰及退學

第二十八條 在學中學術優等品行方正ニシテ他ノ模範タルヘキ者ニハ卒業ノ際賞品ヲ授與ス

第二十九條 第三十條 (確實耐點退學ノ場合ヲ規定セルモノ茲ニ記載省略)

第七章 寄宿 (茲ニ記載ヲ省略)

第八章 雜則 (茲ニ記載ヲ省略)

一、十一月 農商務省令第二二號に依り蠶業講習所蠶種配付規則を改正 その要點は蠶種の配布を受くる者を 蠶種検査法による蠶種製造者、蠶絲業に關する學校や講習所や傳習所や試驗場等に限定したことである。

明治三十六年

一、五月十七日 常宮、周宮兩内親王殿下本所に台臨親しく養蠶製絲の實況を御視察あらせられた(前記)

一、七月二十六日 澤野所長第五回勸業博覽會審査官として大阪に出張中宿病再發し逝去、依つて翌二十七日付にて本所技師本多岩次郎本所長に就任。

明治三十七年

一、六月二十六日 富美宮、泰宮兩内親王殿下本所に台臨親しく養蠶製絲の實況を御視察あらせられた(前記)

明治三十八年

一、四月講習規程改正 その改正の要點を記せば次の如くである (一) 蠶業講習所の講習は養蠶製絲の二科で更に各

科を分て、本科別科と規定されて居ても、本所に於ては養蠶講習科別科の規程は適用されなかつたので、事實上別科は廢止された結果になつたこと(一) 講習生定員の増加(養蠶・製絲講習科本科男生定員各六十名)と講習期限の延長(養蠶・製絲講習科本科男生各三ケ年)されたこと(二) 學科課程に於て學科目の若干の改廢が行はれたこと、即ち養蠶講習科本科に於ては數學の代りに英語が設けられ、農業經濟論や微生物學や蠶室蠶具論や纖維論等が新に設けられ、製絲講習科本科男生に於ては、英語や法規や蠶業汎論や生絲整理論等が新に學科目として設けられたこと(一) 志願者入學資格條件が變つて、從來本科男生(養蠶製絲共通)はその年齢滿二十一年以上の者と限定されて居たのが、滿十七年以上の者と低下せしめられ又從來の如く三ケ年以上の養蠶又は製絲の經驗を有することを入學の必須條件とせざるに至つたこと(二) 入學試驗科目に英語が加へられたこと等である。

一、五月三十一日 皇太子妃殿下(現皇太后陛下)本校に行啓親しく養蠶製絲の實況を御視察あらせられた(前記)

一、六月 農商務省令第二〇號により蠶種配布規則改正 これによりて蠶病豫防法に依る蠶種製造者が本所の蠶種の配付を受くることになつた、蓋し二月に蠶種検査規則が廢止されて、蠶病豫防法が制定實施されたが爲である。

一、十月研究科規程改正 研究生定員の増加(十名を養蠶講習科十名、製絲講習科二十名に)及び研究期限の延長(三ケ月以上一ケ年以内を六ケ月以上二ケ年以内)が改正の要點である。

一、十月留學生規定を制定 外國人にして本所の講習を受けんとする者にこれを許可する制度を設けた。

明治三十九年

一、三月勅令第一四九號により蠶業講習所官制改正 その改正の要點は職員定員が増加（技師三人増加して十四人に
技手二人増加して十九人に）したることである。

一、三月十八日 本所開所十週年記念祝賀會を本所に於て開催 本多所長の式辭後 松田農商務大臣の祝辭演説あり
來賓總代衆議院大井ト新の挨拶 卒業生總代鹽谷清多郎及講習生總代の祝辭あり 來會者貴衆兩院議員及農商務省
高等官並蠶業關係者五百有餘名で頗る盛會裡に終了。

一、九月五日より二十日に至る三週間 フォルマリン檢定法講習開催 これは蠶病豫防法の發布に伴ひ需要増加せる
フォルマリンに關し正確な知識を得せしむるを目的としたのである 因みにフォルマリン檢定法講習規程は左の如
くである。

第一 フォルマリン檢定法講習ハ毎年一回東京府兩蠶業講習所内ニ之ヲ開ク

第二 講習生ハ本所本科卒業生相當以上ノ學力ヲ有シ道府縣若ハ郡ニ於テ蠶絲業ノ監督及指導獎勵ノ任ニ在ル官公吏員並ニ農蠶學校
又ハ講習所職員中ヨリ地方長官ノ選定シタル者トス

第三 實習ニ要スル物品ハ之ヲ貸與スヘシト雖モ其他ハ總テ講習生ノ自辨トス

第四 講習課程左ノ如シ ○學科 藥品檢定概論 重量分析法 容量分析法 フォルマリン檢定法 ○實習 規定液ノ製法 フォル
マリン檢定法

明治四十年

一、製絲短期講習會（自二月二十日）開催 地方製絲場に於ける監督指導者に對し製絲法其他必要事項を短期間に了知
（至三月十二日）

せしめて製絲業の改良を圖ることを目的とした。因にみ製絲短期講習規程は左の如くである。

第一 製絲短期講習ハ毎年一回東京蠶業講習所内ニ之ヲ開ク

第二 講習生ハ高等小學校卒業生以上ノ學力ヲ有シ五ヶ年以上製絲業ニ従事シ現在勤續セル者トス

第三 講習ニ要スル筆墨紙其他炭油食費等ハ總テ講習生ノ自辨トス

明治四十一年

一、二月二十日より三月十一日迄三週間製絲短期講習會第二回開催。

一、三月二十日講習生制帽制服に關し左記の如く規定された。

講習生制帽制服ニ關スル規定 制帽ハ黑色羅紗製ノ軍帽形トシ左圖ノ金屬製徽章ヲ附スルモノトス 制服ハ男生ニ

在リテハ立襟脊廣ニシテ黑色又ハ紺色ノ無地トシ左圖ノ金屬製鈕及襟章ヲ附スルモノトス女生ニ在リテハ黑色ノ袴

ニシテ左圖ノ金屬製徽章ヲ左胸ニ

佩用スルモノトス

但男生ニ在リテハ夏季ハ麥稈帽及

霜降地服ヲ用フルモ妨ナシ又養蠶

講習科別科生ニ在リテハ襟章ヲ附

セザルモノトス



第四 講習科目左ノ如シ 學科○製絲法 殺蟪貯蓄法 工場管理法 機關取扱

- 一、九月フオルマリソ檢定法講習第二回開催 自九月五日 至九月十九日
- 一、五月三十日 伏見宮貞愛親王殿下本所に台臨親しく養蠶製絲の實況を御視察あらせられた(前記)
- 一、六月三日 皇后陛下本所に行啓親しく養蠶製絲の實況を覽はせられ且つ長くも農商務大臣に御言葉を賜はつた(前記)

一、六月 勅令第一四七號により蠶業講習所官制改正、其の改正の要點は職員定員の増加(技師五人増加して十九人に技手六人増加して二十五人に、書記三人増加して十人に)である。

一、七月蠶業講習所講習規程改正 これによりて養蠶講習科別科は廢止された(このことは本所に於ては明治三十八年四月の講習規程の改正によりて實施され來たつたのであり、従つて京都蠶業講習所に於てのみ適用を受けるのであつた)

一、十一月十八日付にて蠶業講習所處務規程改正 これによりて本所は從來の養蠶部製絲部報告課處務課の他に、夏秋蠶部を設けて夏秋蠶の試験及調査や巡回講話や質問應答をなすこととなつた。

明治四十二年

- 一、二月二十日より三月十二日迄三週間、製絲短期講習會第三回開催。
- 一、三月勅令第七六號により蠶業講習所官制改正、これにより職員定員の減少(技手二十五人が二十三人に)が規定

された。

- 一、三月農商務省告示第八九號により本所夏秋蠶部は、之を長野縣松本に設置する旨公布された。
- 一、六月三十日 本所夏秋蠶部開所式を松本市同所内に於て舉行、來賓には農商務次官、大山長野縣知事各府縣技師各郡長其他四百餘名あり、本多所長式辭を述べ終つて、大浦農商務大臣の告辭、十時部長の報告 大山知事大日本蠶絲會々頭松平男爵の祝辭あつて目出度終了した。

本所夏秋蠶部が長野縣松本に設置さるゝに至つた其の間の事情及經過を知るために、開所式當日日本多所長の述べたる式辭の一節及十時部長の報告を茲に轉載することとする。本多所長は先づ最初以來賓に對する挨拶を述べ謝意を表明し次で蠶業講習所の沿革及現況に言及し、これに續いて、

當時(明治三十二年)に於て蠶業講習所が當に爲すべくして爲さざりし二個の緊要なる事業が残つて居つたのでござります一は製絲に關する試験並に講習二は夏秋蠶に關する試験並に講習、これであり、右の二者は吾々當局に於て何れも緊急施設を要すべき事業と認めたるのみならず新業界の興論も亦之れが急務を要望致しましたが、當時内外の事情はこの兩者の施設を同時にすることを許さず遂に第一の製絲に關する事業を開始することになりまして先づ東京蠶業講習所に於て製絲部を特設致しました是れ實に去る明治三十五年の事であり、次に直に夏秋蠶に關する試験並に講習の事業をも施設すべく計畫致しましたが、未だ其時機に達せずして三十七八年事件が起りましたそのための候は暫く中絶するの已むを得ざるに至りました。

諸君三十七八年事件は我國に於きましては誠に光輝あり名譽ある結果を以て平和克復に至りましたが併し之と同時に國家は戦後經營なる一層複雑多端にして且つ重大なる事業を負担せなければならぬ事となりました、爲めに當時殖産獎勵の急要一般に認められし

にも拘らず本事業の如きも容易に其目的を達する機会を得ませず在再日を送りましたが朝野人士の盡力に因り遂に第二十四議會の協賛を得茲に始めて多年の宿望を現實にすることを得ました次第であります。而して又夏秋黨部に於て掌るべき業務は諸君の既に知らるるが如く夏秋黨に關する全般の事項即ち蠶種々類の調査、蠶種の製造及び保護法、夏秋黨の飼育法夏秋黨用桑樹並に栽培法等に關する試験調査を以て主要の目的と爲ります。

今規程の示す所に依り其大綱を擧ぐれば次の通りであります即ち(一)夏秋黨に關する試験及調査(二)夏秋黨に關する巡回講話(三)夏秋黨に關する質問應答、これでありませぬ。而して尙當部設置の目的の一たる講習の事は故ありて未だ開始の運に致らざるを遺憾と致します。

諸君當夏秋黨部は誠に以上の如き長き年月と困難なる経過とを以て初めて生れたのであります而して今後以上の如き業務を負担せんとするのであります、然れども今や僅に其産聲を擧げ得たるのみであります自今以後成長して活社會の實用をなすに至る迄には前途誠に遠慮なござります。加之實業に關する試験なるものは純粹の學者が純粹なる學術上の研究に従事するものとは大に其趣を異にする點があるのであります即ち純粹の學者として學術上の研究を爲すには必ずしも世間の實務に接觸するの要なけれども實業に關する試験事業に至つては然らず能く時代の要求に應じ實務の經營上直接必要あり且つ利益あるべき問題の解決を以て主要の目的とせねばならぬのであります。故に試験事業を經營するには先づ斯業者の實情を詳かにして以て實社會の要求に應ずべき適切な問題を捕へる事が極めて重要なものであります此の適切な問題を捕へ得ると否とが即ち試験事業の成否の分るゝ處であると云ふて不可ないのであります、是れ實に東京を距ること遠くして統轄上幾多の不便あるにも拘らず敢て本部を當地に設けたる理由の重なる點であります。

蓋し當地方は秋黨の發現地にして最も古き歴史を有し且つ最も隆盛にして此等の點に對する便利甚だ多しと信じたからであります。然れども既に述べたるが如く當部は今や僅に産聲を擧げたるに過ぎずして設備未だ整頓せず規模亦甚だ小にして現に技術に關係あ

る職員のみ全體を通じて僅か四人に過ぎませぬので親しく地方を巡視して其狀況を一見する事すら容易に許さぬ様な次第であります。故に急速に蠶業界に期待する所に應ぜんことは甚だ困難とする所でありませぬ。是吾々が夙に憂慮して措がざる所であります。

と述べ之に續き當業者及來賓に對し本部事業の發展につき充分の保護と鞭撻、適切な忠言と補佐とを與へられる様切望し、更に本部職員に對してその職責の重大なるを喚起し職務に勵精外に對し勉めて當業者に接する機会を得、その實狀を明かにし、その要望に應へて本部設置の趣旨に副ふ様に注意を促し、最後に本部設置の由來を次の様に述べ、其關與者に謝意を表し、職員一層の奮勵と來賓の補育を切望するとなして式辭を結んで居る即ち、

當夏秋黨部の設置は上來述べ來りたるが如く吾々當局多年の希望ではありましたが併し他の一面より之れを云へば、全く當業者諸君の要求と盡力とに因りて成りたるものと云はなければなりません、特に當縣前代議士諸君の如きは一面に於ては社會に向つて之が設置の必要を唱導して輿論を喚起し、一面に於ては議會に於て或は其建議案を提出し或は之が通過に盡力せられたるが如き其功勞は決して没すべからざるもので、本部は實に此等諸君の提唱盡力に因りて生じたるものと云ふて不可ないのであります。又當部の位置選定に就きましては大山知事閣下並に岡田内務部長以下縣廳吏員當東筑摩郡前郡長水上君現郡長濱君以下郡役所員松本市長小里君以下市役所員並に當郡蠶種同業組合長鳥羽君蠶病豫防事務所々長瀧澤君其他當業者諸君より多大の熱誠と盡力とを蒙りましたが當部が此設置を選定し得たるものは全く此等諸君の盡力に因ることあります。又東筑摩郡及び松本市に於ては當部の設置に就ては多大の同情と好意とを以て迎へられ敷地並に試験地の全部即ち一萬五千有餘坪の土地を寄附せられました尙ほ

又當市に於ては市街より當所に通ずる道路の不便なるを憂ひ特に數百間の新道を開鑿されましたのであります當部の設備上並に事業の爲に受けたる便益は頗る多大であります、茲に謹で御披露申上げ且つ深く感謝の意を表します云々

十時部長の報告書

閣下竝に諸君余はこの盛典に際し當部既往の概要を陳述するの光榮を有す、昨春當夏秋蠶部設置の議決せらるゝや當局は事業の經營上必要と便宜なる條件を具備せる地方に、之が設置の方針を樹て其候補地を群馬山梨及び長野の三縣に取り就中群馬及長野縣を適當と認め二縣當局に對し候補地の豫選を依頼し、次で實地踏査の結果當松本市を以て比較的優良と認め更に縣當局郡當局並に地元關係人士と協議を遂げ再應調査の結果愈々この地を卜するに至りしは實に昨年六月なりとす、超へて昨年十月假事務所を當地に設け土地整理並に建築工事に着手せしも時恰も嚴寒の候に際し漸く本年三月を以て昨年度豫定の工事を了するに至れり、而して本年三月十八日東京蠶業講習所官制改正せられ當部は東京蠶業講習所夏秋蠶部なる名稱を以て當地に設立する旨發布せらる。今當部の概況を述べん、土地は一五三〇一坪五合にして内敷地二九四一坪五合桑園一〇二三六坪なり、建築物は事務室四〇坪一棟蠶室七四坪二棟冷蔵庫六五坪一棟其他附屬物四棟にして合計二八六坪七合八勺六才也、冷蔵庫は冷蔵及機關の二室に大別せられ米國シムントン會社製アンモニア壓搾機及機關を据へ付け冷蔵庫の攝氏五度より二七度五に至る二二度五を十室に分けアンモニアの氣化作用により冷却せし鹽水を通して各室を冷却せしむるの裝置なりとす、尙本年度に於

て建設すべきもの實驗室一棟貯桑室一棟其他附屬建築五棟なりとす、恕上の如く當部はその規模小に設備未だ整はず其局に當るもの不敏なり、果して豫期の効果を奏し得べきや自ら疑はざるを得ず、希くは上局の鞭撻と來賓諸君の熱き同情と深き補助により一日も早く發達を遂げ當部設置の目的に近からんことを祈るのみ。

一、七月十二日大日本蠶絲會總裁伏見宮貞愛親王殿下本所卒業證書授與式に台覽親しく令旨を賜はつた。(前記)

明治四十三年

一、二月二十一日より三月十二日迄三週間製絲短期講習會第四回開催

一、三月勅令第八三號により蠶業講習所官制改正、これによりて職員定員の異動(技師三人増員して二十二人に技手一人減員して二十一人に書記一人減員して九人に)が規定された。

一、四月一日 東京、京都兩蠶業講習所分課規程制定、同日より施行されたこれに依る本所分課規程左の如くである。

- 第一條 東京蠶業講習所ニ講習部試験部夏秋蠶部及庶務課ヲ置ク
- 第二條 講習部ニ於テハ養蠶製絲ニ關スル學理及技術ノ講習並講話ニ關スル事務ヲ掌ル
- 第三條 試験部ニ於テハ養蠶製絲ニ關スル試験及調査質問應答並蠶種ノ配付ニ關スル事務ヲ掌ル
- 第四條 夏秋蠶部ニ於テハ夏秋蠶ニ關スル試験及調査講話並質問應答ニ關スル事務ヲ掌ル
- 第五條 庶務課ニ於テハ左ノ事務ヲ掌ル

文書ノ接受發送及保管ニ關スル事項 報告書及圖書等ニ關スル事項 會計ニ關スル事項 他部ノ主宰ニ屬セサル事項

一、五月九日 迪宮、淳宮兩皇孫殿下學習院生徒の御資格を以て本所に台臨、養蠶製絲の實況を御見學あらせられた。

(前記)

- 一、六月二日 皇太子殿下本所に行啓、親しく養蠶製絲其他生徒作業の實況を御視察あらせられた。(前記)
- 一、七月九日 大日本蠶絲會總裁伏見官貞愛親王殿下 本所の卒業證書授與式に台臨親しく令旨を賜はつた。(前記)

明治四十四年

- 一、二月二十日より三月十一日迄三週間製絲短期講習會第五回開催。
- 一、三月十日 祝融の見舞を受く、本多所長土屋町田の技師等寄宿舎男生百五十名を指揮し總員挺身必死となつて消火につとめたが、構内構堂裏手の二階建教室一棟、その隣接建物一棟(二階建宿直宿小使室物置)及隣接の農事試験場物置二棟は烏有に歸した。

明治四十五年

- 一、二月二十一日より三月十二日迄三週間製絲短期講習會第六回開催。
- 一、三月 農商務省告示第九〇號より東京蠶業講習所夏秋蠶部は原蠶種製造所松本支部と改稱され、その所管事務は之を原蠶種製造所に移屬した。
- 一、四月勅令第九六號により蠶業講習所官制改正、その改正の主要な點を挙げれば左の如くである。(一)蠶業講習所の主掌事務は從來蠶絲業に関する講習試験調査、巡回講話、蠶種配布、質問應答であつたが、之を改めて蠶絲業に関する講習講話及研究とした、従つて蠶業講習所は専ら生徒教養の任に當り兼て斯業に関する研究を行ふこととなつた。

つたこと、(一)直接に講習生取締りの任に當る舎監を生徒監と改稱し、技師を以てこれに充てたこと、(二)職員定員が減少(技師二十二人が十七人に、技師二十一人が十七人に書記九人が八人に)されたことである。

附記 明治四十四年五月勅令第一一〇號を以て原蠶種製造所に関する官制が公布され、これによりて右製造所は原蠶種の製造及配布 蠶絲業に関する試験及調査の事務を掌ることとなつた。

- 一、五月 農商務省告示第一六八號により明治三十二年七月告示された蠶業講習所事務區域區分の件廢止。
- 一、六月 本所處務細則を制定、これによりて從來の組織を改め、庶務係、會計係、教務係、生徒係、圖書係、標本係、研究係、桑園係を置き、その主掌事務を明示した。
- 一、九月 講習規程を改正、學科目の改廢並學年學期等の變更を行つた。

大正二年

- 一、二月五日より二月二十五日迄三週間製絲短期講習會第七回開催。
- 一、六月 勅令第一九八號により蠶業講習所官制改正、蠶業講習所は農商務省より文部省所管に移り、その職員定員の減少(技師十七人が十五人に、書記八人が七人に)が行はれた。
- 一、十一月九日 本多所長開講二十五年記念祝賀會開催され、同會より左記物件の寄贈を受け翌三年十二月十七日其手續を完了した。

一 記念圖書館壹棟建坪

三二坪五

第一編 蠶業試験場及蠶業講習所時代

- 一 書 庫 壹棟建坪 九坪
- 一 渡廊下 二坪
- 一 備 品 一四種
- 一 圖書 新スタンド大辭典 外 一八一冊

抑々本多所長開講二十五年記念祝賀會は本多所長が、蠶業講習所の前身農務局蠶業試驗場時代即ち明治二十二年以來西ヶ原に於て教鞭を執られたる歲月は本年で丁度二十五年に達したので、其門下生及職員其他有志者の寄附金によりて、一はか祝意を表し且彰徳謝恩の微志を表する爲、企畫されたものでその事業は門下生其他有志者の寄附金によりて、一は祝賀式を舉行し本多所長に記念品を贈呈し、一は記念文庫を設けて本所に寄附するといふのであつた。當日舉行されたる祝賀式の狀況に關して次の如く記されて居る（本多岩次郎先生傳・本多先生開講二十五年祝賀會に據る）

大正二年十一月九日祝賀會を舉行し記念品を贈呈した、當日午前十時第一振鈴にて會員着席、第二振鈴にて來賓着席するや正實本多先生には母堂令夫人令息令嬢を伴はれ辻委員長の先導にて着席せらる、來賓席に列せる重なるものは元田選相、正親町伯爵、松平子爵、澁澤男爵、仲小路前農相、松浦専門學務局長、道家農務局長、志村勸業銀行總裁、古在農科大學長、横井博士、佐々木博士、三松農政課長、加賀山原蠶種製造所長、芳賀蠶絲課長、月田耕地整理課長、針塚上田蠶絲専門學校長、山崎文部省會計課長、其他數十名で席定まるや辻委員長擧式の辭を述べ、委員中村雅次郎氏は経過報告を爲し了て、辻委員長は左記の仰鑽の辭を朗讀した。後松浦専門學務局長は文部大臣の祝辭を、道家農務局長は農商務大臣の祝辭を朗讀し續いて元田選相壇上に進み一場の演説をなし後祝辭を朗讀され、更に大日本蠶絲會頭松平子爵祝辭を朗讀し澁澤男爵祝辭演説を試みられ、夫れより工藤善助氏祝辭演説をなし吉池慶正

氏門下生惣代として祝辭を述べ岩淵平介氏は祝辭祝電の披露を爲し、最後に本多所長答辭を述べ謝意を表された。

これにて式を了り運動場にて記念撮影を爲し、後食堂にて一同午餐の食卓に着き本多先生の萬歳を三唱し祝盃を擧げて散會した尙當日午後五時より築地精養軒に於て祝賀の大夜會を開催し來會者三百餘名に達し頗る盛會を極めた。其酣なる頃佐々木博士は會員を代表して一場の挨拶を爲し、本多先生亦之に答辭を述べ一同陶然として和氣譚々の裡に散會した。

仰鑽の辭 丹楓日に映じ黃菊霜に做るの候を卜し、東京蠶業講習所長本多岩次郎先生開講二十五年祝賀會の開設に方り、職員卒業生並に地方有志等謹で茲に先生が多年勵精奉公の至誠を欽し、研鑽誘掖の功勞を讃せんとす先生は豊後杵築の人なり、明治二十一年東京農林學校農科本科を出で、直に職を農商務省に奉じ翌二十二年より育英の任に當り同二十九年農商工業視察の爲に歐米に航し同三十一年更に清國各地を歴覽して蠶業の實況を視察せられ、三十六年東京蠶業講習所長に累し、大に規模を擴張し新業の發展に盡瘁し、越えて四十三年農商務省に生産調査會の設置せらるるや先生亦臨時委員となりて執掌し、翌年蠶絲業視察のため再び支那に赴かる北馬南船席暖まるに違ならず、其到る所細心視察し、よく彼の長を採つて以て我が短を補ひ歸來資益する所少からず。

近時我蠶絲の海外に輸出するもの實に一億數十萬圓の巨額に達し、其よく伊佛を凌ぎ萬城四百餘州をして後に瞻着たらしめしは天下の齊しく快とする所にして我國富の増進之を證して餘りありとす。是固より時運の然らしむる所に由ると雖も、而も先生の功もまた與つて大に力あるを疑はず況や先生諄々然としてよく人を誘き、既に三千の子弟を出し、三千の子弟又よく其歩調を整へ、改良の先驅者となりて以て内外各地に活動しつつあるに於てをや、願ふに先生の此の二十五年間終始渝らざるの操守と堅忍擁まざるの努力とを以て一意専心其職務に貢獻せらるるにあらざんば安ぞよく此に至らんや且夫れ先生高潔にして名利に淡く、其熾烈なる研究的精神は殊に製絲用水及蠶種貯蔵に於て現はれ其生徒に莅む温情慈母の如く其部下に對する敦厚長者の風あるに至りては蓋し世間多く其四備を見ざる所なり、是を以て講習所内絶えて紛擾の聲なく、常に和氣譚々として一家團樂の觀あり、嗚呼先生の人格功績之を仰げば彌々高く之を續れば彌々堅し、豈區々たる文字のよく盡す所ならむや暢太郎茲に會員を代表し謹んで仰鑽の辭を呈すと云爾

大正二年癸丑十一月九日

本多東京蠶業講習所長開講二十五年祝賀會員總代 辻 暢太郎

大正三年

一、二月五日より二月二十五迄日三週間製絲短期講習會第八回開催。

一、三月 勅令第四四號により文部省直轄諸學校官制中次の如く改正、四月一日名を東京高等蠶絲學校と改稱し同時に養蠶科、製絲科及製絲教婦養成科の三科とし且つ學科目の改廢を行つた、これに就ては東京高等蠶絲學校時代に記述することとする。

文部省直轄諸學校官制中改正 大正三年三月三十一日

第一條 上田蠶業專門學校ノ次ニ 東京高等蠶絲學校及京都高等蠶業學校ヲ加フ

附則 本會ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス 蠶業講習所官制ハ之ヲ廢止ス

第二款 蠶業講習所時代の最終年度の講習規程

蠶業講習所時代(自明治二十九年三月)に於ける講習規程の變遷に關しては、前記の如く明治二十九年五月、三十二年六月、三十五年六月、三十八年四月、四十一年七月、大正元年九月の改正を経て、東京蠶業講習所時代の最後の科別は養蠶科、製絲科、製絲女生本科、製絲女生別科の四つとなつた、次に本時代の最終年度の講習規程を擧げると、次の通りである。

東京蠶絲講習所講習規程(大正元年九月十五日改正)

第一章 總 則

第一條 本所ハ養蠶及製絲ニ關スル學理及技術ヲ講習ス

第二條 本所ニ養蠶科製絲科ヲ置キ製絲科ニ女生本科及女生別科ヲ附設ス

第三條 本所ニ研究生及温習生ヲ置ク事アルヘシ

第四條 本所ハ必要ニ應ジ養蠶及製絲ニ關シ短期ノ講習ヲ爲スコトアルヘシ、短期講習ニ關スル規程ハ所長之ヲ定ム

第五條 各科ノ修業年限ハ左ノ如シ 養蠶科三ヶ年 製絲科三ヶ年 女生本科二ヶ年 女生別科一ヶ年

第二章 學科目及課程

第六條 各科ノ學科目及課程左ノ如シ

養 蠶 科 講義ノ部

學科目	第一學年			第二學年			第三學年		
	第一學期	第二學期	第三學期	第一學期	第二學期	第三學期	第一學期	第二學期	第三學期
英 語		二	三						
動 物 學	三								
植 物 學	四								
物 理 學									
化 學									
測 定 學									
氣 象 學	四								

第一編 蠶業試驗場及蠶業講習所時代

學科目	學年	
	學期	學年
殺繭乾繭 工場管理 第一製絲 第二製絲 繭審查 生絲整理 生絲整理 繭審查	第一學期	第一學年每學期間回数
	第二學期	第二學年每學期間回数
	第三學期	第三學年每學期間回数
	第一學期	第一學年每學期間回数
	第二學期	第二學年每學期間回数
	第三學期	第三學年每學期間回数

製絲女生本科 實習ノ部

學科目	學年
養蠶法	三
工場管理法及衛生法	二
殺繭貯繭法	二
製絲機法	八
製絲機法	二
計	八

卒業論文

製絲女生本科 講義ノ部

學科目	學年	
	學期	學年
簿理算 簿理算 簿理算 簿理算 簿理算 簿理算	第一學期	第一學年每週授業時數
	第二學期	第二學年每週授業時數
	第三學期	第三學年每週授業時數
	第一學期	第一學年每週授業時數
	第二學期	第二學年每週授業時數
	第三學期	第三學年每週授業時數

養繭	生絲	繭審	第一製絲	第二製絲	工場管理	汽機取扱	殺繭貯繭	繭審
八	八	八	八	八			二五日	
一五	一五	一五	一五	一五				
九九	九九	九九	九九	九九				
三三	三三	三三	三三	三三			一五日	
一五	一五	一五	一五	一五	不定時	不定時	不定時	
九九	九九	九九	九九	九九	一〇日	不定時	不定時	
一〇五	一〇五	一〇五	一〇五	一〇五	二〇日	不定時	不定時	一五日
一五五	一五五	一五五	一五五	一五五	三〇日	不定時	不定時	
九	九	九	九	九	一八日	不定時	不定時	

製絲女生別科申講義ノ部 乙實習ノ部

學科目	第一學年每週授業時數			乙第一學年每學期間回数		
	第一學期	第二學期	第三學期	第一學期	第二學期	第三學期
算術	二	二	二	四		四〇
工場管理法	一	二	一	二	四	
殺蛹貯菌法	一	二	一	六	八	
製絲法	四	三	二	七	一	六
計	八	八	八	六	七	四
				生	生	生
				繭	繭	繭
				整理	整理	整理
				第一製絲	第二製絲	殺蛹貯菌

第三章 學年、學期及休業

第七條 各科ノ學年ハ四月一日ニ始リ翌年三月三十一日ニ終ル

第八條 學年ヲ分テテ左ノ三學期トス

第一學期 自四月一日起至八月三十一日 第二學期 自九月一日起至十二月三十一日 第三學期 自一月一日起至三月三十一日

第九條 休業日左ノ如シ但シ 養蠶科ニ在リテハ養蠶、蠶種製造及殺蛹貯菌實習中、製絲科ニ在リテハ養蠶 繭繭實習中ハ休業セ

ス又夏期休業ハ業務ノ都合ニ依リ伸縮スルコトアルヘシ
冬期休業 自十二月二十五日 至一月七日 春期休業 自四月一日起至四月十四日 夏期休業 自七月二十一日日起至八月三十一日 (第三學年及養蠶科第二學年ニ限リ八月十一日) 日 曜日 大祭祝日

第四章 入學、在學、休學及退學

第十條 本所ニ入學ヲ許可スヘキ者ハ品行方正志操堅實ニシテ左ノ各項並ニ第十七條ノ規程ニ該當シ且入學檢定及身體檢査ニ合格シタル者タルヘシ ○養蠶科製絲科 男子ニシテ滿十七年以上ノ者 中學校卒業生若ハ之ト同等以上ノ學力ヲ有スル者 ○女生 本科滿十八年以上ノ者ニケケ年以上製絲ニ從事シタル者 高等小學校若ハ之ト同等以上ノ學力ヲ有スル者 ○女生別科 滿二十年以上ノ者 三ケケ年以上製絲ニ從事シタルモノ 尋常小學校卒業生若ハ之ト同等以上ノ學力ヲ有スル者

第十一條 入學檢定ヲ分テテ試驗檢定及無試驗檢定ノ二トシ本所ニ於テ之ヲ行フ但シ試驗檢定ハ入學志願者ノ願ニ依リ養蠶科及製絲科ニ在リテハ京都蠶業講習所仙臺市又ハ熊本市ニ於テ女生本科及女生別科ニ在リテハ京都蠶業講習所又ハ地方廳(東京府廳及京都府廳ヲ除ク)ニ於テ之ヲ行フ

第十二條 養蠶科及製絲科ノ試驗檢定ハ左ノ學科目ニ就キ中學校卒業ノ程度ニ依リ之ヲ行フ
國語漢文 數學 英語 物理學 化學 動物學 植物學

第十三條 女生本科及別科ノ試驗檢定ハ左ノ學科目ニ就キ女生本科ニ在リテハ高等小學校卒業ノ程度ニ依リ女生別科ニ在リテハ尋常小學校卒業ノ程度ニ依リ之ヲ行フ ○女生本科 算術 理科 作文 製絲法 ○女生別科 算術 作文 製絲法 繭絲技術(他ノ學科試驗ニ合格シタル者ニ就キ本所ニ於テ之ヲ檢定ス)

第十四條 無試驗檢定ハ左ノ各號ノ一ニ該當スル者ノ學業成績ニ就キ之ヲ行フ (一)本所ノ適當ト認メタル中學校ヲ卒業シ最終學年ノ學業成績ノ席次首位ヨリ數ヘテ其ノ學級ノ及第者全數ノ十分ノ一以內ニ在リテ卒業後二箇年以上ヲ經過セザル者 (二)本所ノ適當ト認メタル中學校在學者ニシテ第四學年ノ學業成績ノ席次並ニ第五學年ノ第一學期及第二學期ノ平均學業ノ席次首位ヨリ數ヘテ其ノ學級生徒全數ノ十分ノ一以內ノ者

第十五條 無試驗檢定ニテ入學ヲ許可スヘキ人員ハ各科募集人員ノ三分ノ一以內トス但シ無試驗檢定ニ合格セサル者ハ第十二條ノ

試験檢定ニ應スルコトヲ得

第十六條 入學試験ニ合格シタル者ニハ本所ニ於テ更ニ第十七條ノ身體検査ヲ行フ

第十七條 入學試験者ハ身體強壯ニシテ左記ノ各號ニ該當セサル者タルヘシ (一)結核 咯血 癩狂 癩癩 癩病 梅毒 傳染性

皮膚病其他傳染性疾患アル者又ハ心臟 肺臟 肋膜ノ著シキ疾患 肋膜炎後ノ障害甚シキ者 其他動作ニ堪ヘサル疾患アル者

(二)發育不全ニシテ薄弱ナル者 高度ノ脂肪肥滿ナル者 四肢ノ著シキ彎曲若ハ不同又ハ甚シキ筋肉薄弱ナル者 手指ノ缺損若

ハ畸形ナル者 下脂靜脈ノ努張著シキ者 (三)精神ノ異常 言語障害アル者 又ハ甚シキ訥吃ナル者 (四)片眼若ハ兩眼ノ視力

妨ゲアル者又ハ色盲ナル者但シ眼鏡ヲ用ヒテ其ノ視力ヲ調節シ得ル者ハコノ限リニ在ラス (五)片耳若ハ兩耳ノ聾ナル者又ハ低

聾ヲ聴取シ難キ者

第十八條 試験檢定ニ依ル入學志願者ハ三月十五日迄ニ入學願書ニ履歷書及身體検査證ヲ添ヘ本所ニ差出ス可シ 但シ養蠶科及製

絲科ノ入學志願者ニ在リテハ入學志願前六ヶ月以内ニ撮影シタ寫眞(脱帽半身手札形)ヲ添付スヘシ

第十九條 無試験檢定ニ依ル入學志願者ハ三月一日迄ニ入學願書ニ當該學校長ノ證明書履歷書及身體検査證ヲ添ヘ本所ニ差出スヘシ

但第十四條ニ號ノ志願者ハ其學校ヲ卒業シタルトキハ直チニ卒業證書ノ寫ヲ差出スヘシ

第二十條 無試験檢定ニ合格セサル場合ニ於テ第十二條ノ試験檢定ヲ受ケムトスル者ハ豫メ第十九條ノ願書ト同時ニ受験願書並ニ

第十八條ノ寫眞ヲ本所ニ差出ス可シ(右書様式ハ略)

第二十一條 入學許可ヲ得タル者ハ十日以内ニ在學證書ニ戶籍抄本ヲ添ヘ差出ス可シ

第二十二條 保證人ハ二人トス内一人ハ學費供給ノ責ニ任スル者他一人ハ東京府内在住ノ公民タルヲ要ス

第二十三條 保證人轉居 改印 改姓又ハ改名シタルトキハ直チニ届出ツヘシ保證人旅行セムトスルトキハ豫メ相當ノ代理者ヲ定

メ届出ツヘシ

第二十四條 保證人死亡シ若ハ第二十二條ノ資格ヲ失ヒタルトキハ新ニ保證人ヲ定メ更ニ在學證書ヲ差出スヘシ

第二十五條 本所ニ於テ保證人又ハ其代理者ヲ不適當ト認ムル時ハ之ヲ換ヘシムルコトアルヘシ

第二十六條 生徒ハ男生ニ在リテハ本所規程ノ制帽制服ヲ 女生ニ在リテハ制服ヲ着用スヘシ

第二十七條 生徒ハ本所寄宿舎ニ寄宿スルモノトス 但シ本所ノ都合ニ依リ通學ヲ命シ又ハ生徒ノ願ニ依リ通學ヲ許可スルコトア

ルヘシ

第二十八條 病疾又ハ其他ノ事故ニ因リテ三ヶ月以上修學スルコト能ハサル者ハ許可ヲ得テ其ノ學年間休學スルコトヲ得

第二十九條 休學セムトスル者ハ其ノ事由ヲ詳記シ保證人連署ヲ以テ願出ツヘシ 但シ疾病ノ場合ニハ醫師ノ診斷書ヲ添付スヘシ

第三十條 休學者ハ次學年ノ始ヨリ原級ニ編入ス

第三十一條 疾病又ハ其他ノ事故ニ因リ退學セムトスル者ハ其ノ事由ヲ詳記シ保證人連署ヲ以テ願出ツヘシ 但シ疾病ノ場合ニハ

醫師ノ診斷書ヲ添付スヘシ

第五章 試験及卒業

第三十二條 試験ハ第一學期毎ニ各學科目ニ付一回以上隨時之ヲ行フ

第三十三條 各學科目ノ附點ハ一學期間ノ成績ヲ按シ百點ヲ以テ滿點トス

第三十四條 學年ノ成績ハ平素ノ勤惰並ニ各學期ノ學業成績ヲ按シテ之ヲ定メ其ノ及落ヲ決ス

第三十五條 試験ニ缺席シタル學科目ハ零點トス

第三十六條 疾病其ノ他已ムヲ得サル事故ニ因リ試験ニ缺席シタル者ニハ願ニ依リ追試験ヲ行フコトアルヘシ

第三十七條 各科規程ノ課程ヲ修了シタル者ニハ卒業證書ヲ授與ス

第六章 賞 罰

第一編 實業試験場及實業講習所時代

第三十八條 在學中學術優等品行方正ニシテ他ノ模範タルヘキ者ニハ卒業ノ際賞品ヲ授與ス
 第三十九條 諸規程及心得等ニ違反シ又ハ怠惰不品行ナル者ハ其ノ情狀ニ依リ、左ノ懲戒ニ處ス 一 譴責 二 停學 三 退學
 第四十條 左ノ各號ノ一ニ該當スル者ハ退學ヲ命ス 一 缺席多キ者 二 成業ノ見込ナキ者 三 同級ニ於テ二回落第シタル者
 第七章 研究生

第四十一條 本所及京都蠶業講習所卒業者ニシテ既修ノ學科目ニ就キ更ニ研究ヲ爲サントスル者ハ研究生トシテ在學スルコトヲ得
 第四十二條 研究生ノ在學期限ハ六ヶ月以上二ケ年以内トス
 第四十三條 研究生タラムトスル者ハ研究ノ事項及在學ノ期間ヲ記シタル願書ニ履歷書ヲ添付シテ所長ニ差出スヘシ 所長ハ詮議
 ノ上之ヲ許否ス

第四十四條 研究生ハ指導教官ノ監督ノ下ニ研究ス可シ

第四十五條 研究生ハ其ノ研究シタル事項ニ付研究論文ヲ編成シ期限滿了後一ヶ月以内ニ指導教官ヲ經テ所長ニ差出ス可シ

第四十六條 所長前條ノ研究論文ヲ考查シ研究ノ目的ヲ達シタルモノト認メタルトキハ證明書ヲ授與ス

第四十七條 研究生ニシテ貸與ノ物品ヲ毀損シ若ハ紛失シタルトキハ之ヲ辨償セシム

第四十八條 研究生ニシテ成業ノ見込ナキ者ハ除名ス 除名セラレタル者ハ再ヒ研究生タルコトヲ得ス

第八章 溫習生

第四十九條 本所及京都蠶業講習所女子卒業者ニシテ既修ノ學科目ニ就キ更ニ溫習ヲ爲サントスル者ハ溫習生トシテ在學スルコトヲ得

第五十條 溫習生ノ在學期限ハ六ヶ月以内トス

第五十一條 溫習生タラントスル者ハ溫習ノ事項及在學期間ヲ記シタル願書ニ履歷書ヲ添付シテ所長ニ差出ス可シ 所長ハ詮議ノ

上之ヲ許否ス

第五十三條 溫習生ハ溫習期限滿了後二週間以内ニ報告書ヲ指導教官ヲ經テ所長ニ差出ス可シ

第五十四條 溫習生ニシテ貸與ノ物品ヲ毀損シ若ハ紛失シタルトキハ之ヲ辨償セシム

第五十五條 溫習生ニシテ修業ノ見込ナキ者ハ除名ス 除名セラレタル者ハ再ヒ溫習生タルコトヲ得ス

(入學願書 受驗願書 履歷書 證明書 身體検査證 在學證書等ノ様式ハ茲ニ略ス)

第三節 業 績

明治二十九年三月蠶業講習所官制が制定せられ、本所は左記の業務を掌る様明示せられた、即ち蠶業に関する傳習、蠶業に関する試験、巡回講話、蠶種配布、質問應答これであるが、これらの業務は實際に於ては既に蠶業試験場時代から行ひ來たつたことである、今蠶業講習所時代に公刊された蠶事報告、事蹟報告及東京蠶業講習所試験成績に依つて、前記各種の業務の實績を次に記述することとする。

蠶業の講習(又は傳習)

蠶業講習所時代(自明治廿九年三月至大正三年三月)に於て本所を卒業せるもの合計一三九八名で、之に蠶病消毒法講習生一五五名フォルマリン検定法講習生三〇名、製絲短期講習生三一六名を加ふれば其の數一八七〇名であり、この他に留學生規定に據りて入所し規定の課程を履修したもの三三名あつた、今これを表示すれば次の如くである。

生理飼育に関する試験 七五件 製絲に関する試験 七五件
蠶病に関する試験 六二件 其他試験及調査 五四件

である。これらの試験及調査は蠶事報告及東京蠶業講習所試験成績に輯録し或は講習講話に依りて一般當業者に周知せしめて、斯業の改善進歩に資したのである、茲では右刊行物に掲載せる試験及調査項目及其擔任者を記すだけに止める。

○蠶事報告第十三號 明治三十年三月刊行(試験擔任者記載なし)

桑葉滋養試験 貯桑試験 萎縮病桑給與試験 蠶種密藏試験第五 蠶職交尾時間試験第二 蠶種加害試験 産卵早
中晩試験 催青試験附桑曆 同功繭試験 蠶ノ種類試験 貯繭試験 微粒子病試験

○蠶事報告第十四號 明治三十一年三月刊行(試験擔任者記載なし)

桑葉滋養試験 桑花給與試験 濡桑給與試験 貯桑試験 産卵早中晩試験 蠶ノ種類試験 就眠中温度試験 テグ
ス試験法 鱗毛外十種給與試験 微粒子病試験(遺傳試験混育試験卵面病毒塗抹試験微粒子調査) 蛆害試験 硬化
病試験 軟化病試験 蠶兒絲腺發育調査其他

○蠶事報告第十五號 明治三十二年三月刊行(◎印試験主任)

桑葉滋養試験 ◎技手 辻 暢太郎 同繭功ト上簇ノ關係試験 ◎毛呂 正容
葉質比較試験 ◎技手 辻 暢太郎 三眠蠶試験 ◎石渡 繁胤

濡桑給與試験 ◎技手 辻 暢太郎

多量繭試験 ◎石渡 繁胤

貯桑試験 ◎技手 辻 暢太郎

畸形蠶試験 ◎石渡 繁胤

卵色試験第一 ◎技師 石渡 繁胤

微粒子病試験(微粒子遺傳試験
微粒子調査) ◎石渡 繁胤

蠶ノ種類試験 ◎技師 本多岩次郎

夏蠶種類試験 ◎技手 毛呂 正容

清國産蠶兒飼育試験 ◎技手 丹羽敬太郎

蛆害試験(桑葉類別給與試験蠶
蛆宿主動物試験蠶蛆發育試験) ◎技手 河原 次郎

各色光線ノ蠶兒發育
ニ及ホス關係試験 ◎技手 河原 次郎

繭乾燥試験 ◎技手 河原 次郎

蠶座位置試験 ◎技手 二宮 鶴松

繭選別試験 ◎技手 丹羽敬太郎

生絲織度齊整試験 ◎技手 河原 次郎

柞蠶飼育試験 ◎技師 石渡 繁胤

製絲用水質試験 ◎技手 辻 暢太郎

柞蠶天蠶絲質試験 ◎技師 二宮 鶴松

種類及形狀ニ關スル類節試験 ◎技手 丹羽敬太郎

柞蠶天蠶絲質試験 ◎技師 石渡 繁胤

○蠶事報告第十六號 明治三十三年三月刊行(◎印試験主任)

桑葉滋養試験 ◎技師 辻 暢太郎

乾濕試験 ◎技師 辻 暢太郎

葉質試験 ◎技師 辻 暢太郎

各色光線ノ蠶兒發育ニ及ホス關
係試験第二 ◎技師 河原 次郎

桑葉摘採時刻試験 ◎技師 辻 暢太郎

貯桑試験 ◎技師 辻 暢太郎

人工養蠶法試験 ◎技手 土屋 泰

蠶ノ種類試験 ◎技師 本多岩次郎
◎技師 丹羽敬太郎
◎技師 井上榮三郎

蠶座位置試驗第二 ◎囑托員 二宮 鶴松
 上簇法試驗 ◎技手 横田長太郎
 麥粉外七種給與試驗 ◎技師 石渡 繁胤
 多蠶繭種試驗(第二) ◎技師 石渡 繁胤
 蠶卵重量試驗 ◎技師 石渡 繁胤
 卵色試驗 ◎技師 石渡 繁胤
 殺蛹時期試驗 ◎技手 丹羽敬太郎
 殺蛹乾燥時間及溫度試驗 ◎技手 丹羽敬太郎

秋蠶種類試驗
 清國種及本邦種食桑量試驗
 微粒子病試驗(傳染試驗微粒子有
 毒種飼育法試驗微粒子消毒試驗)
 三眠蠶試驗(第二)
 軟化病消毒法試驗
 乾燥室試驗
 貯繭試驗

◎技手 土屋 泰
 ◎技手 横田長太郎
 ◎技師 石渡 繁胤
 ◎技師 石渡 繁胤
 ◎技師 石渡 繁胤
 ◎技師 石渡 繁胤
 ◎技師 河原 次郎
 ◎技手 丹羽敬太郎
 ◎技手 丹羽敬太郎

○蠶事報告第十七號 明治三十四年三月刊行(◎印試驗主任 △印補助雇)

桑葉滋養試驗 ◎技師 辻 暢太郎 △谷田部七五郎
 葉質試驗 ◎技師 辻 暢太郎 △谷田部七五郎
 桑葉摘採時刻試驗 ◎技師 辻 暢太郎 △谷田部七五郎
 催青試驗 ◎技手 横田長太郎 △谷田部七五郎
 卵殼硬軟試驗 ◎技師 辻 暢太郎 △谷田部七五郎
 蠶種凍氷試驗 ◎技手 土屋 泰 △蘆野 泰治

蠶卵フォルマリン浸漬試驗 ◎技師 廣瀬 次郎 △鷹森 倭文太
 蠶種人工越冬試驗 ◎技手 土屋 泰 △蘆野 泰治
 春蠶種類試驗 ◎技師 本多岩次郎 △井上 隆
 ◎技手 井上榮三郎 △富澤 嘉市
 夏蠶種類試驗 ◎技手 横田長太郎 △富澤 嘉市
 秋蠶種類試驗 ◎技手 土屋 泰 △鷹森 倭文太
 蠶ノ生命長短試驗 ◎技師 芝山 直清 △蘆野 泰治
 乾濕試驗 ◎技師 辻 暢太郎 △谷田部七五郎
 煙中飼育試驗 ◎技師 辻 暢太郎 △田原 龍尾
 上簇試驗 ◎技手 横田長太郎 △狩野 逸平
 繭雌雄選別試驗 ◎技師 廣瀬 次郎 △鷹森 倭文太
 蛆害豫防試驗 ◎技師 廣瀬 次郎 △鷹森 倭文太
 軟化病消毒試驗 ◎技師 廣瀬 次郎 △鷹森 倭文太
 殺蛹時期試驗 ◎技手 町田 穰 △森本 幸太郎
 繭ノ乾燥及貯藏試驗 ◎技手 町田 穰 △井上 隆
 桑ノ害蟲調査 ◎技手 中川 久和 △丹羽 四郎

○蠶事報告第十八號 明治三十五年三月刊行(◎印試驗主任△印補助履)

- 桑葉滋養試驗 ◎技師 辻 暢太郎 △松山 仙吉
- 桑葉摘採時期試驗 ◎技師 辻 暢太郎 △松山 仙吉
- 蠶卵浸水ノ時期及長短試驗 ◎技師 本多岩次郎 △荒海 愈八
- 卵殼硬軟試驗 ◎技師 辻 暢太郎 △松山 仙吉
- 蠶卵フォルマリン浸漬試驗 ◎技師 松尾 重信 △岩淵 平介
- 春蠶種類試驗 ◎技師 本多岩次郎 技師 町田 穰
- 夏蠶種類試驗 ◎技師 横田長太郎 △田島 徳二
- 秋蠶種類試驗 ◎技師 横田長太郎 △坂居 良輔
- 蠶兒選擇試驗 ◎技師 横田長太郎 △名島 末吉
- 蠶ノ生命長短試驗 ◎技師 芝山 直清 △勝又 惣作
- 秋蠶原蠶飼育試驗 ◎技師 土屋 泰 △田原 龍尾
- 人工越冬蠶試驗 ◎技師 土屋 泰 △駒宮 治作
- 飼育温度ヲ異ニセル蠶種ノ強弱試驗 ◎技師 土屋 泰 △駒宮 治作
- 煙中飼育試驗 ◎技師 辻 暢太郎 △松山 仙吉

- 石灰撒布試驗 ◎技師 土屋 泰 △駒宮 治作
- 上簇試驗 ◎技師 横田長太郎 △名島 末吉
- 膿蠶試驗 ◎技師 林 驛作 △三谷 徹
- 黑殭蠶ノ研究 ◎技師 林 驛作 △岩淵 平介
- 斃蠶兒ニ見ル所ノ血色細菌ノ研究 ◎技師 野村彦太郎
- 繭雌雄選別試驗 ◎技師 林 驛作 △三谷 徹
- 春蠶繭殺蛹時期試驗 ◎技師 町田 穰 △三谷 徹
- 夏蠶繭殺蛹時期試驗 ◎技師 町田 穰 △三谷 徹
- 夏蠶繭乾燥程度及貯藏法試驗 ◎技師 町田 穰 △三谷 徹
- 蠶病消毒法試驗 ◎技師 辻暢太郎 技師 林驛作 技師 土屋泰 技師 松尾重信 △岩淵平介
- 蟻酸アルデヒドノ定量試驗 ◎技師 辻 暢太郎

- 蠶事報告第十九號 明治三十六年三月刊行 ◎印試驗主任 △補助履
- 産卵試驗 ◎技師 松尾 重信 △久津間 八郎
- 卵殼硬軟試驗 ◎技師 辻 暢太郎 △藤崎 卓爾
- 不越冬蠶種洗滌試驗 ◎技師 松尾 重信 △長岡 哲三 藤崎 卓爾 市川 平蔵

- 蠶種人工發生試験 ◎技手 横田長太郎 ◎技手 松尾 重信 △藤崎 卓爾
- 春蠶種類試験 ◎技手 横田長太郎 △長岡 哲三 坂居 良輔
- 夏蠶種類試験 ◎技手 横田長太郎 △長岡 哲三
- 秋蠶種類試験 ◎技手 横田長太郎 △久津間八郎
- 蠶兒選擇試験 ◎技手 横田長太郎 △柴本寅之助
- 人工越冬蠶試験 ◎技手 土屋 泰 △駒宮 治作
- 煙ノ原蠶ニ及ボス關係試験 ◎技師 辻 暢太郎 △藤崎 卓爾
- 全芽飼育試験 ◎技師 土屋 泰 △駒宮 治作
- 各色光線の蠶兒發育ニ及ボス關係試験 ◎囑託員 田澤俊三郎 △松山 仙吉
- 蠶體雌雄鑑別試験 ◎技手 土屋 泰 技手 松尾 重信 △藤崎 卓爾
- 飼育溫度ヲ異ニセル蠶兒ノ強弱試験 ◎技手 土屋 泰 △駒宮 治作
- 上簇試験 ◎技手 横田長太郎 △松山 仙吉
- 種繭保護試験 ◎技手 横田長太郎 △長岡 哲三 柴本寅之助
- 蛆害試験 ◎技手 松尾 重信 △久津間八郎
- 軟化病試験 ◎技師 林 驛作 △永井 環

膿蠶試験

蠶病消毒試験

赤蠶蠶ノ研究

神奈川縣下ニ於ケル桑樹根朽病

桑樹介殼蟲ノ猩紅病

○蠶事報告第二十號 明治三十六年九月刊行 (◎印試驗主任 △補助)

生繭殺蛹繭及乾繭製絲試験

殺蛹時期試験

乾繭方法試験

乾繭温度高低試験

貯繭方法試験

煮繭温度漸高試験

煮繭程度ト繰湯温度トノ關係試験

煮繭繰湯温度試験

第一編 蠶業試驗場及蠶業講習所時代

◎技手 三谷 徹

◎技手 三谷 徹

◎技手 三谷 徹

◎技手 町田 穰

◎技手 町田 穰

◎技手 町田 穰

◎技手 町田 穰

◎技手 町田 穰

◎技手 町田 穰

◎技手 野村彦太郎

◎技手 野村彦太郎

◎技手 野村彦太郎

◎技手 野村彦太郎

◎技手 野村彦太郎

◎技師 林 驛作

◎技師 辻 暢太郎

◎技手 松尾 重信

◎技手 松尾 重信

◎技手 松尾 重信

◎技師 林 驛作

◎技手 三谷 徹

◎技手 三谷 徹

◎技手 三谷 徹

◎技手 三谷 徹

◎技手 三谷 徹

◎技手 三谷 徹

◎技手 三谷 徹

◎技手 三谷 徹

◎技手 三谷 徹

◎技手 三谷 徹

◎技手 三谷 徹

◎技手 三谷 徹

◎技手 三谷 徹

◎技手 三谷 徹

◎技手 三谷 徹

◎技手 三谷 徹

◎技手 三谷 徹

◎技手 三谷 徹

◎技手 三谷 徹

◎技手 三谷 徹

◎技手 三谷 徹

◎技手 三谷 徹

◎技手 三谷 徹

- 黃越菌處理試驗 ◎技手 三谷 徹 △杉山 寅雄
- 良否菌混合製絲試驗 ◎技手 三谷 徹
- 異種菌混合製絲試驗 ◎技手 三谷 徹
- 大小菌混合製絲試驗 ◎技手 三谷 徹
- 小梓回轉卜緒數卜ノ關係試驗 ◎技手 三谷 徹 △杉山 寅雄
- ケンネル式裝置及繅數比較試驗 ◎技手 三谷 徹 △杉山 寅雄
- 製絲用水試驗 ◎技手 町田 穰 技手 三谷 徹 △松島榮三郎

○蠶事報告第二十一號 明治三十七年三月刊行(◎印試驗主任 △補助)

- 桑葉滋養試驗 ◎技師 辻 暢太郎 △橋爪秀太郎
- 蠶卵浸水試驗 ◎技手 本多岩次郎 技手 坪井 啓作 △橋爪秀太郎
- 卵殼硬軟試驗 ◎技師 辻 暢太郎
- 不越年蠶種洗滌試驗 ◎技手 坪井 啓作 △武 政吉
- 春蠶種類試驗 ◎技手 横田長太郎 △霜 新八郎 高崎 彌一
- 夏蠶種類試驗 ◎技手 土屋 泰 △橋爪秀太郎
- 秋蠶種類試驗 ◎技手 土屋 泰 △霜 新八郎

- 蠶兒選擇試驗 ◎技手 横田長太郎 △馬場 由
- 全芽飼育試驗 ◎技手 土屋 泰 技手 岩淵 平介 △武 政吉
- 上簇試驗 ◎技手 横田長太郎 △武 政吉
- 上簇器試驗 ◎技手 横田長太郎 △馬場 由
- 蛆害豫防試驗 ◎技手 岩淵 平介 △鷹森俊文太
- 軟化病試驗 ◎技師 林 驛作 △山崎新太郎
- 赤殭病蠶ノ研究 ◎技手 岩淵 平介 △鷹森俊文太
- 静岡縣下ニ於ケル蠶ノ黒點病調査 ◎技手 岩淵 平介
- 微粒子消毒試驗 ◎技師 林 驛作 △齋藤平五郎
- 蠶病消毒法試驗 ◎技師 辻 暢太郎 技師 林 驛作 技手 土屋 泰

○蠶事報告第二十二號 明治三十七年三月刊行(◎印試驗主任 △補助)

- 生繭重量増減調査 ◎技手 町田 穰 技手 三谷 徹 △杉山 寅雄
- 生繭殺蛹繭輸送試驗 ◎技手 町田 穰 技手 三谷 徹 △杉山 寅雄
- 生繭處理試驗 ◎技手 松下憲三郎 △松島榮三郎

- 繭内外層練減試驗 ◎技手 松下憲三郎 △藤崎 卓爾
- 黃繭前繭處理試驗 ◎技手 三谷 徹 △藤崎 卓爾
- 黃繭湯量試驗 ◎技手 松下憲三郎 △松島榮三郎
- 黃繭湯溫漸高試驗 ◎技手 三谷 徹 △藤崎 卓爾
- 黃繭程度下練湯溫度ノ關係試驗 ◎技手 三谷 徹 △松島榮三郎
- 黃繭湯溫度試驗 ◎技手 三谷 徹 △藤崎 卓爾
- 黃繭方法試驗 ◎技手 三谷 徹 △藤崎 卓爾
- 練湯換法試驗 ◎技手 松下憲三郎 △藤崎 卓爾
- 整緒方法試驗 ◎技手 松下憲三郎 △松島榮三郎
- 集緒器試驗 ◎技手 三谷 徹 △藤崎 卓爾
- 各種轉子比較試驗 ◎技手 三谷 徹 △藤崎 卓爾
- 練梓ノ回轉下練緒數ノ關係試驗 ◎技手 三谷 徹 △藤崎 卓爾
- 繭及生絲ノ永結前後處理試驗 ◎技手 松下憲三郎 △藤崎 卓爾
- 製絲用水試驗 ◎技師 中村雅次郎 △松島榮三郎
- 變質生絲ニ對スル原因調査 ◎技師 中村雅次郎

杉山 寅雄

○蠶事報告第二十三號 明治三十八年六月刊行 (◎印試驗主任 △印補助)

- 雌雄調査 ◎技手 坪井 啓作 △橋爪秀太郎 鎌瀨 恭明
- 醱酵桑給與試驗 ◎技手 坪井 啓作 △渡邊 昶友
- 黃殭病試驗 ◎技師 林 驥作 △高村源次郎 菊池省三郎

○蠶事報告第二十四號 明治三十八年十一月刊行 (◎印試驗主任 △補助)

- 黃繭前繭處理試驗 ◎技手 三谷 徹 △藤崎 卓爾
- 黃越繭處理試驗 ◎技手 三谷 徹
- 索緒溫度試驗 ◎技手 松下憲三郎
- 整緒方法試驗 ◎技手 松下憲三郎 △藤崎 卓爾
- 索緒方法試驗 ◎技手 松下憲三郎 △藤崎 卓爾
- 練湯換法試驗 ◎技手 松下憲三郎 △林 信夫
- 生絲水結後處理試驗 ◎技手 松下憲三郎
- 燃料ノ蒸發力試驗 ◎技師 永井 米藏
- 汽熱乾繭器傳熱面積比較試驗 ◎技師 永井 米藏

○蠶事報告第二十五號 明治三十八年十一月刊行 (◎印試驗主任 △補助)

第一編 蠶業試驗場及蠶業講習所時代

蠶蛆滅殺ニ關スル試験 ◎技師 中村雅次郎
病蠶屍體消毒試験 ◎技手 岩淵 平介 △笠原熊三郎

○蠶事報告第二十六號 明治三十九年三月刊行(◎印試験主任 △補助)
乾繭回数試験 ◎技手 松下憲三郎

熟ニ關スル繭及生絲ノ練減試験 ◎技師 中村雅次郎 △松島榮三郎
煮湯繰湯温度試験 ◎技手 三谷 徹

炭酸鹽類ノ繭層ニ及ホス試験 ◎技師 中村雅次郎
○蠶事報告第二十七號 明治三十九年五月刊行(◎印試験主任 △補助)

全芽育試験 ◎技師 土屋 泰 △石野 廣
煙草中毒試験 ◎技手 坪井 啓作 △武 政吉

蠶蛾ノ體內ニ存スル大桿狀菌ノ研究 ◎技手 岩淵平介 △笠原熊三郎 嶋 清孝
○蠶事報告第二十八號 明治三十九年十二月刊行(◎印試験主任 △補助)

繭袋ト蠶蛆脱出トノ關係調査 ◎技師 中村雅次郎
乾繭ニ要スル蒸汽量試験 ◎技師 永井 米藏
乾繭ト温度トノ關係試験 ◎技師 永井 米藏

共燃式裝置試験 ◎技手 三谷 徹
共燃式ケネル式比較試験 ◎技手 三谷 徹

黃湯繰湯清濁試験 ◎技手 松下憲三郎 △町田健次郎 山田 新一
○蠶事報告第二十九號 明治三十九年十二月刊行(◎印試験主任 △補助)

春蠶種類試験 ◎技師 土屋 泰 技手 横田長太郎 △井上 惣助 小川文次郎
磯野米次郎 小池 安重

生産地ヲ異ニセル蠶種ノ比較試験 ◎技師 土屋 泰 技手 横田長太郎 霜 新八郎
△武政吉外三名

乾燥桑葉給與試験 ◎技手 横田長太郎 △渡邊昶友外一名
槽飼試験 ◎技手 横田長太郎 △荒井 馬次

害蟲驅除液撒布桑葉給與試験 ◎技師 明石 弘 △丹羽四郎外一名
○蠶事報告第三十號 明治四十年十月刊行(◎印試験主任 △補助)

桑樹害蟲越冬狀況調査 ◎技師 明石 弘 △丹羽 四郎
桑ノ介殼蟲ノ冬期死亡率調査 ◎技師 明石 弘 △丹羽 四郎

桑ノ介殼蟲驅除試験 ◎技師 明石 弘 △丹羽 四郎

桑ヲ害スル燈蛾科昆蟲の調査

◎技師 明石 弘 △丹羽 四郎

○蠶事報告第三十一號 明治四十年九月刊行 (◎印試驗主任 △補助)

卒倒病ノ遺傳的關係試驗 ◎技師 岩淵 平介 △笠原熊三郎外一名

蠶ノ起縮病菌ニ關スル調査 ◎技師 岩淵 平介 △五井伍藤外一名

○蠶事報告第三十二號 明治四十年十二月刊行 (◎印試驗主任 △補助)

生繭輸送試驗 ◎技師 町田 穰 技師 三谷 徹

生繭處理試驗 ◎技師 松下憲三郎 △小松 嘉藏

製絲用水質試驗 ◎技師 中村雅次郎 △小松 嘉藏

水ノ硬度測定ニ關スル試驗 ◎技師 中村雅次郎

柞蠶繭製絲試驗 ◎技師 松下憲三郎 △小松 嘉藏

天蠶繭々質調査 ◎技師 松下憲三郎

天蠶繭石鹼處理試驗 ◎技師 松下憲三郎 △杉山 寅雄

○蠶事報告第三十三號 明治四十一年二月刊行 (◎印試驗主任 △印補助)

蠶蛆ニ關スル研究 ◎技師 明石 弘 △丹羽四郎外一名

蠶蛆ノ寄生蜂ニ關スル調査 ◎技師 明石 弘 △丹羽 四郎

菌類ノ寄生ニ原因スル蠶蛆ノ天然驅除調査 ◎技師 岩淵 平介 △嶋清孝外二名

多化性蠶蛆ノ研究 ◎技師 明石 弘 △丹羽 四郎

桑樹害蟲おぼけんもんノ調査 ◎技師 明石 弘 △丹羽 四郎

桑樹細菌病ノ研究 ◎囑託員 野村彦太郎

○蠶事報告第三十四號 明治四十一年七月刊行 (◎印試驗主任 △印補助)

蠶ノ調査 ◎技師 高橋伊勢次郎 △笠原金次郎外二名

柘葉給與試驗 ◎技師 明石 弘 △米山 秀雄

蠶翅ノ研究 ◎技師 高橋伊勢次郎

○蠶事報告第三十五號 明治四十二年一月刊行 (◎印試驗主任 △印補助)

蠶ノ血液ノ研究 ◎技師 辻 暢太郎

蠶卵人工孵化試驗 ◎技師 霜 新八郎

有孔繭ト上簇法トノ關係試驗 ◎技師 高橋伊勢次郎 △堀川隆見外一名

煙草中毒試驗 ◎技師 辻 暢太郎 技師 坪井 啓作 △佐藤孫三郎

○蠶事報告第三十六號 明治四十二年一月刊行 (◎印試驗主任 △補助)

製絲用水中藻類ノ發生ニ關スル調査 ◎技師 中村雅次郎

乾燥温度ノ高低ト乾燥不同量トノ關係試験

◎技手 小松 豊作

繭ノ害蟲經節蟲(カツヲブシムシ)ノ調査

◎技師 明石 弘 △丹羽 四郎

柞蠶絲抱合裝置試験

◎技手 松下憲三郎

○蠶事報告第三十七號 明治四十二年一月刊行(◎印試験主任 △印補助)

桑樹種類調査

◎技師 横田長太郎 技手 水井壽一郎

桑樹植付粗密試験

◎技師 横田長太郎 技手 水井壽一郎 △吉澤 俊治

桑樹刈採及摘葉試験

◎技師 横田長太郎 技手 水井壽一郎 △吉澤 俊治

桑樹ノ種類ト萎縮病トノ關係調査

◎技師 横田長太郎 △吉澤 俊治

「くはのあをえだしやく」ノ調査

◎技師 明石 弘 △丹羽 四郎

桑ノ蛭蟪調査

◎技師 林 驛作

○蠶事報告第三十八號 明治四十二年二月刊行(◎印試験主任 △補助)

蠶種催青試験

◎技師 土屋 泰 技手 水井壽一郎 △小川文次郎

不越年蠶卵色澤試験

◎技師 土屋 泰 △小川文次郎 △高橋 俊 △有賀 新藏

二化性蠶種三化法試験

◎技手 坪井 啓作 △山中徳三郎 △植木 繼造 △佐藤孫三郎

蠶ノ赤色黄癩病ニ關スル研究

◎技手 岩淵 平介 △河村 福治

蠶ノ赤色棘黄癩病ニ關スル研究

◎技手 岩淵 平介 △河村 福治

母蛾乾燥試験

◎技手 岩淵 平介 △關口幸太郎 △河村 福治

○蠶事報告第三十九號 明治四十三年三月刊行(◎印試験主任 △印補助)

くははまだらたまはへノ研究

◎技手 丹羽 四郎

桑ヲ害スル葉捲蛾科ノ調査

◎技手 丹羽 四郎

すゝへりえだしやくノ研究

◎技手 丹羽 四郎

蠶兒蠶蛾發生時刻一定ノ原因調査

◎技手 坪井 啓作 △條 富得

蠶ノ胴黒病調査

◎技手 岩淵 平介 △三谷賢三郎

蠶竝ニ蠶蛆ニ寄生スル麹黴菌ノ研究

◎囑託員 野村彦太郎 技手 岩淵 平介

○蠶事報告第四十號 明治四十三年三月刊行(◎印試験主任 △印補助)

生種冷蔵試験

◎技師 横田長太郎 △富樫 健

生種保護試験

◎技手 水井壽一郎 △菊地次郎松 △井口 眞作 △稻熊 眞市

風穴蠶種催青試験

◎技手 水井壽一郎 △稻熊 眞市

生種抵抗力試験

◎技手 水井壽一郎 △稻熊 眞市

不越年蠶卵胚子發育温度調査

◎技手 高橋伊勢次郎 △杉田 吉重

○蠶事報告第四十一號 明治四十三年五月刊行 (◎印試驗主任 △印補助)

- 小規模乾繭器ノ設計並試驗 ◎技手 小松 豐作 △卷島庄之助
- 林式乾繭器調査 技手 小松 豐作 △小田中染十郎 △卷島庄之助
- 中原式乾繭器調査 技手 小松 豐作 △小田中染十郎 △卷島庄之助
- 木炭ノ濾過作用ニ關スル研究 ◎技師 中村雅次郎 △青野久右衛門
- 柞蠶繭輸送試驗 ◎技手 松下憲三郎 △小松 嘉藏

○東京蠶業講習所試驗成績第四十二號 明治四十四年四月刊行 (◎印試驗主任 △印補助)

- 風穴蠶種ノ貯藏溫度ト期間トニ關スル試驗 ◎技手 水井壽一郎 △稻熊眞市外一名
- 風穴蠶種ノ貯藏溫度ノ變化ニ關スル試驗 ◎技手 水井壽一郎 △稻熊眞市外一名
- 風穴蠶種ニ於ケル不發生卵ノ原因調査 ◎技手 水井壽一郎 △稻熊 眞市
- 冷藏庫不越年蠶卵胚子ノ調査 ◎技手 高橋伊勢次郎 △杉田 吉重
- 建築用紙ノ種類ト蠶卵トノ關係調査 ◎技師 十時雄次郎 △加藤 新平
- 入穴時期ノ異ナル越年蠶卵胚子調査 ◎技手 高橋伊勢次郎 △杉田吉重外一名
- 出穴時期ノ異ナル越年蠶卵胚子調査 ◎技手 高橋伊勢次郎 △杉田吉重外一名

○東京蠶業講習所試驗成績第四十三號 明治四十四年四月刊行 (◎印試驗主任 ○印補助)

- 滿俺及鐵鹽類ノ桑樹發育刺激ニ關スル研究 ◎技師 中村雅次郎
- 桑樹ノ再發芽ニ對スル刺激劑ノ效果 ◎技師 中村雅次郎 囑託員 井上 柳梧
- 春蠶種類試驗 ◎技師 土屋 泰 技手 松下憲三郎 技手 加藤 小市
- △有賀新藏外一名

上簇期ノ早晚ト繭質トノ關係 ◎技師 肥後 俊彦 △小田中染十郎外一名

蠶蛆ノ野外越冬ニ關スル調査 ◎技手 丹羽 四郎

蠶以外ニ於ケル蠶蛆ノ寄主ニ關スル調査 ◎技手 丹羽 四郎

○東京蠶業講習所試驗成績 第四十四號明治四十五年一月刊行 (◎印試驗主任 △印補助)

- 越年蠶種貯藏溫度試驗 ◎技師 横田長太郎 △野中留藏外一名
- 越年蠶種催青溫度試驗 ◎技師 横田長太郎 △野中留藏外一名
- 生種冷蔵ニ關スル試驗 ◎技師 横田長太郎 △富樫 健
- 蠶卵發育溫度ニ關スル試驗 ◎技手 高橋伊勢次郎 △杉田 吉重
- 人工越冬法試驗 ◎技手 高橋伊勢次郎 △杉田吉重外二名

○東京蠶業講習所試驗成績第四十五號 明治四十五年二月刊行 (◎印試驗主任)

- 乾繭器設計調査 ◎技手 小松 豐作 技手 小田中染十郎 △細川 幸重

放熱室中ニ於ケル旋風羽根應用試驗

◎技手 小松 豊作 技手 河田 岩根

秋蠶繭乾燥程度試驗

◎技師 松下憲三郎

製絲用水曝露試驗

◎技師 中村雅次郎

生繭蒸熱試驗

◎技師 肥後 俊彦 △柿本 勝二

蠶蛆ノ寄生ガ繭質ニ及ボス影響

◎技師 肥後 俊彦 技手 丹羽 四郎 △柿本 勝二

春秋蠶繭質ノ化學的研究(第一報)

◎技師 中村雅次郎 囑託員 三室戸善光

○東京蠶業講習所試驗成績第四十六號 明治四十五年二月刊行(◎印試驗主任 △補助)

桑ノ雌花發育ニ關スル研究

◎技師 鈴木 英亮 △平石 宇三郎

桑葉蟲桑葉葉蟲驅除試驗

◎技手 丹羽 四郎

赤楊粘蠶ノ蠶蛆ニ關スル調査

◎技手 丹羽 四郎

蠶蛆ノ齡ニ關スル研究

◎技手 丹羽 四郎

化性試驗

◎技手 坪井 啓作 △中村愛矩外四名

桑葉水分發散量ノ次代蠶兒ニ及ボス影響試驗

◎技手 坪井 啓作 △梁瀬林太郎外一名

膿病試驗

◎技師 林 驊作 △酒勾鷲郎外一名

微粒子生存期間試驗

◎技師 林 驊作 △長岡積外三名

蠶室內ノ細菌ト蠶病トノ關係試驗

◎囑託員 佐々木忠次郎

○東京蠶業講習所試驗成績第四十七號 明治四十五年三月(◎印試驗主任 △印補助)

蠶ノ發育溫度ニ關スル試驗

◎技手 高橋伊勢治郎 △杉田 吉重

究理法試驗

◎技師 十時雄次郎 技手 加藤 新平 △吉田正巳外一名

人工三化法試驗

◎技手 加藤 新平 △鈴木 一丸

風穴秋蠶種ノ貯藏前ノ保護溫度ニ關スル試驗

◎技師 横田長太郎 △稻熊眞市外一名

夏秋蠶種ノ催青器又ハ運搬器ノ容積ニ關スル試驗

◎技師 横田長太郎 技師 荒木 武雄 △富樫健外一名

風穴秋蠶種ノ再貯藏試驗

◎技師 横田長太郎 技師 荒木 武雄 △野中 留藏

桑葉ノ水分ト秋蠶飼育トノ關係試驗

◎技手 加藤 新平 △鈴木 一丸

○東京蠶業講習所試驗成績第四十八號 明治四十五年四月刊行(◎試驗主任 △印補助)

微粒子ノ胚種傳染ニ關スル研究

◎技師 岩淵 平介 △三谷賢三郎

微粒子病ノ傳染源地ニ關スル研究

◎技師 岩淵 平介 △三谷賢三郎

○東京蠶業講習所試驗成績第四十九號 明治四十五年五月刊行(◎印試驗主任 △印補助)

過乾溫度試驗

◎技手 小松 豊作 △細川 幸重

貯繭試驗

◎技師 松下憲三郎 △小田中染十郎

○東京蠶業講習所試験成績第五十號 大正二年二月刊行(◎印試驗主任 △印補助)

桑葉蛋白質ノ研究

◎技師 三室戸善光

根刈桑ト立木桑トノ葉質比較及之カ爾質并ニ生絲ノ練減ニ及ボス影響比較試驗

◎技師 岩淵 平介 △三谷賢三郎

蠶ノ卒倒菌ト蜜蜂ノ疫病菌トノ比較研究

◎技師 岩淵 平介 △三谷賢三郎

黒點病蠶ノ病理解剖的研究

◎技師 岩淵 平介 △三谷賢三郎

蠶種ノ催青法ト微粒子病トノ關係試驗

◎技師 岩淵 平介 △三谷賢三郎

蠶ノ糞詰病ノ研究

◎技師 林 驥作 △三谷賢三郎

各地産繭々質調査

◎技師 松下憲三郎 △淺井 與六外一名

○桑樹萎縮病調査報告第一號 明治三十年三月刊行

桑樹萎縮病試驗成績 愛知縣桑樹萎縮病試驗第六報告 全國桑樹萎縮病調査報告概要 調査委員鈴木梅太郎 大

森順造 野村彦太郎 本多岩次郎 佐々木忠二郎

○桑樹萎縮病調査報告第二號 明治三十一年三月刊行

治療試驗 豫防試驗 發病試驗 傳染試驗 調査委員前年ト同ジ

○桑樹萎縮病調査報告第三號 明治三十二年三月刊行

病原試驗(豫定治療試驗發病試驗傳染試驗病理試驗) 調査委員 鈴木梅太郎 大森順造 本多岩次郎 佐々木忠

二郎

本所は開設以來桑樹萎縮病の原因及其の豫防等に就き所員をして之れが調査に従事せしめ、前記の如く明治三十一年度に於て實施せる「桑樹萎縮の病理に關する實地的試験の成績を主として併せて愛知縣桑樹萎縮病試驗第六報告及各府縣下桑樹萎縮病調査報告の概要を收約編纂し「桑樹萎縮病調査報告第一號」として公刊し當業者の参考に資したのであるが、政府は明治三十年七月に至り桑樹萎縮病調査會を設け、その研究調査を盡すに至つた。かくしてその調査研究の結果を輯録して、前記の如く明治三十一年に第二號を、明治三十二年に第三號を夫々公刊し當業者の参考に資した。然るに明治三十二年四月に至り從來本所が行ひ來つた桑樹萎縮病調査はこれを農商務省農務局に移して繼續調査をなすこととなり、その研究調査せる事項を輯録して左記の如く、之を公刊し當業者の参考に資したのである。

○桑樹萎縮病調査報告第四號 明治三十三年三月刊行

○桑樹萎縮病調査報告第五號 明治三十四年三月刊行

○桑樹萎縮病調査報告第六號 明治三十五年三月刊行

○桑樹萎縮病調査報告第七號 明治三十六年三月刊行

本所は桑樹凍害の豫防及善後策講究のため特に委員を設けて、これが試験を施行せしめその成績の概要を摘録し、これを左記の如く夫々公刊し當業者の参考に資した。

○桑樹凍害試験成績第一 明治四十一年二月刊行

- 試験委員 技師 辻 暢太郎 同 林 驛作 同 中村雅次郎 同 明石 弘
- 桑樹凍害試験成績第二 明治四十二年二月刊行
 技師 辻 暢太郎 同 林 驛作 同 中村雅次郎 同 明石 弘
- 桑樹凍害試験成績第三 明治四十三年四月刊行
 技師 林 驛作 同 中村雅次郎 技手 宮澤 錦雄 囑託員 井上柳梧

蠶種の配付
 蠶種の配付事務は前記の如く本所は既に蠶業試験場時代から行ひ來たつたことであり、然かも年々その配付請願者増加し限りある蠶種數量を以つてしては、その要求を充たし得なかつたので遂に蠶種配付規則（明治廿九年五月農商務省令第五號）を制定し、蠶種の配付請求者を一定の資格に於て（二反歩以上の桑園を所有し毎年二百枚以上の販賣用蠶種を製造する者）制限するに至つた。その後蠶種配付規則は前記の如く明治三十五年五月、三十五年十一月改正されて、其第一條に左記の如く規定された。

- 蠶種配付規則（抄） 明治三十五年十一月農商務省第二二號
- 第一條 蠶業講習所ニ於テ製造スル蠶種ハ原種トシ左ノ各號ノ一ニ該當スル者ニ限り無代價ニテ配付ス
- 一 蠶種検査法ニ依ル蠶種製造者
- 二 蠶絲業ニ關スル學校 講習所 傳習所又ハ試験場

右の蠶種配付規則によりて配付せる蠶種の數量を表記すれば、次の如くで明治四十五年以降に於ては蠶種配付事務は、之を原蠶種製造所に移屬したので、蠶種配付數量の記載を缺くのである。

年 度	第一條第一號による配付		第一條第二號による配付		合 計	
	人 員	數 量	人 員	數 量	人 員	數 量
明治三五年	七〇	二三、二二一	一四	二、四八一	八四	二五、六〇二
明治三六年	一五五	五六、八七五	四六	一一、二八四	二〇一	六七、九五九
明治三七年	八四	三四、五七八	三七	六、一六七	一二一	四〇、七四五
明治三八年	六七	二九、一五〇	二五	七、八〇二	九二	三六、九五二
明治三九年	八八	三八、九七二	二八	七、九二二	一一六	四六、八九四
明治四〇年	八〇	三五、五二四	三二	九、四四四	一一二	四四、九六八
明治四一年	四六	二〇、二九六	三二	九、〇五七	七八	二九、三五三
明治四二年	六八	二九、七〇四	一六	三、六八二	八四	三三、三八六
明治四三年	三九	一四、三〇八	四一	二、一九七	八〇	一六、五〇五
明治四四年	三五	一一、〇八四	一九	二、四五二	五四	一三、五三六

巡回講習講話

當期間（自明治二十九年三月）に於て本所所員は、蠶業に關する試験講習其他所務に従事し、傍ら各地に出張し試験によりて得た成績其他蠶絲業に關し必要な事項は講話をなし、或は地方的な短期講習會の講師として各地に出張したこ

とは決して少くはなかつた、これに關して「大正二年東京蠶業講習所一覽」には次の様に記載して居る。

近時各地方農會同業組合若くは府縣官廳より技術官の派遣を請求するもの甚だ多く最近數年間に於ける實績に徴するに請求件數毎年百餘の多きに達せり、これらに對しては所務の許す限り其請求を容れ講習又は講話をなさしめ新業改良の思想を發達せしめ且實行を促しつゝありと雖もその派遣數は漸く請求數の半に過ぎざるは本所の甚だ遺憾とする所なり。

これに依りて觀ても當時講習講話による新業の社會教育が如何に要望されつゝあつたかが判るが、これに對して本所はその背負へる任務に鑑みて積極的に協力したのであつた。次表は各年度に於ける所員の講習講話のための出張件數を示して居る。

	三六年度治	三八年度治	三九年度治	四〇年度治	四一年度治	四二年度治	四三年度治	四四年度治	四五年度治
甲	一一〇	九一	一二三	一三〇	一五九	一五六	一九七	二九三	二二二
乙	四六	三四	三九	五一	四七	五〇	四七	六二	四九

但甲は各年度に於ける所員の出張件數（講習講話調査視察事務打合其他）を示し、乙は各年度に於ける所員の講習講話のための出張件數を示す。

質問應答其他

本所は當業者に對して、蠶絲業上の疑義に關し隨意質問するの便宜を得せしめ、又機械器具藥品に對して其適否精粗の如何に就き鑑定を與へたりして、我邦蠶絲業の進歩發達を促したのであつた。又當業者の蠶絲業上に關する質問

や應答或は鑑定の如何によりて、業者の新業に對する關心と熱意の程も窺はれる次第であるが、今當期間各年度事蹟報告に記載されたる質問應答及鑑定件數を記せば次の如くである。

	年次	三六	三八	三九	四〇	四一	四二	四三	四四	四五
質問應答	二九七 七四	二五七 一一六	二五四 一五八	三一二 一八九	二〇二 一八三	二〇三 一四八	二六四 一七四	二一八 二三〇	一五四 一二九	
鑑定	七四	一一六	一五八	一八九	一八三	一四八	一七四	二三〇	一二九	

質問應答は極めて廣汎多岐に亙つて行はれたであらうと思はれるが、その内容に關して事蹟報告に記載を缺くが故に窺知し難いが、鑑定に關して今明治四四年度事蹟報告に於て、その内容を觀るに次の如くである。

鑑定 二百三十件

内 蠶種並蠶兒	一二件	フォルマリン分析	一一四件	繭	五件
寒暖計並乾濕計	六件	顯微鏡	五件	桑苗	四件
養蠶器具器械	二九件	消毒器	六件	藥品	一六件
製絲用器具器械	一〇件	製絲用水	一五件	雜	七件
生絲	一件				

第四章 敷地・建物・桑園の變遷

一 明治二十年四月現在

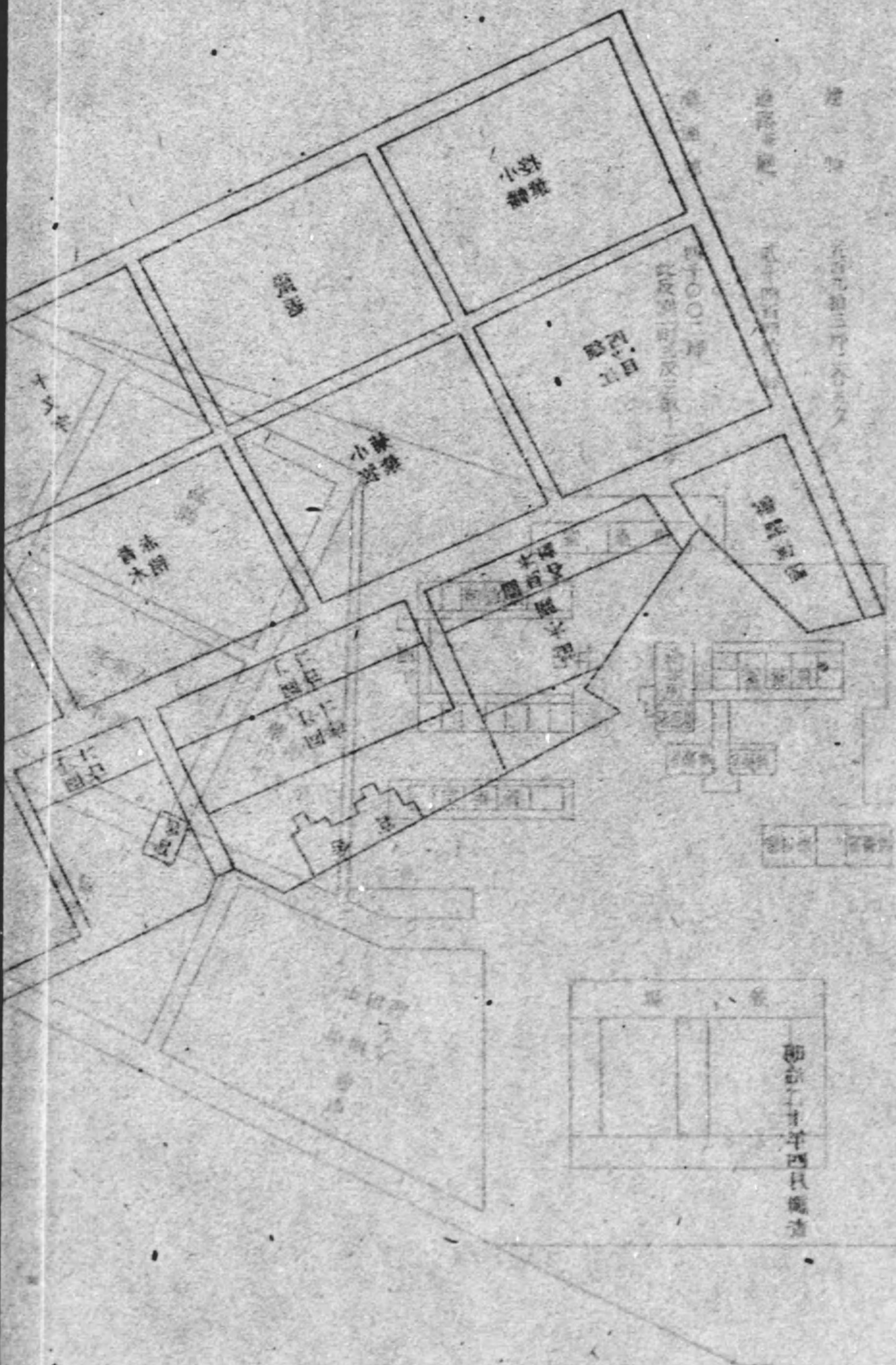
農商務省農務局蠶病試驗場が明治十九年十月地を西ヶ原にトして以來當局者の努力に依つて敷地、建物、桑園は次第に擴張せられたが、その蠶病試驗場が蠶業試驗場と改稱した明治二十年四月現在に於て建物坪數五九三坪二五桑園四〇〇二坪 道路庭二四四二坪で、其建物の配置は別圖の示す通りである（蠶病試驗成績第四報掲載）

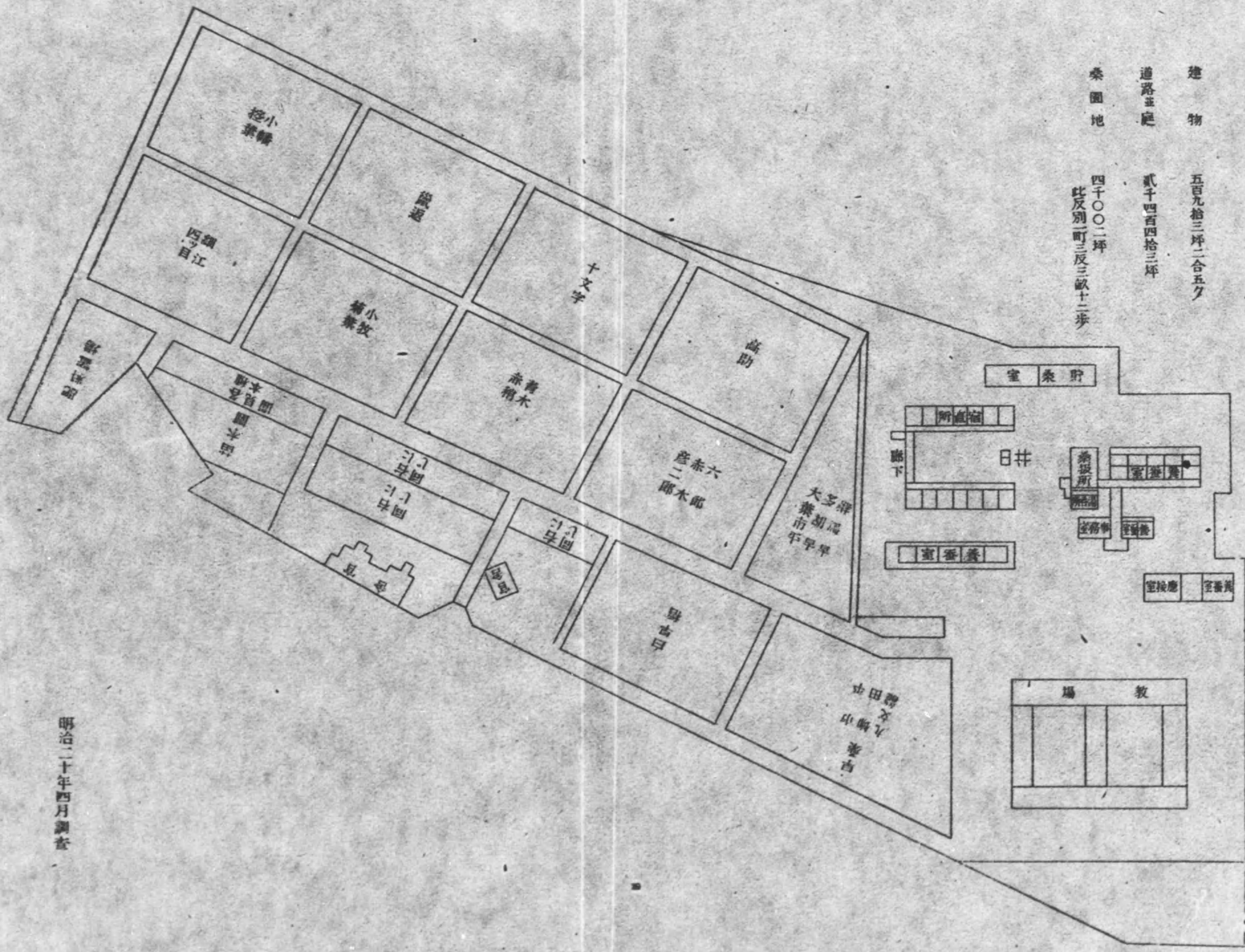
一 明治三十四年十二月現在

明治二十年四月現在に於ける敷地建物坪數桑園は、其後異動し擴張されたが、明治三十四年十二月現在に至る其間の變遷の狀況は之れを明示すべき資料を缺くが故に判らない、茲では明治三十四年度東京蠶業講習所一覽に據つて同年十二月現在の敷地建物桑園を記述すれば次の如くである。

敷地 本所敷地へ東京府北豐島郡瀧野川村大字西ヶ原ニアリ農事試驗場本場ト其構ヲ共ニシ地積四四四二坪五アリ
建物 本所建物ハ其坪數總計二二〇一坪七一ニシテ三十九棟ニ分ケレ其詳細ハ左ノ如シ

一事務室	一〇二・七五 ^坪	一棟	一研究室	一五・七五 ^坪	事務室同棟
一教室	九九・〇〇	一	一微菌培養室	三・〇〇	一



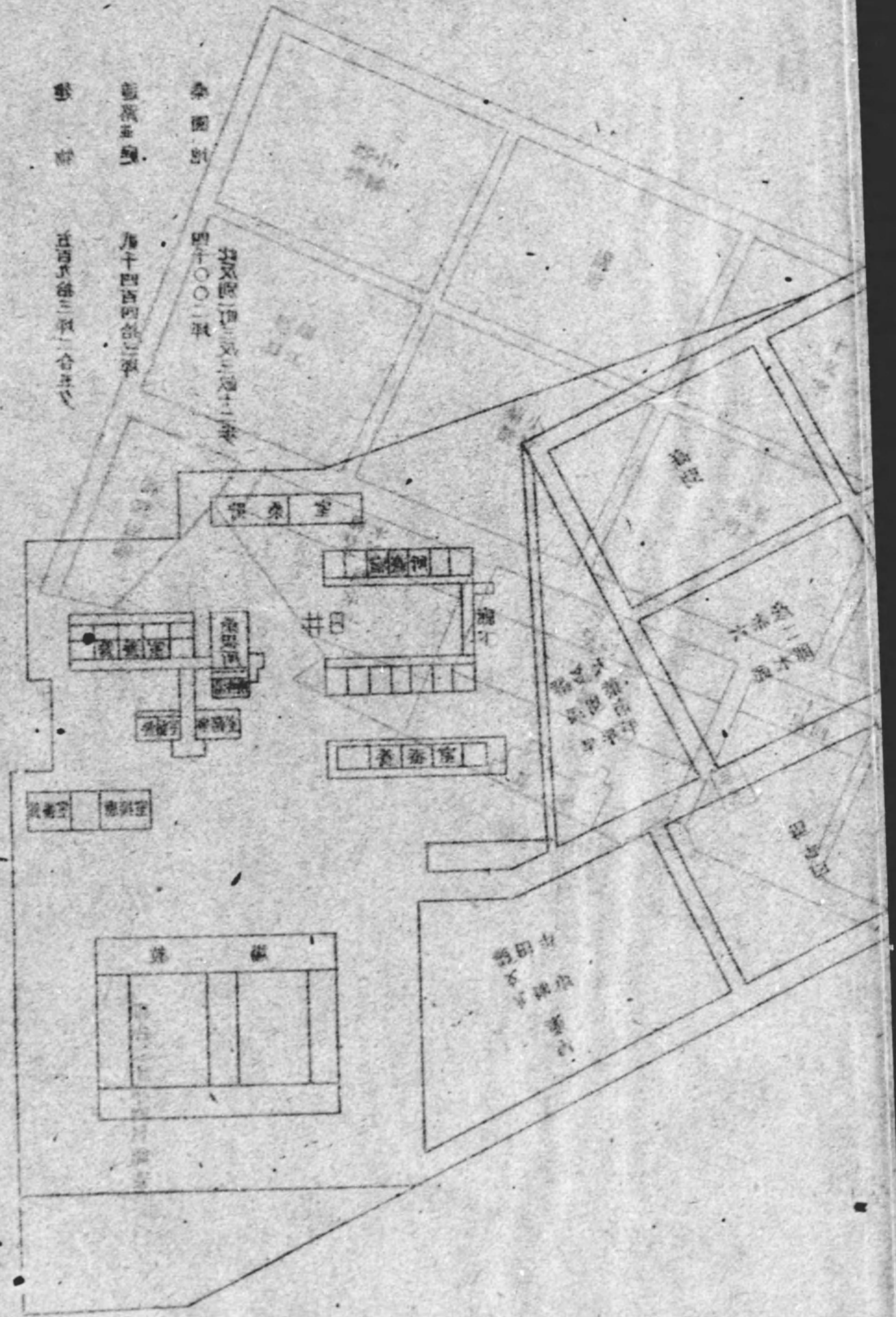


建 物 五百九拾三坪一合五夕
 道路並庭 貳千四百四拾三坪
 桑園地 四千〇二坪
 此反別町三反三畝十二步

明治二十年四月調査

一 化學實驗室	三二·二五	一	昆蟲試育室	三五〇	一
一 養蠶試驗室	五七·五〇	一	養蠶試驗室附屬貯桑室	七·五〇	一
一 蠶病試驗室	三一·七五	一	繭乾燥室	一五〇〇	一
一 養蠶傳習室	三〇六·五〇	四	消毒室	六〇〇	右卜同棟
內本科二年傳習室	九九·五〇	一	製絲場	一〇九·七五	三
右附屬貯桑室	二一〇〇	一	內事務室	三六·二五	一
本科一年傳習室	七一〇〇	一	繰絲並機關室	六七·五〇	一
別科傳習室	一一五〇〇	一	石炭置場	六〇〇	一
一 第一寄宿舍	九一〇〇	一	車夫溜所	二〇〇	一
一 第二寄宿舍	四七·五五	一	事務室附屬便所	二·三三	一
內舍監室	四〇〇	一	寄宿舍附屬便所	五〇〇	一
診察室	五〇〇	一	官舍	一一〇·七五	五
寄宿室	三八·五五	一	堆肥所	二四·五〇	一
一 食堂並賄所	四三〇〇	一	肥料溜所	六〇〇	一
一 宿直室·小使室	三四·三三	一	合計	一一〇一·七一	三九

第一編 蠶業試驗場及蠶業講習所時代



一 右附屬物置 一五・〇〇
 一 物置 三一・〇〇 一
 桑園 桑園ハ構内ニ於テ六四七七坪（二町一反五畝二十七步）府下南足立郡江北村大字沼田川端耕地ニ於テ六九二九坪（二町三反二十九步）合計一三四〇六坪ニシテ見本園試驗園春蠶用園及秋蠶用園ノ四種ニ別タル其詳細ハ左ノ如シ而シテ川端耕地桑ハ春蠶用園ナリ。
 構内桑園二町一反五畝二十七步ノ内 見本園一反步試驗園一町二反四步春蠶用園一反七畝十九步夏秋蠶園六反八畝四步。

一 明治三十六年三月現在
 明治三十五年度に於テ製絲部が新設されたので、敷地に異動を生じ建物其他施設に大なる擴充を見るに至つた、今明治三十五年度事蹟報告に據つて、同三十六年三月現在の敷地建物桑園を觀ると次の如くである。
 敷地 本所敷地は東京府北豐島郡瀧野川村字西ヶ原一七四番地ニアリテ農事試驗場本場ト其構ヲ共ニス 本年度ニ於テ製絲場建設ノタメニ二二六坪ヲ増加シ總六五六八坪五トナレリ
 建物其他 本年度ニ於テ新築又ハ改築セル建物機械其他ノ營造物ハ在ノ如シ

養蠶部

一 事務室標本室	六六坪	一棟	一 實驗室	四〇坪	一棟
一 貯桑室	二六	一	一 事務室	一九	一
一 寄蟲標本室	六	一	一 肥料小屋	一五	一

但實驗室事務室肥料小屋ハ舊桑樹萎縮病調査用建物ニシテ農務局ヨリ引繼ヲ受ケタルモノ内事務室肥料小屋ハ庚申塚桑園ニアリ。

製絲部

一 事務室(改築)	二四坪	一棟	一 貯繭庫	三〇	一
一 男生教室	四〇	一	一 男生寄宿舎	四〇	一
一 女生教室	四〇	一	一 女生寄宿舎	五五	一
一 女生浴室	七・五	一	一 女生食堂	二一	一
一 第一製絲場	六二・五	一	一 合置官舎(新築)	一三〇	一
一 第二製絲場	七〇	一	一 教師寄宿舎	二四	一
一 右附屬揚選仕上場	四〇	一	一 宿直室附小使室	一一・二五	一
一 機關室	三二・五	一	一 煙突	一基鐵製高八〇尺	一
一 貯炭所付男生浴室	二二・七五	一	一 貯水濾附濾水所	一ヶ所鐵瓦製凡千石入	一
一 繭取扱所	一一	一	一 給水タンク	一ヶ鐵製凡五〇石入	一
一 繭乾燥場	三八	一	一 井戸	三ヶ所深さ凡五〇尺	一

一 汽 機(新築)	一 基コルニツシニ形	一 汽 機(新築)	一 基 五馬力
一 汽 機	一 基コルニツシニ形	一 ドンキーポンプ(新調)	一 基
一 合 監 官 合	三七	一 繰 絲 機 械	一 臺 木 鐵 混 製 再 繰 式 二 六 窓
一 汽 機	一 基 十馬力	一 揚 返 機 械(新調)	三 臺 御 法 川 鐵 製
一 繰 絲 機 械	一 臺 木 鐵 混 製 直 繰 式 二 六 窓		一 臺 御 法 川 鐵 製
一 繰 絲 機 械(新調)	五 臺 二 四 窓		一 臺 御 法 川 鐵 製

一四〇

但繰絲機械五臺中ニ伊太利式直繰機械一臺、ヘルトウ會社製伊太利式直繰機械一臺、御法川鐵製六口繰一臺、御法川四口繰一臺、木鐵混製ノモノ一臺アリ

桑園 構内桑園ハ製絲場建設ノタメニ二二六坪ヲ減シタリトモ瀧野川村字三軒屋ニ於テ三七五〇坪ヲ新設シ又農務局ヨリ舊桑樹萎縮病試驗地(巢鴨村字庚申塚)六九三二坪ノ引繼ヲ受ケタルニヨリ、差引八五五坪ヲ増加セリ南足立郡江北村大字沼田川端耕地桑園七八五坪六五ヲ加フルトキハ合計二二八八八坪六五(七町六反二畝二八歩)トナル即チ次ノ如シ

所 在	桑園面積	道敷其他	合 計
構 内 桑 園	四三五・〇	〇	四三五・〇
庚 申 塚 桑 園	六一二・五	八〇六・〇	六九三・〇
三 軒 屋 桑 園	二九三・〇	八二〇・〇	三七五・〇
川 端 耕 地	六九二・九	九二七・〇	七八五・六五

一 明治三十六年三月以後大正二年迄の變遷

明治三十六年三月以後の土地建物等の異動を見るに、明治四十二年長野縣松本に夏秋露部の新設及明治四十五年其の原露種製造所への移屬に伴ひて著しき變動があつたが、大體擴充の一路を辿つたのである、即ち次表はこれを示して居る。

年 度	敷 地			建 物		
	西ヶ原構内	庚申塚	松 本	西ヶ原構内	庚申塚	松 本
明 治 三 五	六五六八・五〇	〇	〇	不明	〇	〇
明 治 三 九	六五六八・五〇	〇	〇	二〇八九・五二	〇	〇
明 治 四 〇	六五六八・五〇	〇	〇	二二二三・六〇	〇	〇
明 治 四 一	八五六八・六五	〇	〇	二二三三・一四	三七・〇〇	二八六・七八
明 治 四 二	八五六八・六五	〇	〇	二九四一・五	三七・〇〇	四一七・二八
明 治 四 三	八五六八・六五	〇	〇	二九四一・五	三七・〇〇	四一七・二八
明 治 四 四	八五六八・六五	〇	〇	二九四一・五	三七・〇〇	四一七・二八
明 治 四 五	八五六八・六五	〇	〇	二九四一・五	三七・〇〇	四一七・二八
大 正 二	一〇一〇・八・六五	一〇〇〇・〇〇	〇	二五四四・九三	四六・五〇	五八八・七九

但大正二年度ニ於テハ右ノ外ニ三軒家ニ建物一棟(建坪一二坪)アリ。

年度	乘 園 面 積 (坪)			
	西ヶ原構内	庚申塚	三軒家	江北村 鹿濱新田
明治三五	四三二・〇〇	六三二・〇〇	五三〇・〇〇	九八六・六五
三九	四三二・〇〇	六三二・〇〇	五三〇・〇〇	七六六・六五
四〇	不明	六三二・〇〇	五三〇・〇〇	七六六・六五
四二	四三二・〇〇	六三二・〇〇	五三〇・〇〇	七六六・六五
四三	四三二・〇〇	六三二・〇〇	五三〇・〇〇	七六六・六五
四四	四三二・〇〇	六三二・〇〇	五三〇・〇〇	七六六・六五
大正二	四三二・〇〇	六三二・〇〇	五三〇・〇〇	七六六・六五
				信州松本
				岩淵村袋

大正二年度末現在即ち東京農業講習所として最終年度に於ける建物につき、その主要なるものを挙げ、尙その配置圖を次に掲げることとする。

事務室	木造及二階建	六六坪
右附屬物	渡廊下、間、ポンプ置場	
門、門衛所夜香人詰所、物置、井戸		
倉庫	煉瓦造二階建	一一坪二五
教室及事務室	木造反葺二階建	八七坪五〇
右附屬物	渡廊下講習生控室	
教室及事務室	木造瓦葺平屋	六六坪〇二
教室及宿直室	スレイト及瓦葺	一五五坪〇〇
小使室湯呑所	鐵板葺二階建	
右附屬物	間、渡廊下	
實験室	木造瓦葺平屋	五六坪〇〇
右附屬物	渡廊下、細菌培養室、間	
貯糞室	木造瓦葺平屋	二四坪〇〇
右附屬物	渡廊下	
糞種貯藏庫	石造瓦葺平屋	七坪一三

穀類乾燥所	煉瓦及木造トタン葺平屋	八坪〇〇
温風室	煉瓦造硝子葺平屋	一一坪八三
實験室	木造瓦葺二階建	二四坪〇〇
右附屬物	渡廊下宿直室及小使室間門生垣	
敷室	木造瓦葺平屋	四〇坪〇〇
右附屬物	渡廊下	
第一葺室	木造瓦葺平屋	三八坪七五
右附屬物	渡廊下	
第二葺室	木造瓦葺二階建	七一坪
第三葺室	木造瓦葺二階建	一三二坪二五
右附屬物	間、渡廊下	
第三葺室	木造瓦葺二階建	一三二坪二五
右附屬物	間、渡廊下	
第四葺室	木造瓦葺二階建	四〇坪〇八
右附屬物	渡廊下	
第五葺室	木造瓦葺二階建	五一坪七五
右附屬物	渡廊下到乘人休所、貯糞室	
第六葺室	木造瓦葺二階建	三一坪五〇
右附屬物	渡廊下	
製絲室	木造瓦葺平屋	二四坪五〇
右附屬物	渡廊下	
貯糞室		二〇坪五〇
貯糞庫		三〇坪〇〇
糞取扱所及乾燥所		四六坪一七
右附屬物	渡廊下	
第一乾燥室	木造トタン葺平屋	一坪三六
右附屬物	土藏造トタン葺平屋	一坪八六
第二乾燥室	木造トタン葺平屋	〇坪八六
第三乾燥室	木造トタン葺平屋	一五坪七五
第四乾燥室	木造トタン葺平屋	四四坪〇〇
右附屬物	渡廊下	
右附屬物	渡廊下	
第七葺室	木造瓦葺平屋	四九坪五〇
右附屬物	刈藁所、渡廊下	
第一製絲場	木造瓦葺二階建	七七坪五〇
右附屬物	繰絲機械、揚返機械、水槽	
汽爐室	木造瓦葺平屋	三二坪五〇
右附屬物	汽爐、煙筒、汽機、唧筒、井戸	
給水爐過熱器、タンク、貯水		
備、貯糞所及浴室渡廊下		
第二製絲場	木造瓦葺二階建	一一〇坪〇〇

第一編 農業試驗場及農業講習所時代

一 右 附 屬 物 練絲機械、厠、渡廊下 第三製絲場 木造瓦葺二階建 四七坪一二 第四製絲場 木造瓦葺二階建 五八坪〇〇 肥料倉 木造瓦葺平屋 二〇坪〇〇 第一寄宿舎 木造瓦葺二階建 一二九坪五〇 右 附 屬 物 厠、渡廊下、會食所 炊事場、排水溝、板塀、井戸洗面所、井戸家形門 官舎(六棟) 木造瓦葺平屋 一五二坪〇〇 右 附 屬 物 井戸門板塀	一 右 附 屬 物 渡廊下 第二寄宿舎 木造瓦葺二階建 四七坪一二 第三寄宿舎 木造瓦葺 二階建五八坪〇〇 右 附 屬 物 會食所、浴室、厠、井戸、門、 板塀、洗面場、洗濯場、物干場 第四寄宿舎 木造瓦葺平屋 四一坪七五 右 附 屬 物 井戸洗面所、井戸家形、板塀 第五寄宿舎 木造瓦葺及トタン 三九坪五八 右 附 屬 物 井戸、門、塀
--	--

第五章 職員の異動

職員定員の變遷

職員定員が制定されたのは、蠶業講習所官制の勅令發布後であるが、この後幾度かの改正に伴ひて、次の如く職員定員に變動があつた。

年 次	所長	技師	技手	書記	備 考
明治二九・三・一八日 勅令第二八號	一	四	六	四	二九・三・三一日ヨリ施行

明治三一・一〇・二二日 勅令第二八七號 改正	一	四	五	三	三一・一・二一日ヨリ施行
明治三二・三・三〇日 勅令第八九號 改正	一	七	二	六	三二・四・一日ヨリ施行
明治三五・三・二七日 勅令第一〇六號 改正	一	一	七	七	三五・四・一日ヨリ施行
明治三九・三・二九日 勅令第四九號 改正	一	四	一	七	三九・四・一日ヨリ施行
明治四一・六・二日 勅令第一四七號 改正	一	九	二	〇	四一・六・二日ヨリ施行
明治四二・三・三一日 勅令第七六號 改正	一	九	三	〇	四二・四・一日ヨリ施行
明治四三・三・二六日 勅令第八三號 改正	一	二	二	四	四三・三・三一日ヨリ施行
明治四五・四・二三日 勅令第九六號 改正	一	七	一	八	四五・四・二三日ヨリ施行
大正二・六・一三日 勅令第一九八號 改正	一	七	一	七	二・六・一三日ヨリ施行

歴代所長(又は監理者)

明治十九年十月以後大正三年迄に於ける所長(又は監理者)をその歴任次第に擧ぐれば次の如くである。

年 度	名 稱	所長(又は監理者)	年 度	名 稱	所長(又は監理者)
明治一九	蠶病試験場	岩山 敬義	明治二七―二八	同	同 人
明治二〇―二二	同	宮島 信吉	明治二九―三〇	蠶業講習所	練木 喜三
明治二三	同	前田 正名	明治三一―三五	同	同(兼) 澤野 淳
明治二四	農務局假試験場	齋藤 修一郎	明治三六	同	同 人
明治二五	蠶事部	西村 捨人	明治三七―大正	同	本多岩次郎
明治二六	蠶業試験場	藤田 四郎	大正三	東京高等蠶絲學校	校長 本多岩次郎

蠶業講習所官制が始めて制定されたのは、前記の如く明治二十九年三月十八日であるが、その初代所長に就任されたのは練木喜三である。

練木氏は嘉永三年十一月一日東京下谷に生れ（郷里は武州糟壁七代前伊勢）夙に動植物の研究に志し又醫學の造詣深く佐藤進、池田謙齋氏等とも修交あり、明治八年大學部御用掛準講師となり其間昆蟲學調査の爲勸農局に出仕し、十三年に駒場農學校に植醫科主任植物病理學科教師を囑せられ、蛆蟲圖解苞蟲圖解の著あり、十四年内國勸業博覽會審査官に任ぜられ、同十六年蠶病微粒子に就て勸業諮問會席上に報告し別に蠶病の注意と題する一書を公にした。尤も我國に於ける微粒子の研究は曩に明治八年佐々木長淳氏によりて着手せられ、本邦種にも該病毒の寄生せることを確められたるも未だ公表せらるゝに至らざりしが、練木氏の研究公表は著しく蠶界を震駭し遂に蠶病豫防に關する我當業者の注意心を喚起し蠶種検査規則發布の動機となつた。明治十七年蠶病試驗場が設立されるや披でられて、同場主任となり翌年始めて蠶業傳習生の入場を許可し微粒子病檢定法を傳習するの傍ら蠶體の解剖生理病理の大意を教授した。同十九年同場が西ヶ原に移轉せらるゝと共に之に従ひ二十九年蠶業講習所となつて獨立するに及び所長を命ぜられたが、三十一年十一月職を退き後宮城縣養蠶顧問に迎へられ、蠶業界に於ける先達であつたが明治四十三年三月二十一日長逝された。（本多岩次郎先生傳より轉載）

澤野淳が蠶業講習所長に就任されたのは明治三十一年十月三十一日で當時氏は農事試驗場場長であつた。

澤野淳は舊兵庫縣の藩士で安政六年四月攝津の國有馬郡三田屋敷町に生れ幼時より夙に心を蠶業に寄せられ駒場

農學校に入りて、螢雪の業を積まれ、明治十六年二月同校を卒業し十八年八月駒場農學校助教授に任じ判任六等に叙せられ、後次第に昇進して農商務技師試補と成り廿二年三月獨乙漢堡港へ被差遣兼て獨佛米三國及印度柴棍地方農事の實況視察を命ぜられ、歸朝の後農商務技師に任じ正七位高等官六等に叙せられた。明治二十六年四月農商務省農事試驗場の設置と共に同場技師兼試驗場長を拜し、同三十一年蠶業講習所技師兼所長を兼ね高等官三等從五位に陞叙し三十二年二月農學博士の學位を授與せらる。尙此の間第四回内國勸業博覽會審査官第二回水産博覽會審査官等に任命せられ、偶々明治三十六年七月第五回内國勸業博覽會審査官として、大阪府滯在中に宿病俄かに再發して同月二十六日遂に逝去され、特に正五位勳五等に叙せられた。

本多岩次郎は澤野淳に次で東京蠶業講習所長に就任（明治三十六年七月二十七日）大正三年四月東京蠶業講習所が東京高等蠶絲學校となり校長に就任、爾後昭和十一年四月逝去さるゝ迄校務に盡瘁された。氏に就ては後章に之を記載する。

職員の異動

東京蠶業講習所としての最終年度即ち大正二年度の職員を記せば次の如くである（大正二年四月東京蠶業講習所一覽）

就任年

明治二二年	所長・蠶業講習所技師	本多岩次郎	明治四四年	蠶業講習所技師	安東 誠
明治二九年	蠶業講習所技師	辻 暢太郎	明治三九年	蠶業講習所技師	霜 新八郎
明治三七年	農事試験場技師	上田榮次郎	明治四三年	蠶業講習所技師	三室戸善光
明治三三年	兼蠶業講習所技師	林 驛作	明治四四年	蠶業講習所技師	波多野岩吉
明治三五年	兼特許局審査官	石居 一郎	明治四一年	蠶業講習所技師	岡戸 一榮
明治三六年	蠶業講習所技師	中村雅次郎	明治四三年	蠶業講習所技師	丹羽 四郎
明治三二年	蠶業講習所技師生徒監	土屋 泰	明治 年	蠶業講習所技師	小田中染十郎
明治三八年	兼農商務技師	明石 弘	明治三九年	書	戀田 六造
明治三三年	兼蠶業講習所技師	町田 穰	明治四一年	書	記 海老原信七郎
明治四二年	(兼)蠶業講習所技師	荒木 武雄	明治四五年	書	記 山口角之丞
明治四一年	蠶業講習所技師	竹内 秀雄	明治四五年	書	記 中野 信正
明治四三年	原蠶種製造所技師	森 繁太郎	明治三六年	囑託員農事試験場技師	吹井健三郎
明治三五年	兼蠶種製造所技師	松下憲三郎	明治三九年	囑託員	圓中 文助
明治四三年	兼蠶業講習所技師	鈴木 英亮	明治三九年	囑託員	笹原 勝治
明治三九年	蠶業講習所技師兼生絲検査所技師・特許局審査官	小松 豊作	明治三九年	囑託員	野村彦太郎
明治三五年	蠶業講習所技師	岩淵 平介	明治四一年	囑託員	淺野 肇
明治三六年	蠶業講習所技師	坪井 啓作	明治四四年	囑託員	關口八重吉

明治四四年	囑託員	中央氣象臺技師	吉田 得一	明治四五年	囑託員	東京帝國大學農科	麻生慶次郎
明治四四年	囑託員	マスタールオブアツ米國エール大學	山崎 壽春	明治四五年	囑託員	大學教授農學博士	石原 修
明治四四年	囑託員		小林 行昌	明治四五年	囑託員	農商務技師	鹽谷清多郎
明治四五年	囑託員	第一高等學校教授	山川 弘毅				

次に明治十九年蠶病試験場設立以降の職員を就任順に記述すれば、概要左の如くである。

明治一九・一〇	同三一・一〇	練木 喜三	明治三一	同三六	同 人
明治一九	同三二・六	松永 伍作	明治二二	同二一	田中節三郎
明治一九	同二九・四	芝山 直清	明治二二	同二一	本田 幸介
明治三二	同三五 二	同 人	明治二二	同二一	美代 清彦
明治二〇	同二一	齋藤 素軒	明治二二	同二一	志岐 守秋
明治二〇	同二一	高橋 信貞	明治二二	同二一	北恒 保
明治二五	同二五	同 人	明治二二	同二六	田原休之丞
明治二〇	同二〇	吉田 長治	明治二九	同二九	同 人
明治二〇	同二一	小笠原金吾	明治二二	同二九	大林 雄也
明治二〇	同二一	小野孫三郎	明治三二	同三六	同 人
明治二〇	同	澤野 淳	明治三三	同二三	青田 元

明治三三	同三三	横井 時敬	明治三二	同三二	下井 盛夫
明治二四	同三一	今西直次郎	明治三一	同三四	中川 久知
明治二五	同三一	佐々木忠二郎	明治三二	同三七	松尾 重信
明治四三	同四四	同 人	明治三二	同三三	豊永 眞里
明治二八	同三三	廣瀬 次郎	明治三五	同三六	同 人
明治二七	同三六	二宮 鶴松	明治三三	大正三	町田 穰
明治二九	大正三	辻 暢太郎	明治三三	同三五	鈴木梅太郎
明治二九	同四〇	石渡 繁胤	明治四一	同四五	同 人
明治二九	同三〇	月田藤三郎	明治三三	同三五	關口八重吉
明治二九	同三〇	市川延次郎	明治四四	大正三	同 人
明治二九	同三一・四	毛呂 正容	明治三三	大正三	林 驥作
明治二九	同三四	野村彦太郎	明治三四	同四一	田澤俊三郎
明治三〇・一〇	同三一	針塚長太郎	明治三五	同四四	三谷 徹
明治三〇	同三三	齋藤 孝	明治三五	同四〇	永井 米藏
明治四〇	同四四	同 人	明治三五	大正三	石井 一郎
明治三〇	同三〇	兒玉 實詮	明治三五・八	同三六	古武橋次郎
明治三〇	同三三	丹羽敬太郎	明治三五	大正四	松下憲三郎

明治三五・一〇	同三九	岩淵 修三	明治三八	大正二	坂本 家則
明治三五・一〇	同三六	江田録次郎	明治三九	同三九	岡戸 一榮
明治三五	同三八	岡島 銀次	明治三九	大正三	霜 新八郎
明治三六	同三六	池本 純吉	明治三九	同四〇	木下彌八郎
明治三六・七	同三六	吉田 虎雄	明治三九	同四三	肥後 俊彦
明治三六	同三六	大島子之助	明治三九	同四四	大石和三郎
明治三六	同三六	圓中 文助	明治四〇	同四二	チエフリースコット
明治三五	同三七	西田 藤次	明治四〇	同四一	鮫島 茂
明治三六	同三八	河備佐久造	大正三	同三	同 人
明治三六	同三七	有働 良夫	明治四〇	同四三	加藤 小市
明治三六	同三一	麻生慶次郎	明治四〇	同四二	惠利 惠
明治三七	同四一	江尻 常雄	明治四一	同四一	吉岡 半五
明治三七	同四五	山越 八郎	明治四一	同四二	平瀬 享三
明治三七	三九	橋本重兵衛	明治四一	大正二	竹内 秀雄
明治三七	四四	高橋伊勢次郎	明治四一	同四三	宮澤 錦雄
明治三七	三九	片岡 謙	明治四一	同四二	吉田 貞雄
明治三八	四二	兼弘 正雄	明治四一	同四四	松村 吉則

明治四二	同四四	荒木 武雄	明治四三	同四四	加賀山辰四郎
大正 三	同 三	同 人	明治四三	同四四	田中 茂穂
明治四二	同四三	田澤秀四郎	明治四三	同四四	石川 貞吉
明治四二	同四三	館 三之吉	明治四四	大正三	山崎 壽春
明治四二	同四三	ローラントバスカ ルイーストレーキ	明治四四	同四五	河田 岩根
明治四二	同四四	石原 純	明治四四	大正二	安東 誠
明治四二	同四三	中澤 毅一	明治四五	大正二	飯野 知次
明治四二	同四四	上田 義雄			

第二編 東京高等蠶絲學校時代

第一章 總 說

大正三年三月三十一日文部省直轄諸學校官制が改正されて、本校（當時東京蠶業講習所）は東京高等蠶絲學校と改稱し、本多校長（當初は校長事務取扱を命ぜられた）以下、教授、助教、書記の任命が行はれ、又同日東京高等蠶絲學校規程が制定され、本校の學科を養蠶、製絲の二科となすこと、及び製絲教婦養成科設置の旨が定められ、次で授業科目其他に關する規則、諸規程が制定されて、茲に本校は蠶絲業に關する高等專門教育機關として、その負荷の大任を遂行すべく一步を踏み出したのであつた。即ちこの年、養蠶科製絲科各々二十五名の募集人員に對し養蠶科九十一名、製絲科六十四名の志願者があり（製絲教婦養成科は募集人員三十人に對し四十一名の志願者があり、二十五人の入學者を決定）入學試験に依つて養蠶科二十二名、製絲科十八名の第一回入學者を決定した。

その後學年の進行に伴ひ、歐洲大戰による我邦蠶絲業の躍進的な情勢に順應して、學科を増設して斯界の要望する人材の養成に努めた。即ち茲に敘述する迄もなく、歐洲大戰は歐洲主要諸國を悉く戰渦の中心に捲き込み、未曾有の規模に於てその生産力を破壊し世界市場に於ける各既得權を喪失せしめたが、我國は戰渦の中心から遠く離れて居た

ので、米國に次ぎ諸産業の未曾有の發展を勝ち得た。殊に蠶絲業は米國の大戦による好況を著しく反映してその躍進を遂げた顯著なものである。次の數字がこれを示して居る。

今大正三年一〇〇トスレバ八年ニハ養蠶戸數一三三、桑園面積一一六、生絲生産高一六九、ソノ價格五二二、是ニ大正九年一月ニハ生絲標準物備州上一一番四三六〇圓ノ高値ヲ現出シ、又機械大工場ノ進出が目立つタ。大正三年ト昭和三年ノ間ニ機械工場ハ四三二四カラ三五〇九ニ減ジ、十釜未満ノモノガ一八五一カラ二九四減ジタノニ、百釜以上ハ五六七カラ八九八ニ増加シ、座繰工場ハ二五六一〇五カラ六二〇八八ニ激減シ、機械ニヨル座繰ノ驅逐ト機械工場經營ノ擴大ガ顯著デアツタ。カクシテ昭和三年我が養蠶業ハ九三八四九〇九〇圓(昭和四年ニハ一億萬圓ヲ突破)ノ額ヲ、製絲業ハ數量ニ於テ一〇五八萬圓、價額ニ於テ八三五〇〇萬圓ノ生絲ヲ生産シ、世界生産ノ六〇%以上ヲ占メルニ至ツタ。

斯うした蠶絲業躍進時代に於て本校は大正八年五月、規則を改正し從來の養蠶科を第一部(後の養蠶學科)第二部(後の栽桑學科)の兩部に分ち、第二部に於ては桑園の肥培管理の指導經營に任ずる人材の養成を目的とした。蓋し當時漸く夏秋蠶飼育が普及發達して、稍もすれば桑園の經營は等閑視され、極言すれば掠奪的な經營の傾向さへ現はれ、桑園の荒廢顯著なるものがあつたので、これを救済せんとの意圖に出たのであつた。亦同年同月に新に養蠶實科を設置して、短期間(一ケ年間)に實際に役立ち得る知識技能を授けて、斯界第一線に人材を送り出した。蓋し急激な蠶絲業界の發展はその指導經營の人的要素を要することも切實であつたが、これは到底從來の規模に於ける高等蠶絲業教育機關によりては、充たし得なかつたし、近き將來に於ても充たし得る望みもなかつたし、又中等程度の

養蠶學校とても、その卒業生にして指導經營に就く者少くして、斯界の要請に應へ得なかつたからであつた。如何にこの種の人材が要望せられたかは、その入學志願者が常に募集人員を超過すること四・五倍に達した事實によりて、理解され得るかと思ふ。

時流は進展して恒に止まず、蠶絲業界もその價格關係に於て變動恒なく、その情勢平坦ならざる過程を辿り來たつたが、此の間に適應してその教課訓育・體育施設を改善擴充し負荷の大任の完遂に、これつとめた。後章記述の規則・諸規程の改廢制定にその一端が反映されて居る。

而して歐洲戦後の反動期に入り、殊に一九二九年の十月米國の金融恐慌に端を發する世界的經濟界不況期に出會ひ、他方人絹の急速な發展に煩されてか、斯界は尺進寸退の過程を辿るべく餘儀なくされ、繭絲の價格は慘落しその影響を茲に表現するに餘る數多くの悲むべき事態を生んだ。

繭絲價格累年比較(蠶絲業要覽より記載)

種別	年度	大正三年	同八年	同十三年	昭和元年	同五年	同六年	同七年	同八年
春繭	繭	五・一三	一一・九三	七・三七	九・二八	四・〇〇	三・〇八	二・五四	六・二五
夏繭	繭	三・五八	一一・二一	九・二二	七・三三	二・〇〇	二・九六	四・七〇	四・二七
生絲	繭	八二二	二二二八	一七八三	一五八〇	七七五	五八三	六九八	七六五

備考 繭價ハ横濱市場生絲標準物(對百斤)デアル